
バカとテストと召喚獣 ～常識人はつらいよ～

さすらいの旅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 ～常識人はつらいよ～

【Nコード】

N3704X

【作者名】

さすらいの旅人

【あらすじ】

文月学園に入学して2度目の春を迎えた天城修哉。常日頃から平穩に過ごしたいと思っている彼であったが、Fクラスに入ってしまった事によって平穩と言う単語は完全になくなってしまった。クラスメイトで友人である吉井明久、代表の坂本雄二等が色々とトラブルを起こしてしまうので、天城修哉は毎回巻き込まれてしまう。そんな常識人である彼が加わったドタバタ学園コメディ話です。

プロローグ（前書き）

さすらいの旅人です。試しとしてバカテスの原作沿いを書いてみました。

コレの更新は遅いですので、温かい目で見てください。

プロローグ

文月学園に入学して2度目の春。

道行く先には新入生を歓迎するかのように桜が咲き誇っている。見慣れている光景ではあるが、それでも目を奪われてしまう。そんな感じで歩いている俺、天城修哉あまぎしゅうやは学園の玄関前に着く。

「おはよう、天城」

「おはよう御座います、西村先生」

玄関前には黒い素肌にスーツを纏った、文月学園の生活指導担当の西村先生が立っており、声を掛けられた俺は挨拶をする。

この人はトリアスロンが趣味であり、生徒からは“鉄人”と呼ばれていた。因みに“鉄人”と呼ばれる事を嫌っている。

不屈きな事をしている生徒にとっては恐ろしい人だが、そうでない生徒には気さくに話しかけて相談に乗ってくれる優しい先生だ。

「どうしたんだ？ いつもは余裕を持って登校する天城が、ギリギリで来るとは珍しいな」

俺は後者の類に入るので、心配そうに何か遭ったのかと思って西村先生は尋ねてくる。

「…………… 何処かのバカが“もしかしたら遅刻しそうだから、明日の朝は起こしてくれないかな？”と頼まれたんですが、中々起きな

くて……」

「……………アイツか」

ギリギリで来る事になった理由を言うと、西村先生は呆れた顔をする。それは俺に対してではなく、バカの方に対してだ。

「と言う訳ですので、アイツは遅刻して来ます」

「……………はあっ…分かった。まあアイツの事は後にしよう。取り敢えず、コレを受け取れ。試験の結果だ」

「結果は見なくても分かるんですけどね」

西村先生は茶封筒を出すと、俺は渋々と言った感じで受け取る。

「しかしまあ、世界的に注目されている最先端システムを導入している学園なのに、何でこんな面倒な発表の仕方をするんですか？ こう言ったクラス編成の結果は、掲示板で張り出すと思いますが」

「普通はそうなんだがな。まあ、天城の言ったとおり、此处は注目の的となっている試験校だからな。この変わったやり方もその一環だ」

「試験校故の行為ってやつですか……………俺としては面倒ですけど」

俺は話を聞きながら茶封筒を破って中身を見ると、その中には紙一枚が入っており……。

「……………言つまでも無く、Fクラスですね」

紙には“天城修哉……Fクラス”と書かれていた。

「俺としては、天城を次の日に試験を受けさせたかったが……学園の方針でな」

「仕方ありませんよ。俺は振り分け試験当日に欠席しちゃったんですから」

本来であつたら試験に出席していた俺であつたが、訳あつて欠席してしまつた。その事に西村先生は氣遣つてくれたのか、俺の肩に手を置く。

「まあとにかく、今の教室で我慢してくれ……としか言えんな」

西村先生にそう言われた後、俺は校舎へと入ってFクラスへと向かつた。

Fクラスに向かっている途中……。

「あら、天城君じゃない。おはよう」

「おはよう、木下さん」

去年のクラスメイトであつた、優等生の木下優子が俺の前に立っていた。

「試験の結果はどうだったの？　もしかしてAクラスかしら？」

「まさか。俺程度の頭じゃ到底Aクラスは無理。良くてDクラス辺りだ。それに俺は試験を受けてないから、Fクラスだよ」

「試験を受けてないって……何か遭ったの？　まさか……」

「違う違う、今回は俺がちょっとしたトラブルに巻き込まれたって話。アイツは関係無いよ……まあ今朝は面倒な事になったけど」

木下が試験を受けなくなった原因が、俺の友人ではないかと思つて顔を顰めていたが、俺はすぐに訂正する。

「はあっ……どの道、貴方に迷惑を掛けているのね。天城君、もう吉井君と関わらないほうがいいんじゃない？　何時もトラブルを起こしては、貴方にまで被害が及んでいるし」

「最初はそう考えたけど、今はもう慣れたよ。それにアイツを放っておくと、また何を仕出かすか分からないから」

木下の言う吉井とは、俺の友人である吉井明久の事だ。明久とは中学からの付き合いで、騒動を起こしては、俺が毎回巻き込まれると言った展開になるトラブルメーカーだ。そして明久が騒動を起こした後は、俺が即行で鎮圧し、明久と騒動を起こした奴も一緒に説教する。そんな流れが何回も続いていた為、西村先生や他の教師達にまで同情的な眼差しを送られているのだ。

まあ何度も明久を説教している俺だが、それでも交友関係は続いている。明久は騒動を起こさなければ良い奴であり、俺が“明久以外

”の悩みがある時は励ましてくれるのだ。

と、俺がそんな事を考えている際に……。

キンコーンカーンコーン！

「あ、予鈴が鳴っちゃった。それじゃあ天城君、アタシはこれで」

「じゃあな」

予鈴のチャイムが鳴ってしまったので、木下はすぐに自分の教室に戻り始めた。

「ああそれと、Fクラスにはアタシの弟がいるから、何か変な事を仕出かしたら遠慮なく説教していいわよ」

「……………俺は説教役じゃないんだがな」

「冗談よ。それじゃ」

俺に別れを告げた木下が教室に入った場所は、高級ホテルかと勘違いする位の立派な設備であるAクラスだった。

「やはり木下はAクラスか……まあ成績優秀なアイツなら当然だろうが。さて、俺はさっさとFクラスへと行くか」

Aクラスに入った木下を見て少々羨ましいと思った俺であったが、すぐにFクラスへと向かったのであった。

オリキャラ紹介

名前 天城 修哉

身長 178cm 体重 62kg

趣味 読書・ゲーム

特技 剣道

外見 黒髪の短髪で、穏やかそうな顔付き。

性格 温厚（但し、キレたら物凄く怖い）

得意科目 現国・英語

本作品の主人公。

文月学園2-Fの男子生徒であり、数少ない常識人。何処にでもいそうな、真面目な少年。

振り分け試験時には、学園へ向かっている最中にトラブルが発生し、欠席扱いされてFクラス入りになってしまう。

クラスメイトである吉井明久とは中学からの友達で、明久がバカな事を起こしている際は、巻き添えに遭っている。明久を説教している事が多々あり、教師からは明久のストッパー役と認識して信頼さ

れている。

第一問（第一巻開始）（前書き）

原作本を片手に書いていると大変ですね。オリジナルを書いているより、時間が掛かります。

第一問（第一巻開始）

バカテスト 科学

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つあげなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応する為危険であるという点

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので鉄ではダメと言うひっかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけありませんでしたね。

天城修哉の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するからである

合金の例……鉄

コメント……恐らく明久は妙ちきりんな回答をしていると思います』

教師のコメント

おしいです。問題点は合っていますが、合金の方は引っかけあってし

まいましたね。次からは間違えないように。
それとコメントは書く必要はありませんよ、天城君。友達である吉井君に失礼だと思いますが？

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払ってなかった事』

教師のコメント

そこは問題じゃありません

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（↑すごく強い）

教師のコメント

すごく強いと言われても……本当に天城君の言ったとおり、妙ちきりんな回答ですね。

「……………本当にみすばらしい教室で、Aクラスとは大違いだ。月とすっぽんだよ」

Fクラス前に着いて早々、俺は余りの酷さに思わずAクラスと比較

してしまつた……比較する事態、Aクラスに大変失礼であるが。

「まあ今更何を言つた所で無駄だ。さつさと入ろう」

何時までも悲観する訳には行かないので、俺がドアを開けると……。

ガラッ！

「早く座れ、このウジ虫野郎」

いきなり長身のツンツン赤毛男に悪口を言われる事となつた。

「ん？ げっ！ 天城！ 何でてめえが此処に！？」

「……………おい坂本、お前は俺が入つて早々に悪口を言つておいて、嫌そつな顔をするとは…………喧嘩売つてるのか？」

教壇に上がっている男の名は、坂本雄二。コイツは明久と同様に、騒ぎを起こすトラブルメーカーだ。しかし坂本は明久より性質が悪く、騒ぎを起こしたにも拘らず、何食わぬ顔で明久の所為にしたり、捨て駒の如く平然と見捨てるのだ。言うまでもなく、コイツも明久と一緒に説教する対象の一人だ。坂本が責任転嫁したり、自分だけ助かつて逃げようとしている時は、俺の方で体罰を与えている。普通はそんな事をしたら問題になるのだが、先生達からは許可を得ているので問題無い。

そんな訳で坂本は俺を苦手としているので、下手に逆らう事は無いのだが……。

「ち…違つ！！俺はてつきり明久が来たんだと思つて…………！！」

「謝罪もしないで、すぐに言い訳か……どうやらまた説教をする必要がありそうだな、坂本」

「……！ わ…悪かった！！ 俺が悪かったから、説教は止めてくれ……！」

説教と言った途端に、坂本は俺に頭を下げながら謝った。

「全く、お前と言う奴は……今回はこれで勘弁してやる。次からは気を付けろ」

「………分かったよ。所で、何で天城が此処にいるんだ？ 俺の知ってる限りじゃ、お前の成績はCかDクラス並だった筈だが……」

話題を変える坂本は、俺が此処にいる理由を聞いてくる。

「訳あって試験を受けてない。その所為で俺はFクラス行き確定になって、此処に来たってことだ」

「……珍しいな。何時も真面目なお前が試験をすっぱかすとは……」

「だから言っただろ。俺は訳があつて受けてないと……」

「じゃあ一体何があつたんだ？ お前が試験を受けないってのは余程大事な事があつたのか？」

「………それは……」

坂本に言った所で絶対に信用はしないだろうと思いつつも、取り敢

えず言おうとしたが……。

「雄二よ。修哉が言いたくない事を無理に聞くのは良くないぞい」

横から爺言葉を喋りながら、話を中断させる男子生徒が割って入ってきた。

「何だよ秀吉。お前は聞きたくないのか？」

「お主の事じゃから、仕返しがてらに修哉の欠席理由をネタして、からかうつもりだったのじゃろう？」

「……………」

「俺はからかわれた所で聞き流すかな……………」

秀吉と呼ばれる男子生徒が俺を加勢するかのように、俺の前に立って坂本に指摘すると、坂本は凶星を突かれたかのように無言となる。そんな事をした所で俺には無意味だが……しつこかったら黙らせるけど。

それと俺の目の前にいる男子生徒は木下秀吉と言う。苗字で分かると思うが、コイツは木下優子の双子の弟だ。容姿が木下姉にそっくりで、女の子みたいな可愛い顔立ちをしているが、真正正銘の男。最初に会った時は、木下姉と勘違いをしていたが、男子の制服を着ていたので、すぐに男だと分かった。その事を木下姉に言ってみたが、何故か妙に感心してた事に疑問を抱いた。

その翌日に、秀吉は何故か別クラスである俺に会いに来て、友達になつて欲しいと言われたので、俺は快く了承したのであった。秀吉

が何故か俺と一緒にトイレで連れションをしたり、更衣室と一緒に着替えている事に嬉しそうな表情をしていたが。木下姉弟が揃って不可解な事をしている事に俺は全く分からなかった。

「ったく、相変わらず天城の味方をするんだな、秀吉」

「ワシは修哉の友達として、当然の事をしたまでじゃ。修哉よ、お主はもう座る席を決めておるかの？」

坂本に言うだけ言った秀吉は、俺の方を向いて話しかける。

「いいや。ってかその言い方だと、座る席は自由なのか？」

「うむ、此処は席順が自由なのじゃ。良かつたらワシの隣に座らんかの？」

「別に構わないが」

「そうか。ではワシの席はあそこじゃから、お主はその隣じゃ」

秀吉が指をさした方には、誰も座っている形跡が無い古そうな卓袱台とボロボロの座布団であった。俺は秀吉に言われたまま、その席にあったボロボロの座布団の上に座る。

「これから一年間、宜しくのう」

「……………随分と嬉しそうだな、秀吉。何か良い事でもあったのか？」

俺の隣に座りながら笑顔で言う秀吉に、俺は疑問に思いながら聞いてみたが……………。

「お主と一緒にじゃから嬉しいのじゃ。去年は別クラスじゃったからのう」

「…………俺がいると嬉しい？　つてか秀吉、男のお前が男の俺に、そんな事を言われるのは妙に気味悪いんだが…………」

「……！　ち…違うのじゃ！！　ワシはただ、お主と一緒に勉強出来るから嬉しいと言ったのじゃ！」

「…………なら良いが」

何故か顔を赤らめて否定する秀吉であつたが、理由を聞いたので余りに気にしないことにした。

「う…うむ。じゃからワシが勉強で分かん時があつたら、教えてくれぬかのう？」

「俺が出来る範囲でならな。それじゃ一年間宜しく、秀吉」

「宜しくなのじゃ、修哉」

秀吉が女の子みたいな笑みで俺を見てくるが…………。

「何だその顔は？　男ならもっとシャキツとしろ」

「……………うむ。男らしくじゃな」

「？」

俺が指摘すると、妙に男を強調して言う秀吉に疑問を抱かざるを得なかった。

と、そんな時……。

ガラッ！

「すみません、ちょっと遅れちゃいました♪」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

ドアの方からバカっぽい顔をした男子生徒……俺の友人である吉井明久が笑顔で言いながら入って来ると、坂本が先程俺に言った台詞を言ったのであった。

おい坂本、お前はそんなに明久を罵倒したいのか？

「……………」

「聞こえないのか？ ああ？」

「……雄二、何やってんの？」

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

「先生の代わりって、雄二が？　なんで？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

明久と雄二の会話に俺は少ばかりゲンナリした。最高成績者であ

る坂本がFクラスの代表となると、必ず何かやらかしそうだなと思ったのだ。

俺や此処にいるFクラスの生徒は暫く坂本に振り回されそうだなと思っていた時……。

「シュウー！　君もFクラスだったの！？」

明久が漸く俺がいる事に気付いたみたいだ。

「何でシュウがFクラスに！？」

「明久、後で説明してやるから、さつさと席に付け。後ろにいる福原先生が通れなくて困っているぞ」

「え？」

「その通りです。ちょっと通してもらえますかね？」

俺の指摘に明久が後ろを向くと、福原先生がいたのであった……恐らく明久は冴えない風体のオジサンだと失礼な事を考えているだろうが。

「明久、さつさと適当な席につけ。それと坂本、お前は何時まで教壇に立っているんだ？」

「う…うん」

「お前に言われなくても分かってるよ」

「天城君、お心遣いありがとうございます」

明久と坂本が席につくと、福原先生は教壇に立ちながら俺に礼を言ってくる。

「えー、おはようございます。2年F組担任の福原慎ふくはらしんです。よろしくお願いします」

福原先生は挨拶をした後に、薄汚れた黒板に名前を書こうとしたのだが、チョークが無かったので止めた。おい、此処はチョークすらまともに支給されていないのか？

「皆さん、全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？ 不備があれば申し出て下さい」

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないです！」

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の足が折れています」

「木工用ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

福原先生の言葉にFクラスの生徒達が申し出たが、俺は余りの対応

の酷さに言葉を失う。

これがFクラスの対応なのかと思っていると……

「必要なものがあれば、極力自分で調達するようにしてください」

極め付けは自分で調達と言われた事に、俺は頭を抱えるのであった。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

自己紹介が始まると、俺の隣に座っていた秀吉が立ち上がって自己紹介を始める。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる——と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

秀吉の自己紹介を終えて笑みを浮かべると、Fクラスの男子大半が見惚れているかのような顔をしていた。男相手に惚れたのかと思っ
て呆れている俺であつたが、明久も男子達と同様に見惚れていたの
で更に呆れた。

「……土屋康太」

次の生徒は小柄の男子だった。俺の記憶が正しければ、確かアイツは盗撮をしている犯罪予備軍の一人だ。捕まえるのに一苦労する奴なのだが、それでも何とか捕まえては俺の方で説教をしている。土屋は信念を曲げないとか訳の分からん事を言つて盗撮を止めないので、俺は放置する事にした。教師に突き出した所で、絶対に止めないだろうと思つたから。

「ーです。海外育ちで、日本語はできるけど読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味はー」

俺が考え事をしてる最中に他の生徒の自己紹介が続けられていた。今度は女子の自己紹介だったので、俺は女子の顔を見ようとしたが……。

「趣味は吉井明久を殴ることです」

ソイツは特定の人物にターゲットを絞る危険な趣味の持ち主である、ポニーテールをした島田美波であった。

「はろはろー」

「……あう。し、島田さん」

明久に笑顔で手を振る島田に、振られた本人は若干引き気味だ。

「おい島田。お前がそんな危険な趣味を持っているなら、俺はお前を明久に近寄らせないようにしなければいけないんだが」

「げっ！ あ…アンタ、このクラスにいたの！？」

「気付くのが遅いぞ」

次は俺の自己紹介だったので、立ち上がりながら島田に指摘すると、島田はやばい相手に見付かったかのように俺を見る。

島田は去年から明久に何かしら暴力を振るっており、俺が度々目撃

しては止めさせて説教している一人だ。殴っている理由は明久の自業自得であつたのだが、それでもやり過ぎだから少しは自重しろと俺は何度も言つてる。俺に説教されている島田は“アキが悪いから”と言つて聞かなくて、手に負えなかつた。後になつて分かつたのだが、どうやら島田は明久に好意を抱いているみたいだ。何度も説教をしてる最中に一度ソレを指摘してみたが、当の本人は顔を真っ赤にして去つて行つた。その時に島田はツンデレ……ではなく、ボコデレな性格だと分かつた俺は、取り敢えず応援だけはしてやろうと思つた。

で、その当人は今でも明久を殴っており、坂本と同様に俺を苦手としている。

「はあっ……やれやれ、また説教する相手が増えたみたいだな」

「人を問題児扱いしないですよ!!」

「そう言われたくなかつたら、少しは自重する事だな」

「天城君、話は後にして自己紹介をお願いします」

「あ…すいません」

島田と言ひ合つてみると、福原先生が注意してきたので俺は謝つて自己紹介をする事にした。

「天城修哉です。既に俺の事を知っていると思われますが、何時も騒ぎを起こして周囲に迷惑を掛けている吉井や坂本を説教しています。2人が何かやかした時は連絡して下さい」

「ちょっと、シュウ！ 自己紹介と一緒に僕の事を悪者みたいに言わないでよ！？ 雄二はともかくとして！」

「何言つてやがる明久、お前は何時も迷惑を起こしているから、天城に目を付けられて……！」

「何だと雄二！ 君だってシュウに何時も……！」

急に言い争いになる明久と坂本を見た俺は……

「……………お前等、今すぐ俺に説教されたいか、謝るか、好きな方を選べ」

「「すいませんでした」」

声を低くして言ったら、2人は即座に謝ったのであった。

「全く……と言う訳で、今年一年よろしくお願いします」

自己紹介を終えた俺は座り、他の生徒の自己紹介がある程度進むと、明久の自己紹介の番となる。

「——コホン、えーっと、吉井明久です。気がするに『ダーリン』って呼んで下さいね」

『ダアアーリイン！！』

明久がアホな自己紹介をすると、野太い声の大合唱が響いた。ダーリンと呼んでない俺は聞いてて、実に耳障りな単語だった。

「――失礼。忘れて下さい。とにかくよろしくお願いします」

呼ばれた明久は作り笑いをしながら席に着いているが、吐きそうな顔をしていた。最初から、あんな下らん事を言わなければ良い物を……。

俺が明久の行動に呆れている最中、自己紹介は続いて行くと……。

ガラリッ

「あの、遅れてすみま、せん……」

『えっ？』

ピンク色のロングヘアである女子生徒が謝りながら教室に入ると、教室全体から驚いた声が出る。当然俺も驚いた声を出した一人だ。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さん
もお願いします」

生徒全員が驚いている中、福原先生は特に驚かずに姫路と呼ばれた女子生徒に自己紹介をするように促す。

「は、はい！ あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします」

緊張しながら自己紹介をする姫路に……。

「はいっ！ 質問です！」

既に自己紹介を終えた男子生徒の一人が右手を高々と挙げる。

「あ、は、はい。なんですか？」

「なんでここにいますか？」

その質問の仕方は苛めと捉えられるが、男子生徒がそう言うのは無理もない。それは俺も含め、他の生徒全員も思っている事なのだ。何故なら彼女は、容姿端麗で成績優秀。入学して最初のテストでは学年2位を記録しており、その後も一桁以内に常に名前を残している才色兼備な女子だ。

そんな彼女が最底辺とも呼べるFクラスにいるのがおかしい。学年中の誰もが、彼女はAクラス行き確実だと思っていたのだから。

「そ……その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

『ああ、なるほど』

姫路の言葉を聞いた俺達は一斉に納得した。

試験途中の退席は0点扱いとなるのは学園の方針となっている。彼女は昨年度の振り分け試験を最後まで受ける事が出来ずに、Fクラス行きが確定したと言う訳だ。俺の場合は完全に欠席で0点だったが。

そして姫路の言い分を聞いたFクラスの男子生徒達が……。

『そう言えば俺も熱の問題が出たせいでFクラスに』

『ああ。科学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

明久と同様なバカな言い訳をしていたのであった。

「……………はあっ」

「しゅ…修哉。溜息なんか吐いてどうしたのじゃ？」

思わず俺は説教する相手が増えて溜息を吐くと、隣にいる秀吉が俺を気遣うように声を掛ける。

「で、では、一年間よろしく願いますっ！」

姫路はバカな連中の空気に耐えられなかったのか、逃げる様に明久と坂本の隣の席に着く。

席に着いた姫路が明久や坂本と話しており、坂本が明久をブサイク呼ばわりしたり、明久に興味がある男子がいる言われて、明久はさめざめと泣いていた。坂本、俺からして見れば、お前は聞き分けの無い野生のゴリラだぞ。それと明久に興味を抱いている久保は……アイツはちよっとな……。

と、俺が危ない道に走っている去年のクラスメイトだった久保の事を考えていると……。

パンパン！

「はいはい。その人たち、静かにして下さいね」

「あ、すみませ……………」

バキィッ！ パラパラパラ……

福原先生が教卓を叩いて警告を発したので、明久が謝ろうとすると、教卓がすぐに壊れてゴミとなってしまった。いずれ崩れるのではないかと思っていたが、こんなに早く崩れたのは予想外だ。

「えー……………替えを用意してきます。少し待っていてください。」

気まずそうに告げて、福原先生は教室から出て行く。

Fクラスの扱いが相当酷いという事を改めて知った俺は、この先大丈夫なのだろうかと不安になった。

第一問（第一卷開始）（後書き）

修哉と同じく、この先ずっと書き続けられるかと不安になっています。

第二問（前書き）

今までに無い位の長めです。

第二問

バカテスト 国語

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい

- (1) 得意な事でも失敗してしまう事
- (2) 悪い事があつたうえに、更に悪い事が起きる喩え

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら“河童の川流れ”、“猿も木から落ちる”、(2)なら“踏んだり蹴ったり”や“弱り目に祟り目”などがありますね。

天城修哉の答え

- 『(1) 上手の手から水が漏る』
- 『(2) 痛い上の針』

教師のコメント

正解です。得意科目である天城君ならではの答えですね。私が例をあげたのにも拘らず、他の類義語を知っていたとは。先生も学ばされました。

土屋康太の答え

『（１）弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね

吉井明久の答え

『（２）泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか

「やれやれ、ここまで設備の悪い教室だと先が思いやられるな」

「確かに修哉の言うとおりじゃ。チョークだけでなく、あのようなボロボロの教壇を見れば……」

福原先生が教室を出た後、俺が愚痴りながら言っていると、秀吉も賛同するかのように頷く。しかしそんな事を言った所で、教室が改善される訳でも無い。

「ふうつ……いつまでもネガティブになってないで、少しはポジティブに考えるか」

「んむ？ 先程まで愚痴ってた修哉の言葉とは思えぬのう」

「ずっと愚痴った所で教室が改善されるわけじゃ無いからな。だったらいつその事、課せられた試練だと思って頑張るよ」

「ふむ、そう言う捉え方もあるのじゃ」

「では秀吉、試練を乗り越える為に、一緒にAクラスを目指す為に今から猛勉強するか？」

「そ…それはちょっと……ワシは今、演劇の方が大事で……」

俺の提案に秀吉は冷や汗を掻きながら、さりげなく断っていた。

「秀吉は演劇ばかりに集中した所為で、Fクラスに来る羽目になったんだろ？ だったら今すぐ俺が秀吉に勉強を……」

「い…今は遠慮しておくのじゃ」

勉強が嫌なのか、秀吉が完全に手を振りながら断ると、俺はわざとらしく落胆する表情をする。

「何だよ。友達からの手伝いを断るのか？」

「そ…そう言う訳では無くてのう……」

「俺は秀吉を男と見込んで手伝おうとしたのに」

「！……！ お…男と見込んで……じゃと？」

秀吉が何か食い付いたかのように、俺の顔をジッと見ている事に予想通りだと思った。秀吉は何故か“男”と言う単語に食いついて来るのは知っていたので、俺にとっては面白い展開になっている。

「ほ…本当に……ワシを男として見込んでおるのかのう？」

これはまた俺の予想通り、秀吉は何かを確認するかのようについてくる。

「当然。何だつたら男同士の誓いでもやるか？」

「……………コホンッ……………し、仕方ないのう。男同士の誓いと言われたら……………」

と、秀吉が物の見事に引つ掛かってくれて、俺がすぐに冗談だと言おうとするが……………。

「あれ？ 明久と坂本は何処へ行つた？」

「ん？ そう言えば、おらぬのう……………」

明久と坂本が教室からいなくなっている事に今更気付いた。

「アイツ等、新学期早々に何かをやらかす気か？ だとしたら……………」

「そ…それは総計ではないかのう、修哉。いくらあの2人とて、お主の目を盗んでそんな事はしないと思うのじゃ。ワシは多分トイレに行ったのではないかと思うのじゃ」

「だがな……………」

俺は2人を探そうと立ち上がるが、秀吉が考え過ぎだと言って宥めていると、明久と坂本と一緒に福原先生が戻ってきた。やはり秀吉の言ったとおり、考え過ぎかと思っただ俺は席に座る。

福原先生が新しい教壇……と言っても古い物だが、ソレを持って入ってくると、また自己紹介が再開された。

「えー、須川亮です。趣味は――」

淡々と自己紹介の時間が流れていると、漸く最後尾まで進んだ。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

福原先生に呼ばれて坂本が席を立ち、ゆつくりと教壇に歩み寄っている。それと同時に、先程までのふざけた雰囲気が無くなっており、まるで何か重大発表をするかのような感じであった。

「坂本君はFクラスの代表でしたよね？」

福原先生に問われて、頷く坂本。けれど代表と言った所で、あくまでこのFクラスの中での話だ。あくまで最低クラスの中での成績優秀者に過ぎなく、言っちゃ悪いが何の自慢にもならない。現段階で俺の成績は坂本より下だが、去年の成績を考えると、間違いなく俺の方が上だ。とは言え、俺もあまり成績は良くないのだが。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

教壇に立って言う坂本であるが、まだ他にも言う事があるんだろう
なと思っていると俺は直感した。

「さて、皆にひとつ聞きたい」

「……………はあっ」

やはりと言うべきか。坂本が、ゆつくりと、全員の目を見るように
告げる。俺が溜息を吐いても坂本は無視して、クラス全員の視線が
自分に集まる事を確認する。確認した坂本は教室内の各所に移りだ
す。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

移動している坂本を視線で追い、同時に備品を見ているFクラス生
徒達。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい
がー」

次の坂本の言葉に……………。

「不満は無いかな？」

『大ありじゃあっ!!』

Fクラス生徒達は一斉に叫んだのであった。雄二は予想通りと言わんばかりに笑みを浮かべる。

「だろう？ 俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

不満だったら、振り分け試験前に真面目に勉強してれば良かったんじゃないかと、俺は内心で突っ込む。

『そうだそうだ!』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する!』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？ あまりに差が大きすぎる!』

それはちゃんと普段から勉強している奴が言う台詞だと思うんだが。

「みんなの意見は尤もだ。そこで」

（俺を除く）Fクラス生徒達の反応に満足したのか、坂本は自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて……。

「これは代表としての提案だが――」

ここからが本番だと言わんばかりに……。

「——Fクラスは、Aクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けようと思う」

戦争の引き金を引いたのであった。

「……………“試験召喚戦争”ねえ」

坂本の提案に俺はポツリと呟く。確かに坂本の言つとおり“試験召喚戦争”をやれば、この教室の問題は解決出来る。

だが……。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備が落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんが居たら何もいらない』

予想通り（最後の奴は除く）と言える不満な声が続々と出てきた。

それは当然だろう。はつきり言つて雄二は、最低成績者であるFクラスが最高成績者のAクラスに勉強で挑むと言っているのだ。勝率は言うまでもないが、もしそれで負けたら設備を1ランク落とされて、ただでさえ最低な教室が更に酷くなるのだから。勝ち目の無い戦いを挑む事に、先程まで高揚していた生徒達が不満を言うのは無理も無い。

因みに“試験召喚戦争”と言うのは、科学とオカルトと偶然により完成された『試験召喚システム』を使って、テストの点数に応じた

強さを持つ『召喚獣』を呼び出して戦い、それを用いたクラス単位の戦争と言う物だ。

「そんなことはない、必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

けれど坂本が自信を持って答える。

『何を馬鹿な事を』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

否定的な意見が教室中に響き渡った。

無論、俺も否定的な意見の方に入っている。一体坂本は何故あそこまで自信を持って答えているのかが不可解であった。いくらFクラスに成績優秀な姫路がいたとしても、それだけで勝てるとは言えない。坂本が姫路に頼った策を使った所で、逆に俺達が足手纏いになつてしまう。そんな事は坂本も重々承知しているはずだが。

「根拠ならあるさ、このクラスには試召戦争で勝つ事のできる要素が揃っている」

何だと？ まさか本当に姫路だけを当てにしているのか？ だったら俺としては、もうこれ以上、こんな茶番に付き合う気はない。

「そこまでだ、坂本。何を根拠に言ってるのかは知らんが、お前一人の勝手でクラス全員を巻き込まないでもらおうか」

「まあ最後まで話を聞けよ、天城。これはお前にとっても良い話だ」
俺が立ち上がったって抗議すると、坂本は分かっていたみたいに、俺をあしらうかのように言ってくる。

「聞く気は無いな。第一、お前の言う良い話とは、何かしら必ず裏がありそうだ。だから俺は信用出来ない」

俺が話はここまでだと打ち切ろうとしたが……。

「修哉よ、取り敢えず話だけは聞いてみないかのう。雄二があそこまで言い切るのじゃから、少しは信用してみたらどうじゃ？」

「そ…そうだよシユウ。折角ここまで進んでいるから、雄二に最後まで話を続けさせようよ」

秀吉と明久が俺を宥めようとした……明久が妙に焦っていたかのように見えたが。

「……………」

「まあ、天城が俺を普段から信用出来ないのは分かる。だが一応、話を最後まで聞いてくれないか？ 聞いても信じられないなら、抗議でも何でもしてくれ。それなら文句は無いだろ？」

2人の掩護射撃によって、雄二は便乗して俺を説得するように言うて来た。

「……………では最後まで聞こう」

「助かる。さて、ちよつとばかり話の腰が折れてしまったが、これから説明する」

俺が席に着くと、坂本は不敵な笑みを浮かべ、壇上から見下ろす。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になつて顔と手を左右に振る否定のポーズを取る土屋。スカートを覗かれた姫路が裾を押さえて遠ざかると、土屋は顔に付いた畳の跡を隠しながら壇上へと歩き出す。

本当なら不届きな事をしている土屋に説教をする所だが、苦し紛れの言い訳ばかりしかないので、やっても無駄だと理解しているから無視……度が過ぎる事をしてれば説教をするが。

「土屋康太。コイツがあ有名な、ムツリーニ寡黙なる性識者だ」

「……！！（ブンブン）」

ムツリーニ？ ……そうか、土屋がムツリーニだったのか。ムツリーニは俺もよく知っている。その名は男子には畏怖と畏敬を、女子には軽蔑を以て挙げられる。思春期な男として尊敬されるだろうが、俺は全くその気が無かった。俺とて女の子に当然興味はあるが、軽蔑される行動はしたくない。

『ムツツリー二だと……?』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか……?』

『だが見ろ。ああまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……』

周りが納得していると、土屋は否定しながらも頬に付いた畳の跡を隠していた。もう分かっている事なのに、あそこまで必死に否定すると逆に感心してしまう。

「???」

姫路だけが頭に“?”ばかり浮かべながら、分からないと言う顔で首を傾げている。俺としては知らない方が良いと思う。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力をよく知っているはずだ」

「えっ? わ、私ですか?」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」

やはり坂本は姫路を一番の頼りにしているみたいだ。それだけじゃダメだろうと思いつながらも、俺は黙って聞いている。

『ああ、そうだ。俺たちには姫路さんがいるじゃないか』

『たしかに彼女ならAクラスに引けをとらないな』

『ああ。彼女さえいれば何もいらない』

さつきから誰が姫路に熱烈なラブコールをしているんだ？ 姫路の事が好きなら、思い切って告白をすれば良いと思うんだが……いや、そんな事したら明久が黙っていないか。アイツは以前から姫路の事が気になっていたからな。

「木下秀吉だっている」

『おお……！』

『確かアイツ、木下優子の……』

おいおい坂本、お前は何を考えている。友達である秀吉には悪いが、そんなに大した成績じゃないぞ。いくら成績優秀な双子の姉がいるからと言って、秀吉も成績優秀じゃ……

「そして天城修哉もいる」

……………何だと？

「おい坂本、それはどう言う……」

「天城はお前達の知つての通り、俺や明久、そしてムツツリー二を簡単に捕まえる事が出来る実力の持ち主だ。それにコイツは振り分け試験を受けていないから現在Fクラスにいるが、成績は俺達より上だ。姫路の次にな」

俺の名が出された事に再び立ち上がるが、坂本が好機と言わんばかりに俺を持ち上げると……。

『確かに、天城は鉄人みたいだからなあ』

『それと真面目で勉強熱心だ』

『俺達より成績が上なのは確かだ。姫路さんの次つてのが気に食わないけど……』

おい最初の奴、俺を西村先生と一緒にするな。あの人に失礼だろうが。それと坂本、お前は俺も当てにしていたのか。

「坂本、まさかお前、俺も参加させる為にあんな……」

「当然、この俺も全力を尽くす」

坂本は俺の言葉を無視し、代表として責任感を持った表情をしながら言う……。

『確かに何だかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良かなかったのか』

『実力がAクラスレベルが二人もいるって事だよな！』

いけそうだ、やれそうだ、そんな雰囲気は教室内に満ちていた。

しかし……。

「それに、吉井明久だっている」

……シュー——

さっきまで上がっていた土気が、一気に落ちてしまった。土気云々はどうでもいいのだが、俺は坂本の発言に脱力してしまった。一体コイツは何がしたいんだ？

「ちよつと雄二！ どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！ 全くそんな必要はないよね！」

それについては俺も同感だ。

『誰だよ、吉井明久って』

『いや、知らん』

『でもアイツ、以前から天城に説教されてた奴じゃないか？』

「ホラ！ せっかく上がりかけてた土気に翳りが見えてるし！ 僕は雄二たちと違って普通の人間なんだから、普通の扱いを——ちよつとシュウ！ なんで僕に呆れた視線を送るの！？ 土気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

「土気は関係無い。俺が呆れているのは、自称“普通の人間”であ

るお前が、どうして俺にいつも説教されているんだ？　そこを詳しく聞かせてくれないか？」

「うぐっ！」

俺の台詞に、明久は痛い所を突かれたかのように押し黙った。どうやら身に覚えがあるみたいで、俺に何も言い返せないみたいだ。例えば言い返したとしても、過去にやらかした事を掘り出して切り返すが……あくまで人がいない所だ。いくら俺でも、こんな公衆の面前で言うつもりは無い。

そんな俺と明久のやり取りを見ながらも、坂本は説明を続けようとする。

「そうか。皆は余り知らないようだから教えてやる。こいつの肩書きは《観察処分者》だ」

坂本、お前はそんなに人前で明久の恥を晒したいのか？　そんな不名誉な肩書きをここで出すなんて……本当にコイツは何がしたいんだ？

「……それって、馬鹿の代名詞じゃなかったっけ？」

言っまでもなく、その肩書きは他の生徒も知っていた。

「ち、違っよっ！　ちよっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そっだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

《観察処分者》。学園生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分で、明久がこの学園で唯一、その処分を受けている。

どうしてその処分を受けたのかと俺は過去に明久に聞いたのだが、当の本人は当然の報いだからと言って、はぐらかしている。アイツは俺に迷惑を掛けない様に気を遣っているんだろうが、何を今更と思った。けどアイツがそこまで頑なにしていると言う事は、誰かを守る為に敢えて自ら汚名を被ったのだろうと俺は考えた。あんなに決意に満ちた眼差しで俺を見ていたのだから。だが、あくまで俺の推測に過ぎないが。

と、俺がそんな事を考えていると……。

「あの、それってどういうものなんですか？」

姫路が首を傾げながら、何なのかと坂本に聞いてきた。まあ、成績優秀の姫路には、とても縁の無い物だから知らないのは当然だろう。

そんな姫路の質問に坂本は答えようとする。

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそう言った類の雑用を、特例として物に触れられるようになった召喚獣でこなすと言った具合だ」

坂本の答えに姫路はキラキラと目を輝かせながら、明久に若干の羨望と尊敬の籠った視線を送る。

そんな姫路の視線に……。

「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ、姫路さん」

明久は姫路に向かって手を振りながら否定した。

けど実際、明久の言うとおりだ。

召喚獣を自分の思い通りに動かせるというのは凄く便利で、腕力も普通の人間の何倍もある。その気になれば岩だって砕く事が出来るだろう。

確かにそれは一見、素晴らしい機能だと思われるだろう。だが、それとは裏腹にかなりのデメリットがある。

何故なら、召喚獣は教師の監視下で呼び出さないといけないからだ。つまり、明久が便利に使えなくても使えない。教師が召喚獣を使つての雑用作業を明久に任せ、明久は教師に頼まれた雑用作業をする。それだけの事だ。だから先ほど言ったメリットは教師の監視下でやっているに過ぎなく、明久には自由に召喚獣を活用する事が出来ない。

それに加えて、物理干渉が出来る召喚獣に負担が掛かると、何割かが召喚者の明久にフィードバックされる。簡単に言えば、召喚獣に重い物を持たせて移動している最中に疲労していると、召喚者にもその疲労の何割かが返ってくるのだ。更には、物にぶつかった時の痛みも、そのまま帰ってくる。聞くだけで、これはもう罰だろうと思うだろう。

だからこそ『観察処分者』だ。凄い事でも便利でもない。学園にとって問題児とされる相手に課せられるペナルティ。坂本が領いて行ったバカの代名詞と呼ばれる理由がそこにあるのだ。

『おいおい。《観察処分者》って事は、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいって事だろ?』

『だよな、それならおいそれと召喚出来ないヤツが一人いるってことだよな』

当然、そんなペナルティを課せられた奴が、自分から戦闘に参加する気は無い。召喚獣が戦闘中によって受けた痛みが自分に帰ってくるのだから。

だからこそ俺は理解出来なかった。どうして坂本が、そんな事をバウすのかと。

まあ、他の連中とは違って、召喚獣の扱いに長けているからとでもフォローするのかと思っていたが……。

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきだよな?」

ただ単に明久の恥を暴露したかっただけみたいだった。

平然と人の恥をばらす坂本に、俺が目細めながら睨んでいると……。

「……! ……ゴホンッ!! ま……まあ、他の召喚者達とは違って、召喚獣の扱いには慣れているから、それなりの役には立つぞ」

「……雄二、今更フォローしても遅いんだけどね」

睨みに気付いた坂本は調子に乗り過ぎたと思って、俺に取り繕うかのように明久に対するフォローをした……明久は呆れながら言うたが。

坂本、今更そんな事を言っても無駄だ。もうお前に説教する事は確定なんだから。

「と……とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

俺に対して冷や汗を掻いている坂本が、自信を持って言い切った。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！』

「ならば全員筆^ペを執れ！ 出陣の準備だ！」

『おおーっ！っ！』

「俺たちに必要なのは、卓袱台ではない！ Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ！っ！』

「お、おー……」

「……………」

下準備が出来たと言わんばかりに坂本が号令を出すと、クラスの生徒達は一斉に雄叫びをあげる。姫路も小さく拳を作り掲げていた。

俺はもう、この状況を止める事が出来ないと察知し、無言で座った。坂本は俺が座って何も言わない俺を見て、予想通りだと言わんばかりに笑みを浮かべている。

坂本は恐らく、俺が今回の“試験召喚戦争”に反対だったのを予想していたと思う。

でなければクラス全員に鼓舞させるかの様な演説と、勝利の鍵を握っているであろう土屋、姫路、秀吉。そして俺を持ち上げたのだから。坂本も自分の過去の功績を利用して、見事にクラス全員の心を掴んだ……明久の方は余計だったが。そして最後には参加しようと号令をして、クラス全員は“試験召喚戦争”に参加しようと意気込んでいる。

そう考えていると、坂本は「それでも反対できるか？」と言う様なイヤらしい笑みで俺を見ている。

坂本に一杯喰わされたと思いながらも俺は黙っていた。もし此処で俺が反対だと言ったら、クラス中から後ろ指をさされるだろう。そう計算しての行動だったのだ。

全く、アイツは普段から碌でも無い事しかやらないくせに、こう言う悪知恵に関しては物凄く長けているな。

黙っている俺に、坂本は次の段階に進もうとしている。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役

を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

あのバカ
坂本はまた明久を捨て駒にしようと考えているみたいだ。

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ
て行ってみろ」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

明久に優しく諭す様に言う坂本であるが、俺は全く信じなかった。
あれは完全に明久を騙している。

そんな坂本に明久は警戒を解き……。

「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似をしない」

更に追い討ちの一言を掛けられて、騙されたのであった。坂本、お
前がそこまで明久を騙そうとするなら、俺にだって考えがあるぞ。

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

完全に騙されている明久は、Dクラスへ向かう為に教室から出よう
とすると……。

「待て明久、どうせなら俺も一緒に行こう」

「え？」

「！！！！」

俺が立ち上がって名乗り出ると、明久は素っ頓狂な顔をしながら俺を見ており、坂本は急に焦ったかのような顔になった。

「ちょっとシユウ、僕の事が信用出来ないの？」

「お前だけに使者を任せると、また何かしらの騒ぎを起こしそうな気がするからな。そう思わないか、坂本？」

「……………」

俺の問いに坂本は、ひたすら汗を掻きまくって無言となっている。

「まあ、流石に宣戦布告をするだけで騒ぎは起こさないと思うが、それでも念の為に俺も行かせて貰う。明久、俺をバックアップだと思って、遠慮なく宣戦布告しろ」

「……………だったら良いけど。じゃあ行こうか」

「ああ、行こう」

明久は俺を伴って教室から出ようとする……。

「坂本、お前が明久に言った事が、もし嘘だったら……………覚悟するんだな」

「……………」

俺が坂本に向かって死刑宣告を下し、坂本は無言で膝を地面に付けると、クラス全員は坂本に同情的な眼差しを送ったのであった……姫路だけは坂本の行動に全く分らなかったが。

そして教室を出た明久と俺はDクラスへと向かったのであった。

第二問（後書き）

旅人『流石は修哉だな。雄二の嘘を見破って、あんな事をするとは』

修哉「アイツは普段から、明久に対してだけ平然と騙していますからね。それにアイツは明久を騙す時に、必ず目が笑っていますし」

旅人『……………よく観察している事で』

修哉「そうでもしなければ、明久は散々な目に遭います。と言うか、俺は明久に、雄二に騙されているぞと何度も教えているんですが……………いい加減に気付いて欲しいですよ」

旅人『……………今の明久を見ると、修哉の助言を完璧に忘れているみたいだな』

それでは次回もお楽しみに！！！！

第三問（前書き）

今回はちよつと原作から離れています。

それに加えて、無駄に長いです。

第三問

バカテスト 英語

問 以下の英文を訳しなさい

『 This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly .
』

姫路瑞希の答え

『 これは私の祖母が愛用していた本棚です 』

天城修哉の答え

『 これは私の祖母が愛用していた本棚です 』

教師のコメント

正解です。 姫路さんと天城君はきちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

『 これは
』

教師のコメント

訳せたのは This だけですか

吉井明久の答え

『 ● ♪ ☆ ×
』

教師のコメント

出来れば地球上の言語で。それと余り妙ちきりんな回答をしていると、天城君が説教すると言っていましたよ。だから真面目に答えて下さい。

若干ボロボロになっている明久と俺がDクラスに宣戦布告をした後、Fクラスに戻り……。

「酷いじゃないか雄二！！ 僕を騙したんだね！？」

「何か言い訳はあるか、坂本？」

「……………」

無言で正座している坂本を見下ろしていた。

「もしシュウがいなかったら、僕はDクラスの皆にボコボコにされていたよ！？」

「何も言い返さないと言う事は、やはり下位勢力の使者が暴行される事を予想していたみたいだな。それを分かかって、明久に行かせるとは…………」

「シュウ！ この外道に体罰をやる必要があるよね！？」

「そうだな、人を騙しておいて何の罪悪感も抱いていない奴には、それ相応の報いを受けなきゃいけないな。だが……」

「だったら!!」

明久は雄二に襲い掛かろうとしたが……。

「待て明久、俺の話を最後まで聞け」

「何で止めるの!？」

俺が明久の襟首を掴んで阻止したのであった。

「雄二には罰を与えなきゃいけないのに!」

「確かにそうだが、それは後回しだ。Dクラスに宣戦布告をした以上、坂本に手を出す訳にはいかない」

「何で!？」

「今すぐ坂本に罰を下したら、試験召喚戦争に支障が出るかもしれないからな。だから手を出さない……“今”は」

「……………分かったよ」

明久は渋々従って落ち着くと、俺は掴んでいた明久の襟首を離す。

そして……。

「坂本、今は何もしないでおこう。だが覚えておくんだな。Aクラ

スとの試召戦争が終わった後は、即座に説教してやるから覚悟しとけ」

「……………はい」

俺が威圧感を放って坂本に警告すると、坂本は頷くのであった。

「そうだよ雄二！ 君のふざけた根性は僕が叩き直して……………」

「何度も坂本に騙されている明久も、どうかと思うんだがな……………」

「……………」

明久は俺の突っ込みに何も言い返すことが出来ずに無言となる。

「まあまあ、修哉もその位にしておくのじゃ」

気まずい雰囲気を出している明久と坂本に秀吉が助け舟をだした。

「それにしても修哉、お主は明久と違って無傷じゃのう」

「明久に暴行する奴を止めただけだからな。その後は……………」

俺がDクラスに言った事を秀吉達に話し始める。

明久と俺がDクラスの前に辿り着くと……。

「それじゃあシュウ、君は此处で待つてて」

「はいはい」

一人でDクラスに入る明久を見送る俺は、入り口前に立っていた。

「どうも、2 - Fの吉井明久です。僕達Fクラスは、Dクラスに試験戦争の宣戦布告に来ました」

『何だと！？』

明久が即座に試験召喚戦争（以降は試験戦争）の宣戦布告をする、Dクラスの生徒達は驚愕する声を出した。

「Dクラスの皆さん、お手柔らかに」

と、明久の呑気な発言に……。

「Fクラス風情が俺達Dクラスにだと！ ふざけるな！？」

「立場を分からせる為に伸してやる！！」

「かかれ～～！！！！！！」

「え！？ ちょ！？ 何で！？」

Dクラス生徒の大半が明久に襲い掛かったのであった。

「やはりな……坂本は説教確定だ」

予想通りの展開になっていると思った俺は即座にDクラスの教室に入る。

「お前等、そこまでにしてもらおうか」

『天城！？』

俺が入った途端にDクラス生徒達は俺の顔を見て驚愕した。

そんなDクラス生徒達に気にせず、俺は明久に暴行している奴等を見て……。

「取り敢えず、下らん理由で明久に手を出した奴等には報いを受けてもらおうか……」

バキッ！ ドゴッ！ ゴスッ！

『ガハッ！！』

一瞬で近づき、ソイツ等を一撃で伸して気絶させた。

「全く、一人相手に集団で襲い掛かるとは……大丈夫か、明久？」

「た…助かったよ、シュウ」

気絶しているDクラス生徒数名を尻目に、倒れている明久に手を差し出す。明久が俺の手を握ると、俺は引っ張って立ち上がらせる。

立ち上がった明久が制服に付いた埃を払っていると、俺は他のDクラス生徒達を睨み……。

「それで、此処の代表は誰だ？」

「……………お…俺だ、天城」

Dクラス代表を呼ぶと、去年のクラスメイトであった平賀源二が前に出てきた。

「ほお？ お前がDクラス代表だったか」

「あ…ああ。けど天城、お前が何で此処にいるんだ？ 俺はてつきり、天城がCクラスに行ったのかと……………」

「訳あって振り分け試験を受けていないから、今の俺はFクラスの生徒だ。それと平賀、俺の成績はお前と同じ位なんだから、Cクラスに行ける訳が無いだろう」

「だ…だが、お前は特化している教科があるから……………って、天城がFクラスだと！？」

平賀が俺を見て信じられない顔をしている。まあ今は、そんな事を言っている場合じゃないから、さっさと本題に入る。

「俺がFクラスにいる事はどうでもいい。平賀、お前は何で明久が暴行されるのを黙って見ていた？ 本来なら代表である、お前が止める筈だが？」

「そ…それは……」

「いくら最低なFクラスだからと言って、お前達が暴行する権利は無いんだぞ」

「……………」

「もう一度聞く、何故止めなかった？」

俺の質問に平賀は金縛りにあつたかのように体が動かず黙っており、他のDクラス生徒達も同様に黙っていた。

『……………』

「どうやら答える気は無いみたいだな。だったらコッチにも考えがある。平賀、お前は後で説教だ」

「……………」

俺が説教宣告をすると平賀はビクツと体が震える。

「あ…あ……あああ………」

「何をそんなに怯えているんだ？ 俺はただ説教をすると言っただけだぞ。無論、そこで気絶している奴と、その他もな」

『……………』

俺が追い討ちをかけるかの如く言うと、平賀とその他はガクガクと体が震えて、この世の終わりみたいな顔になっている。しかし解せ

なかった。何故平賀達がこんなに怯えているのかを……たかが説教をする程度で、あんな恐怖に満ちた顔をしなくても良いのに。

俺が内心そう思っていると……。

「吉井！！ 代表として謝罪する！！ すまなかった！！」

『すいませんでした！！！！』

「へ？」

平賀と明久に暴行をしようとしたDクラス生徒達は即座に土下座をした。その事に明久は素っ頓狂な声を出しているが。

「ね……ねえ、シュウ。僕はどうすればいいのかな？」

「……… まあ十分反省しているみたいだし、明久に暴行をした奴等には俺の方で手を下したからな。今回はこれで勘弁してやろう」

「……… はあつ、危なかったあ」

いきなりの展開に明久は戸惑っていたが、俺は怒る気も失せて許す事にした……… 何故か平賀が命拾いしたかのように安堵していたが。

「確かにのう。修哉の怒った説教は恐ろしいから、即座に土下座したくなる気持ちは分かるのじゃ」

「それはどう言う意味だ、秀吉？」

俺がDクラスとの出来事を話すと、秀吉は何故か納得している顔をしていた。

「そのままの意味じゃ。お主は怒ると恐いからのう。そんな状態で説教される事を考えると、プライドを捨ててまで土下座するのは当然じゃ」

「……………俺ってそんなに恐いのか？」

秀吉の何気ない言葉に俺が少々傷付いていると…………。

「吉井君、大丈夫ですか？」

「あ、うん、大丈夫。ほとんどかすり傷」

姫路が心配そうな顔をして明久に駆け寄っていた。それを見た俺は羨ましそうに見ている。

「吉井、本当に大丈夫」

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

今度は島田も明久に駆け寄っている。

ここで優しく気遣うと明久にちょっとしたアピールが出来るなと思
って島田を見ていたが……。

「そう、良かった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」

「ああっ！ もうダメ！ 死にそう！」

わざとらしく慌てて腕を押さえて転げまわる明久に、俺は呆れてい
た……。無論、島田に対してだ。もし殴ったらすぐに島田を止めなけ
ればいけないが。

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行う
ぞ」

取り敢えず俺から解放された坂本は他の場所で話し合うのか、教室
の戸を開けて出て行った。一瞬、俺から逃げたい為の行動かと思っ
たが、それはないかと考え直す。

「あの、痛かったら言って下さいね？」

姫路が明久にそう告げて、小走りに雄二の後を追い……。

「大変じゃったの」

秀吉が明久の肩を叩いて廊下に出て……。

「……………（サスサス）」

自分の頬の辺りをさすりながら土屋が続いた。と言うか土屋、姫路

のスカートの中を覗いてた時に付いた跡をまだ隠してたのか？

「土屋、お前いつまで……」

と、俺が土屋に突っ込もうとしたが……。

ピンポンパンポン！

“2年Fクラスの天城修哉君、2年Fクラスの天城修哉君、至急職員室へ来て下さい。繰り返します、2年Fクラスの天城修哉君、至急職員室へ来て下さい”

突然、校内放送で俺を指名してきた。

「あれ？ 何でシュウが？」

「職員室に來いだなんて……アンタ何かやらかしたの？」

「……天城、悪い事は言わない。正直に白状した方が良いと思う」

校内放送に明久は心配そうに俺を見ており、島田と土屋が俺を問題児扱いする様な目で俺を見て来る。

「明久は良いんだが……暴力女と犯罪者に、そんな事を言われる筋合いは無いな」

「………何か今、不快な呼び方をされた様な気がするんだけど」

「……失礼極まりない」

俺が悪口にルピを付けると、島田と土屋は不快そうな顔をして俺を睨んだ。

「気のせいだろ。ってかお前等、あたかも自分達には身に覚えが無い様な言い方をしているが、十分に問題を起こしているから」

明久に暴力を振りまくったり、盗撮した写真を勝手に売り捌いているとか……これで問題ないだろうと言う奴がいたら、是非お目にかかりたいが。

「失礼ね！ 自己紹介の時に言ったけど、ウチを問題児扱いしないでよ！」

「……俺は何の問題も起こしていない」

「……自覚が全く無いみたいだな……まあいい。明久、いつまでも倒れていないで、さっさと立て」

「う…うん」

これ以上言った所で平行線のままになるので、俺は倒れている明久を立ち上がらせた後、教室を出て職員室へと向かった。

俺が職員室に着いて数分後

「天城君！！ Dクラスの生徒に手を上げるなんて、どう言っても
りですか！？」

俺はDクラス担任教師に詰問されていた。

「落ち着いて下さい。天城がそう言う事をするのには、必ず理由が
ある筈です。そうだろう、天城？」

「勿論です」

憤慨しているDクラス担任教師を西村先生が宥めながら俺に尋ねて
来たので、俺はすぐに答える。

「西村先生！！ Fクラスの天城君が、内の生徒に暴力を振るつた
んですよ！ これが落ち着いていられますか！？」

このDクラス担任教師は俺が手を下した理由を知らないのだろうか、
一方的に俺が悪いかにように決め付けている。

「ですから、まずは天城の話を聞いてからにしましょう」

「Fクラス生徒の話を聞く気はありません！ それとも西村先生は、
こんな落ちこぼれのFクラス生徒を庇うつもりですか！？」

「……………」

差別的な発言に俺は無言で顔を顰めるが、Dクラス担任教師は余り俺の事を知らないみたいだ。そうでなければ、ここまで騒ぎ立てる事はない筈。恐らく今年付けに赴任された教師なのだろう。新学期早々に担任を持った先生が頑張ろうと思った矢先、最底辺のFクラス生徒である俺が問題を起こしたと知り、憤慨しているのだろう。

そんなDクラス担任教師に西村先生が……。

「言葉を謹んで下さい。教師である貴方が、その様な差別発言をするのは如何かと思いますが？」

「……す……すいません」

顔を顰めながら低い声で言うと、Dクラス担任教師は威嚇されたかのように、先程まで憤慨していたのが嘘みたいに無くなった。

流石は西村先生だ。少し威圧を込めただけに、相手を一瞬で静かにさせるとは。

「天城、お前がどうしてDクラス生徒に手を上げたのかを聞かせてもらいたい」

「はい。実は……」

俺が西村先生とDクラス担任教師に、明久と一緒にDクラスへ宣戦布告をした時の事を話すと……。

「ふむ……どうやら問題があったのはDクラスの方ですな」

「……………」

「まるで弱者を甚振る様な感じでして。その時に俺は、とてもDクラスやる事じゃないと思いましたよ」

西村先生が隣の方を見ながら言うと、Dクラス担任教師は無言となっていた。

「問題児とは言え、宣戦布告をした吉井を一方的に痛めつけようとするとは……俺が天城の立場であつたら、同じ事をしているでしよう」

「し……しかし、私の聞いた話では、天城君が一方的に殴って来たと……」

「誰が言ったのかは知りませんが、恐らくソイツは俺に仕返しをしてやろうと思って、大げさに言っただけでしょう。まだ俺が信じられないのでしたら、代表の平賀や他のDクラス生徒に聞いて見て下さい。それで裏付けが取れますから」

「……………」

俺の切り返しに、Dクラス担任教師は何も言い返すことが出来ないみたいだ。

「ではすぐに確認するでしょう。天城、もう行っても良いぞ」

「そうですか。では失礼します」

退室して良いと言われた俺は、職員室から出ようとドアを開けると

……。

「疑ってすまなかったな」

「いえいえ。俺は別に気にしてませんよ、西村先生」

西村先生が謝るが、俺は気にせずに出て行った。

「さて、確認の為に代表の平賀と、天城を陥れようとしたDクラス生徒を呼びましょう」

「え…ええ、そうですね」

完全に恥を掻かされたDクラス担任教師は、すぐに校内放送を使って平賀と、嘘の証言をした生徒を呼ぶのであった。

「ったく！ 誰が言ったかは知らんが、反省していなかったみたいだな。ソイツは後で俺が説教を……」

俺が舌打ちをしながら、廊下を歩いていると……。

ピンポンパンポン！

“2年Dクラスの平賀源二君、×××君、至急職員室へ来て下さい。繰り返します、2年Dクラスの平賀源二君、×××君、至急職員室へ来て下さい”

校内放送で、平賀とDクラス担任教師に嘘の証言をした生徒が呼ばれた。

「……………どうせ西村先生と担任が説教するだろうから、勘弁してやるか」

恐らく恥を掻かされたDクラス担任教師が、物凄い勢いでソイツを問いただすだろうと思ったから。そう考えると、俺はさっきまで憤っていた怒りが一気に静まった。

「しかしまあ、西村先生がいてくれて助かったよ」

あの教師の鑑とも言える西村先生のお蔭で、事がスムーズに進む事が出来たのだから。あの担任だけだったら、Fクラスだからと言って人の話を全く聞かず、一方的に俺が悪いと決め付けていただろう。

「本当、あの人には頭が上がらないな。流石は俺の尊敬する先生だ」

明久や坂本が聞いたら嫌そうな顔をするだろうが、俺にとって西村先生はとても素晴らしい先生だと思う。

そんな俺が西村先生に感謝していると……。

「天城君」

「ん？」

後ろから声を掛けられた俺が振り向くと、そこには木下優子がいた。

「おや？ 誰かと思つたら、木下さんじゃないか。数時間ぶりだね」

「そうね。で、貴方は新学期早々に何をやらかしたのかしら？ 校内放送を聞いた時、内のクラスの数人が驚いてたわよ」

「ほほう。それって俺がついに悪さをしたかつて意味で？」

「違うわよ。皆が、“あの真面目な天城君がどうして……！？” つて驚いてたの……アタシもその一人だけだ」

「おやおや？ Aクラスの木下さんが、Fクラスの俺を心配してくれるとは光栄ですな」

俺が大げさな仕草をして驚いていると、木下は笑みを浮かべている。

「別に大して心配してないわよ。アタシはただ、去年のクラスメイトとしての誼みで聞いているだけに過ぎないわ」

「おおう！ これは手厳しい事で、もうちょっと優しい言葉を期待していたんだけど……」

「事実を言つたまでよ。それと、その面白そうな仕草は止めて。思わず笑いそうになるわ」

木下の切り返しに俺が更に大げさな仕草をすると、木下は止める様に言つて来た。

もう気付いていると思うが、俺と木下は去年のクラスメイトだけの関係だけでなく、お互いに軽口をたたきあう仲だ。それと同時に学級委員も一緒にやっていた。俺に近い性格なのか、木下とは馬が合っ
て仲が良いと言う訳だ……若干、相手を見下すキツイ所はあるが。

「……………天城君、今何か失礼な事を考えなかったかしら？」

「別に何も」

一瞬、木下をエスパーかと思った俺であつたが、何とか顔に出さず否定する。

「……………まあいいわ。それより天城君、貴方はお弁当を持ってきている？」

「いいや、今日は食堂で食べようかと」

「ふうん……アタシも食堂で食べる予定だから、昼休みに御一緒にいいかしら？」

「別に構わないけど、木下さんが俺を誘うって……………もしかして俺に気があるとか？」

木下の予想外な誘いに、俺が冗談交じりで尋ねると……………。

「そんな訳無いでしょ。それにアタシだけじゃなく、愛子や久保君もいるわよ」

「はあ……………残念」

これは予想通りの返答だったので、俺はわざとらしく残念そうに呟く。

確か聞いた話では木下のタイプの男性って……。

「アタシは知的な男性が好きだって言っただでしょ？ 勿論、見た目だけじゃなく中身もね」

「だよねぇ」

当然、俺はそのカテゴリに入らず、成績の低い俺はタイプじゃ無いらしい。かと言って俺は別に、木下に対して恋愛感情は抱いていない。

確かに木下は美人で成績優秀で、周囲からは高嶺の花とも呼ばれている。一緒に学級委員の仕事をしていた時に、クラスメイトや他のクラスの男子生徒から嫉妬されていた。木下に恋愛感情を抱いていない俺には鬱陶しく、何度も説教しようかと思った日々があった。

とまあ話がちょっと脱線していたが、俺と木下は互いに異性として見ていないと言う事であり、ただの友達に過ぎない。

それに俺の好みのタイプの女の子は、木下より胸がある……。

「…………… ねえ天城君、アタシに対して物凄く失礼な事を考えなかったかしら？」

「滅相も御座いません」

何で木下は俺の考えている事が分かるんだと思いつながらも、俺は必死にポーカーフェイスを保って否定した。

「本当かしらねえ？ てっきり人が一番気にしている事を考えたんじゃないかと思っただけど……」

「まさか。友達である木下さんに、そんな事は微塵も思っただけよ」

「……………」

未だに疑っている視線を送る木下に、俺は早く退散した方が良く考えて……。

「おっと。俺は今から屋上に行かなきゃいけないから、失礼するよ。じゃあ後でな」

「あつ……………」

木下に適当な口実を言いながら、逃げる様に去ったのであった。

「……………何よ、天城君ったら。アタシの前でハッキリと友達って言わなくても……………」

「ふう〜〜〜危ない危ない。もし気付かれたら、絶対に折檻されて
いただろうな」

木下から何とか屋上の出入り口まで逃げ切った俺は、安堵の息を吐
いていた。

「それにしても木下の奴、何であそこまで俺の考えている事が読め
たんだ？ ポーカーフェイスで考えていたんだが……ひょっとして
本当にエスパーだったりしてな」

俺はそう考えながらも、明久達がいる屋上の扉を開けると……。

「誰が美少女だと!?!」

「ええっ!?! 雄二が美少女に反応するの!?!」

「……………(ポツ)」

「ムツツリーニまで!?! どうしよう、僕だけじゃツツコミ切れな
い!」

「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にムツツリーニ」

……………アイツ等は一体何の会話をしているんだ？

可笑しな会話だと思いつつ近寄ると、明久達は俺が来た事に気付く。

「あれ？ シュウじゃない。いつの間に来てたの？」

「ついさっきだ。ってかお前等、さっきの会話は何なんだ？ 突っ込み所が満載で可笑し過ぎる会話だったんだが」

「そんな事より、お前がどうして職員室に呼ばれたんだ？ 放送を聞いた時は驚いたんだが」

俺が明久に尋ねると、坂本が遮るかのように話しかけて来た……まるで自身の失態を隠すかのように。

「……………Dクラスでの宣戦布告の件でちょっとな」

「え？」

「何じゃと？ それはどう言う事なのじゃ？」

坂本の質問に答えると、明久と秀吉が俺を心配そうに見てくる。

……………秀吉の顔を見て少しばかり優子が追いかけて来たかと錯覚したが、敢えて気にせずに職員室での出来事を話す。

そして俺が話し終えると……………。

「何だよそれ。僕をボコボコにしておきながら、シュウに仕返しをするなんて……………」

「自業自得じゃと言うのに、許せんのう」

明久と秀吉が見事に怒っており……………。

「バカだなソイツ。普段から教師達に信頼されている天城相手に、そんな下らん事をするとは。そしたら更に手痛い反撃をされるのに」

「……愚かな奴」

坂本と土屋は俺に仕返しを考えたDクラス生徒を嘲笑っていて……。

「確かにそれは相手の自業自得だけど、天城にも問題があると思うわよ。元はと言えば、アンタが暴力を振るったりするんだから」

「そう言えば、先程また校内放送でDクラスの人達が呼ばれていましたね」

島田は呆れながら見ており、姫路はさっきあった校内放送の事を思い出した。

それと島田、いつも明久に暴力で黙らせているお前に、そんな事を言われる筋合いは無いって何度も言ってるだろうが。

「ソイツは今頃、西村先生と担任に、こつてり搾られているだろうな。特に担任の方は、西村先生や他の教師の前で恥を掻いたから……」

更にヒートアップしてるかもしれない俺が付け加える。

「担任と一緒に鉄人の説教が……これで天城の説教が追加されたら地獄だな」

「そうだね、シュウの説教も恐ろしいから」

「……………おい、その2人。人をあたかも鬼みたいな言い方をするな」

俺の説教を思い出したのか、坂本と明久は身震いしながら思った事を言うので、俺がすぐに突っ込むが……。

「まあ、その件は置いてだ……………天城、さっき明久達と話していたんだが、どうして俺が今回の試召戦争でAクラスじゃなく、Dクラスに挑んだのかは分かるか？」

坂本は無視して俺にDクラスを挑む理由を聞いてきた。

「いきなり質問かよ……………まあ大方の察しは付いているが」

「ほう……………じゃあもう一つ、Eクラスを攻めない理由は分かるか？」

「どうせお前の事だ。俺や姫路さんがいれば、正面からでもEクラスに勝てると判断した筈だ。それに加えて、Aクラスが目標である以上、Eクラス程度と戦っても意味は無い……………とでも考えているんだろう？」

「正解だ。良く分かってるじゃねえか」

俺の返答に満足した坂本は笑みを浮かべた。

「でもシュウ、その言い方だとDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ、確実には勝てないだろうな」

「そうなんだ……。ねえ雄二、だったら最初から目標のAクラスに挑もうよ」

「？」

俺の答えを聞いた明久は、雄二にDクラスからAクラスに変更しようと言う……。その事に俺は疑問を抱き始める。

何故かAクラスに拘っている感じがするなと思いながらも俺は……。

「明久、今の俺達がAクラスに挑んだ所で瞬殺されるぞ」

「え？ どうして？」

無駄だと言うが、明久はまだ理解していないみたいだ。

「お前な……。だったらRPGゲームで言えば、レベル1の主人公がラスボスに挑むみたいな物だ。それで勝てると思うか？ 無論、裏技やチートなんか一切使わないで真正面からだぞ」

言うまでもなく、レベル1の主人公がFクラスで、ラスボスはAクラスだ。

「う……。確かにそれは無理だね」

「明久でも分かりやすい説明の仕方だな。流石、付き合いが長いだけあって、明久の保護者みたいな奴だ」

明久に対する説明に、坂本は感心した様な顔をして俺を茶化す。

「茶化すな、坂本。でだ明久、Dクラスに挑むのは、Aクラスに挑む前の経験地稼ぎと下準備みたいなもの。決戦に挑む前には必要な行動だという事くらい、お前も分かっている筈だ」

「そう言う事だ、明久。お前が天城に言った、打倒Aクラスの前には作戦に必要なプロセスがあるからな」

俺と坂本の追加した説明で明久は完全に理解し、秀吉や土屋に島田、そして姫路も理解したのであった。

と、そんな時……。

「あ、あの！」

いきなり姫路が珍しい大きな声を出した。

「ん？ どうした姫路？」

「えっと、その。天城君に言った、って……吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」

姫路の質問に俺も同様に思った。確かに、坂本がいきなりAクラスに試召戦争をやると言い出した事に、明久は何の疑問も抱かずに参加しようとしていた。

ただでさえ観察処分者の肩書きを持ってしまった明久は、召喚獣によって受けた痛みがフィードバックされる。ハッキリ言って自殺行為に等しい。そんな事は当然、明久も分かっている筈なのだが……？

「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為にって明久に相談されて……」

「それはそうと！」

雄二が言っている最中に明久が、いきなり遮るかのように大声を出した。

だが少しばかり遅かったな、明久。もう俺は読めたぞ。お前が姫路の為に試召戦争を起こし、勝利して良い設備を与えようとしている事を。

聞いた話だが、姫路は病弱気味で運動神経も余り無い。そんな彼女がFクラスと言う劣悪な環境に居続けてしまったら、更に体調が悪くなるだろうと明久は考えた筈だ。

明久の事だから、姫路に良い環境で勉強させる為に、試召戦争で勝とうと考えて坂本と結託したのだろう。

恐らく坂本も理由がある筈だ。でなければ、新学期早々いきなり試召戦争をやるだなんて言い出す訳が無い。まあ聞いた所で、坂本は俺に話す気は無いと思う。

坂本は俺に対して余り本当の事は言わないし、もし言った所で俺が絶対に反対すると思っているから、俺が説教中に問い質しても沈黙を貫こうと考えているに違いない。

まあそれは友達の明久にも言える事だが……アイツの場合は誰かを守る為や庇う為に沈黙を貫いているけど。

明久と坂本は似てないようで、似ていると思っている俺であつたが……。

「それじゃ、作戦を説明しよう。おい天城、何を考えているのかは知らんが、お前もちゃんと聞けよ」

考え事をしている最中に会話が進んでいたので、俺はすぐに頭の中を切り替えて、坂本の言う作戦内容を聞き始めるのであつた。

第四問

バカテスト 数学

問 以下の問いに答えなさい

(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を1つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、 $?$ の中から選りなさい

$$? \sin A + \cos B$$

$$? \sin A - \cos B$$

$$? \sin A \cos B$$

$$? \sin A \cos B +$$

$$\cos A \sin B$$

姫路瑞希の答え

$$(1) X = \pi / 6$$

$$(2) ?$$

教師のコメント

そうですね。角度を『 $^{\circ}$ 』ではなく『 π 』で書いてありますし、完璧です。

天城修哉の答え

(1) 大変恥ずかしいのですが、解りません。後ほど解説をお願いします。

$$(2) ?$$

教師のコメント

(1) は出来なかったみたいですが、(2) は正解です。
それに出来なかったからと言って恥じる事はありませんよ。

西村先生が天城君に解説をすると行ってましたので、少し待ってて下さい。

土屋康太の答え

(1) X II およそ3

教師のコメント

およそをつけてごまかしたい気持ちもわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

(2) およそ？

教師のコメント

先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそを着ける生徒は君が初めてです。

Dクラスと試召戦争前の昼休みにて……。

「FクラスがDクラスに試召戦争ねえ。勝てる見込みはあるのかしら、天城君？」

「さあ、どうだろうな？」

俺は食堂で、約束した木下と一緒に飯を食っており……。

「けど天城君は災難だねえ。Fクラスの代表は一体何を考えているのかな？」

「全くだよ。新学期早々に試召戦争をやるだなんて」

他にも俺と木下の向かいに座っているAクラス生徒である工藤愛子と久保利光もいた。

「坂本は俺の前で本当の事は喋らないから、理由は分からんな」

「天城君でも分からないの？ 何時も説教してるのに？」

「あんな、工藤さん。説教しているからと言って、相手の事が分かるって訳じゃ無いんだぞ」

俺は工藤の質問に顔を顰めながら答える。

工藤は1年の終わり頃に転入して来た、俺と木下の去年のクラスメイトだった。性格は木下とは対照的でフレンドリーな女子だ。そん

な工藤の性格が幸いしてか、すぐに友達が何人か出来て、いち早くクラスのムードメーカーになった。ついでに得意科目は保健体育であり、性に関しての知識がやたらと豊富だ。本人曰く、実技で身に付けたと言ってる。それが本当か嘘かは知らないけど、確かに保健体育の成績は凄く高い。何故そんなに知っているのかって？ それは工藤が自慢げに語っていたからだ。まあ保健体育だけじゃなく、他の科目の成績も高いからAクラスにいるんだろうが。

「まあ坂本君の事はいいとして、天城君は何で試召戦争をやる事に反対しなかったんだい？ 平穏を好む君にして見れば、止めると思っただが」

「無論、反対して止めるつもりだったんだが……坂本に一杯食わされてな。試召戦争に参加せざるを得なかったんだ」

次に久保は、俺と木下が学級委員の集まりで知り合った男子だ。久保は眼鏡を掛けた理知的なイケメンで、真面目で頭も良さそうに見えるが、実際その通りだ。女子生徒には優しく接し、テストでは常に上位の記録を持つ成績優秀で勤勉なイケメン学生だ。これときめかない女子はいないだろう……優子のタイプの男性に入ると思うが、本人は何故か久保はタイプでは無いみたいと言っている。まあ、そんな事はどうでもいいとして、久保の事を聞いただけで羨ましいだろうと思っているだろうが……実は久保にはちょっとした秘密があった。

「それに今回の試召戦争は、明久も積極的に参加するみたいでな」

「吉井君が！？」

俺が明久と言った途端に久保は敏感に反応して、テーブルに身を乗

り出して俺に顔を近づける。

「どうして吉井君も参加するんだ！？ 彼は確か観察処分者で、召喚獣によって受けたダメージがフィードバックされるのに！」

「…………… 久保、取り敢えず離れてくれ。そんなに近づかれると飯が食えん」

「あ…………… すまない。取り乱してしまった」

「………………………………………」

俺の突っ込みに久保は咳払いをしながら、俺から離れて椅子に座る…………… その様子に木下と工藤は生暖かい目で見ながら無言となっているが。

「し…………… しかし、吉井君はどうして参加しようとする？」

「悪いが明久の友人として、黙秘させて貰う」

「…………… ！…………… どうして！？」

久保はショックを受けたかのような顔になる。だって教えたら、お前は絶対に凄まじいほどのショックを受けると思っから。

「天城君、いくら君が吉井君の友人だからと言って、教えないとは酷いじゃないか！ 僕は純粋に吉井君を心配して……………」

「まあまあ、落ち着いて」

「そうよ久保君。Aクラスの貴方が取り乱してたら、周りに示しがつかないわ。それに無理矢理聞き出そうとするのは、余り良くないと思うし」

「け…けど僕は……」

工藤と木下が宥めようとするが、久保はまだ落ち着かないので……。

「久保、お前は俺が明久の友人である事に気に食わないのは分かる。だが、もしソレを無理矢理聞いて明久が知ったら……嫌われると思うぞ？」

「……！！……わ…分かった……もう聞かないよ」

俺がちよつとした警告をすると、すぐに身を引いた。本当にコイツは明久の事となると、面白い位に変わる。

もう気付いたと思うだろうが、久保は明久の事が好きなのだ……恋愛対象として。それは俺だけでなく、此処にいる木下や工藤も知っている。

どうして久保が明久の事を好きになったのかは知らないが、俺にはとても考えられなかった。別に同性愛自体を否定している訳ではないが、まさかこんな身近にいたなんて思いもしなかったのだ。もし明久や久保が友人でなければ密かに応援していただろうが、2人も俺の友人なので無理だった。だから俺は明久を余り久保には近寄らせず一定の距離を取らせており、久保が明久に近づこうとするのを阻止する為に俺が話し掛ける。

とまあ、そんな久保を生殺し状態にさせ続けた結果、久保の明久に

対する恋心が更に強まって今に至るのだ。その時の俺は、多少は明久と会話させれば良かったと後悔していたが。だからと言って今の久保に明久を近づけさせたら何を仕出かすか分からないので、今でもそれを続けている。

俺がそんな事を考えながら飯を食っていると……。

「所で天城君。聞き忘れたんだけど、どうして貴方が職員室に呼ばれたのかを聞いてもいいかしら？」

木下は話題を変えたいのか、俺が職員室に呼ばれた理由を聞くのであった。

「ああ、それね。実は……いや、此処で話す話題じゃないから止めておく。だから別の話を……」

「何ですよ。別に良いじゃない。アタシ達に話せない事なの？」

「あ、それボクも聞きたい。校内放送を聞いた時は驚いたよ。一体何があったの？」

「僕も気になっていたよ。どうして呼び出されたんだい？」

俺が他の話題にしようとしたのだが、木下や工藤、復活した久保がすぐに問い質す。

この3人は俺の事を心配して聞いたのだろうが、俺としては今此処で言いたくないのだ。いや、別に話しても良いんだけど、久保がな……。

「……………分かった。じゃあ話そう。ってかこの話をするのは、もう3回目だよ」

そして俺が職員室に呼ばれた理由と、Dクラスでの宣戦布告での出来事を話すと…………。

「何を考えていたのかしら？ そのDクラス生徒は」

「自業自得なのに、天城君に仕返しをしようだなんて…………」

「確かに大変許し難い行為だが…………吉井君に暴行をしていた事が更に許せない！！」

「「あ……………」」

木下と工藤は呆れた顔をしており、久保は俺に嘘の証言をしたDクラス生徒に憤っていた…………主に明久に対してだが。久保の反応を見た木下と工藤は、俺が話したくない理由がすぐに分かった。

「だから話したくなかったんだよ」

「「……………ゴメン」」

俺の突っ込みに2人が揃って謝ると、久保が…………。

「僕としては今すぐDクラスに試召戦争を…………！！」

メラメラと燃え始めて、今すぐDクラスに行って天誅を下そうみたいな感じになっていた。

「……………悪いけど2人とも、俺もう教室に戻るから」

これ以上、久保といると他にも何か聞かれそうだと思った俺は既に食べ終えた空の食器を持って、席を立とうとする。

「それじゃあ御三方、俺は試召戦争があるから失礼するよ」

「え…ええ。一応、応援だけはしておくわ。頑張って」

「頑張つてねえ〜天城君、ボクも応援してるから」

木下と工藤は俺にエールを送り……。

「吉井君に暴行をする奴には、僕が天誅を……！」

「久保、試召戦争中に勝手な事はしないでくれよ」

久保の独り言に突っ込みを入れた俺は颯爽と食器を片付けて、食堂から出て行ったのであった。

試召戦争は開始されたのだが……。

「やれやれ、開始早々に回復試験を受けなきゃいけないとは……」

「仕方ないですよ。私達の持ち点は今0点ですから」

俺は姫路と一緒に回復試験を受けていた。

既に知っているだろうが、振り分け試験で俺は欠席、姫路が途中退席なので、全科目が0点扱いとなっているのだ。試召戦争は点数が無ければ参加する事は出来ないの、0点の俺と姫路は回復試験を受けていると言う事だ。

「出来れば一科目だけに絞って、すぐに前線に立ちたいんだがな」

「そう言う訳には行かないだろうが」

「だよな」

俺の呟きに坂本がすぐに突っ込み、俺は頷きながらも回復試験を続けている。因みに今は俺の得意科目である現国だ。えっと、今度は四字熟語と意味か……これは。

「……………」

「何だ？」

「お前、得意科目に関しては姫路並だな」

「そりゃどうも」

坂本の台詞に適当に返事をしながらも俺は問題を解いており、姫路

も同様に問題をスラスラと解いていた。

俺と姫路が回復試験をやっている最中……。

「さて、そろそろ明久が逃げようと考えている頃だな。おい横田、ちよつといいか？」

「何ですか？」

坂本が横田を呼んで、メモ用紙に何かを書いた後に渡した。

「これは？」

「俺からの伝言だ。それを明久に渡せ」

「了解しました。では」

横田はメモ用紙を持ちながら、すぐに教室を出て行く。

「戦意喪失気味だと思われる明久に渴を入れるのか？」

「アイツの事だから、戦死した奴が鉄人に連行されるのを見て、自分達は良くやったと言いながら此处に戻ろうと考えている筈だ。だからそうした」

「……………確かにアイツは自分がされるのを考えただけで、すぐに逃げ出そうとするな」

坂本の言葉に俺は頷く。

そして横田が出て少し経った後に、秀吉率いる前線部隊が戻って来た。

「秀吉、状況は？」

「うむ。守りを明久達に任せておいたから、ワシ等はその間に点数を補充しに来たじゃ」

「分かった。なら早く始めろ」

坂本が秀吉達に回復試験を受けさせようと指示すると、秀吉と前線部隊はすぐに回復試験を始めた。

「天城君、吉井君は大丈夫でしょうか？」

「さあな。アイツは一応根性だけはあるから、それなりには持ち応えると思うけど」

「だと良いんですが……」

俺の言葉に明久を心配する姫路であったが、俺は引き続き回復試験を受けるのであった。

また少し時間が経ち、俺が回復試験の大半を終わらせていると……。

「吉井の奴！！ 絶対に後で殺してやるんだから！！」

いきなり物騒な台詞を言った島田が、須川に羽交い絞めされながら教室に入ってきた。島田の台詞により教室にいる一同が引き気味になっている。

「おい島田、明久にそんな事をしたら、俺はお前の動きを封じた後に警察に連絡して引き渡さなきゃいけないんだが……」

「あのバカはウチを見捨てたのよ！！」

島田が憤慨しながら言っているのを察するに、明久は島田を見捨てる行動を取ったのだろう。

「後で吉井はウチがグロテスクに……」

「……………取り敢えず後の事を考えて、お前には少し大人しくしててもらおう」

俺は殺気を振りまいている島田にそっと近づき……。

ドンッ！

「うっ！」

バタンッ！

島田の首筋に手刀を打ち込むと、島田は気絶したのであった。

「これでよしと」

「…………おい天城、味方を気絶させてどうする」

俺が島田を気絶させた事に、雄二は顔を顰める。秀吉や前線部隊、回復試験中の姫路も見てて呆然としていた……………その中で須川だけは安堵しながら教室から出て行ったが。

「島田が味方殺しだけじゃなく、本物の殺人犯になる前に手を打っただけだ」

「だからと言って、此处で島田を気絶させたら支障が出るだろうが」

「それは俺が責任を持って対応するから安心しろ。と言う訳で坂本、俺は前線に行かせてもらっぞ」

「お…おい、待て！ お前はまだ完全に補充しきっていないだろうが」

「必要最低限の科目は受けたから、取り敢えず大丈夫だ」

教室から出ようとする俺に坂本が引き止めようとするが、俺は無視する。

「それに俺が行けば、姫路が完全に回復試験が終える為の時間稼ぎにもなる。他にもDクラスの連中は俺を恐れている節が見受けられるから、多少のハツタリもかけれる。それでもまだ俺を行かせないつもりか？」

「……………」

俺が行く理由を並べると、坂本は少し考えている顔をしているが……。

「分かった、なるべく時間を稼いでくれ。それと出来れば、姫路が代表の所へすんなりと進める位に敵を倒して欲しい」

「出来ればの話だがな、なるべくやってみよう。姫路、早く終わらせておけよ」

「は、はい！ 分かりました！」

俺の言葉に姫路が返事をした後に物凄い集中力で回復試験を続行し、俺は教室から出て行ったのであった。

「さて、戦況は…… 持ち堪えているとは言え、やはり苦戦しているな」

状況を見る限りでは、明久と中堅部隊が何とか持ち堪えているみたいだ。それと同時にDクラスが此方の時間稼ぎ目的に気付いており、早めに決着を付けたがっている。恐らく平賀が俺が回復試験を完全に終える前に早く終わらそうとしているのだろう。

明久が須川と話しているみたいで聞き取れないが、何か作戦を練っ

ていそんな感じだった。一応、明久は隊長としての役割は果たしているみたいだな……それでも後方から指揮をして、自分から戦わずに安全な所にいるけど。

俺がそう思っていると、須川が前線から引いて再び教室に戻ろうとしている。その間に須川が俺の顔を見て……。

「天城、悪いがすぐに吉井の援護を頼む」

そう言いながら、すぐに教室へと入った……何故か奴の顔が妙に活き活きとしていた顔になっていたが、敢えて気にしない事にする。

「どうやら須川は明久が言った作戦について、坂本に知恵を借りに行ったって所か。どんな作戦かは知らんが、取り敢えずは……おい明久」

「え？ ……シュウ!？」

安全地帯にいる明久に声を掛けると、明久はキョトンとして後ろを見た途端に俺の顔を見て驚く。

「どうしてシュウが？ もう回復試験は終わったの？」

「必要最低限はな……で、お前は一体、須川に何の作戦の指示をしたんだ？」

「う…うん。須川君にDクラス側にいる先生たちが、他の場所に言ってくれるように偽情報を流して欲しいって頼んだんだ」

「偽情報ねえ……」

明久の作戦を聞いて何か嫌な予感がした。妙に活き活きとした須川の顔を思い出して、俺は碌でもない情報を流しそうだと思う。

まあ作戦は作戦だから、取り敢えずは須川の作戦に期待はしておくが。

「では俺も行くでしょう、いつまでも見物している訳には行かないからな」

「ま…待ってシュウ！ どうせなら指揮官の僕を護衛してくれない？ 僕がやられたら不味い事になると思うし」

尤もな事を言っている明久であつたが……。

「……………で、本音は？」

「僕を危険から遠ざけて欲しい」

「……………」

俺が本当の事を言わせると、やはり保身の為であつた。

「……………自分の身は自分で守る事だな」

「ああっ！ シュウ！ 僕を見捨てないでえ〜！」

離すまいと俺の腕を引っ張ろうとする明久だったが、俺は即座に前線へと向かった。

「ではDクラスの皆さん、今度は俺も参戦させてもらっよ」

『天城！？』

俺が参戦するとDクラスの連中は驚いたかのような顔になっている。

『た…大変だ塚本！ 天城が来たぞ！！』

『何だと！？ もうアイツは回復試験を終えたのか！？』

「驚いている所を悪いが…サモン試獣召喚 ！」

Dクラスが戸惑いながら後方にいる塚本に大きな声を出して報告している最中、俺は召喚獣を呼び出す為のキーワードを言う。

そして俺の足元からは魔方阵みたいな図形が現れ、その中心からは召喚獣が出て来た。

その召喚獣は黒のロングコートを纏っている中に防刃ベストを着て、黒のストラップスにロングブーツを穿いており、左手には鞘に納まっている刀を持ったデフォルメの俺だった。

「では行こう。俺の相手をするのは誰だ？」

『うつ！！』

俺と召喚獣が進むと、Dクラスは何故か引き気味になる。

「何をそんなに恐がっているんだ？　これは試召戦争だぞ、さっさと掛かって来い」

『ひいつ！』

目を細めながら睨む俺にDクラスの連中は召喚獣と共に恐がっており、向かって来る気配が無い。

「来ないなら……此方から攻めさせてもらう！」

掛け声と同時に俺の召喚獣が、消耗していて動いていないDクラスの召喚獣に襲いかかり……。

『Fクラス　天城修哉　化学　128点

VS

Dクラス　鈴木一郎　化学　92点

Dクラス　笹島圭吾　化学　98点』

「先ずは2人」

シャキンッ！ ザシュッ！ ザシュッ！

「「ああっ！！！」」

俺の召喚獣は居合を使ってDクラスの召喚獣2体の首を刎ねると、すぐに倒した。

『Dクラス 鈴木一郎 化学 0点』

Dクラス 笹島圭吾 化学 0点』

「0点になった戦死者は補習〜〜！！！！！」

2人が戦死した途端、すぐに西村先生が物凄いスピードを出しながら現れて、戦死したDクラス生徒2名を担ぐ。

「「た…助けてくれえ〜〜！！！！ 鬼の補習は嫌だ〜〜！！！！！」」

「これは立派な教育だ！！ 趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎と言う、理想的な生徒に仕立ててやるから覚悟しろ！」

「「いやだあ〜〜！！！！！」」

Dクラス生徒2名の叫びは虚しくも、西村先生によって補習室へと連行されてしまった。

「ふむ……………戦死云々は兎も角として、西村先生の補習授業なら受けても構わないな。あの人の教え方は丁寧で大変分かり易いから」

『なにいつ!!!』

俺の台詞にDクラス生徒達だけでなく、味方のFクラス生徒達も驚きの声を発していた。

「ちょ…ちょっとシュウ!! それ本気で言ってるの!? 自分から鉄人の補習を受けても構わないって!?!」

「お前は頭が可笑しいんじゃないのか!?!」

「あの地獄の拷問を自ら受けたいと言っのか!?!」

「天城はどこまで規格外なんだ!?!」

「……………おい貴様等、それはどう言う意味だ?」

明久を含めた中堅部隊が失礼な事を言ってるので、俺が振り向いて睨むが…………。

『塚本お～～!!!! やっぱ天城は恐ろしい奴だ!!!』

『負けても自分から補習室に行くと言ってるぞ～～!!!』

『しかも天城は鉄人を神聖視している～～!!!』

『マジか!?! じゃあアイツの強さは鉄人を崇拜した為に強くなっ

たと言うのか！？ 天城修哉は何処まで恐ろしい奴なんだ！！」

「…………… 待てコラ」

Dクラスの方も俺に大変失礼な事をほざいていた。

『だが天城は数学が苦手だと平賀が言ってた！ もう少しで数学の船越先生が来る！！ それまで何とか耐えてくれ！！』

「…………… 船越先生だと？」

後方の塚本の大声を聞いて、俺は少し顔を歪めた。

数学の船越先生…………… 45歳独身。婚期を逃し、単位を盾にし生徒に交際を申し込んでいると言う、噂の女性教師。当然それは噂ではなく真実である。

俺は以前、職員室に行つて西村先生に数学で分からない所を聞きに行つた際に船越先生が現れて、いきなり俺を自分の席に連れて、教えて欲しかったら交際しろと迫られたのだ。言うまでもなく俺は断つたのだが船越先生はしつこく、更には単位を落とされなくなかつたら付き合えと脅された。もう絶体絶命だと思いきや、西村先生が助けてくれて、俺は九死に一生を得たのだ。

そんな事があつた所為で、俺は少しばかり得意であつた数学が嫌になつて成績も落ちたのだ。数学のテストで赤点を取つた時に他の数学教師の先生が、特例中の特例として謝罪しながら追試を免除してくれたのだ。その代わり西村先生の補習授業を受ける事になったが…………… その時の西村先生は懇切丁寧に教えてくれた。

と言う訳があつた故に、数学の成績が落ちた元凶となった船越先生には近寄らないようにしていたが、まさかDクラスが此処で呼ぶとは思わなかった。

「船越先生が来る前に、さっさと目の前の連中を倒すでしょう」

俺はDクラス生徒の召喚獣を倒そうと思っていたが……。

ピンポンパンポーン！

《連絡致します》

「ん？ この声……須川か？」

突然、校内放送から須川の声が聞こえた。

まさかアイツ、校内放送を使って偽情報を流すつもりなのか？

《船越先生、船越先生》

しかも呼び出す相手が船越先生か。俺にとっては物凄く都合だ。

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

何……だと？

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

……………明久、お前の犠牲を無駄にはしないで。恐らく須川か坂本のどちらかが考えた作戦だろうが。

と、俺がそんな事を考えていると……。

「吉井隊長……アンタあ男だよ！」

「ああ。感動したよ。まさかクラスの為にそこまでやってくれるなんて！」

他のFクラス生徒達は明久が自分から自己犠牲をしていると勘違いしているのか、明久を物凄く感心しているかのような目で見ていた。

「違う！ 違うんだよ！ 僕はそんな指示を出してはいないよ！！ シュウ！ 君は分かる筈だね！？ 僕がそんな指示を出していないって事に！？」

「……………そうは言っがな、明久。Dクラスの方をしてみてください」

「え？」

『おい、聞いたか今の放送』

『ああ。Fクラスの連中、本気で勝ちに来てるぞ』

『ただでさえ鉄人に洗脳された天城だけじゃなく、あんなに確固たる意思を持つてる奴等に勝てるのか……？』

Dクラスも校内放送を聞いて戦慄をするかのように呟いていた……
……ってか最後の奴は余計だったが。

「向こうは完全に勘違いしているぞ」

「うわあ~~~~!!!! これじゃドンドン否定しにくくなっちゃうよ
お~~~~!!!!」

俺の一言を言った後に明久は頭に手を置いて、顔を上の方に向けながら叫びを上げる。

「皆、吉井隊長の死を無駄にするな！」

「絶対に勝つぞー！」

「俺達も天城に続けーー!!」

Fクラスは士気が上がってDクラスに突進し始める。

「……………」

「さて、俺は引き続きDクラスの部隊を倒すとするか」

俺が再び、Dクラスの召喚獣の方に意識を向けると……。

「須川あああああああ……!!!!!!」

明久は怨念めいた叫びを上げていたのであった。

第四問（後書き）

旅人『今回は怒らないんだな』

修哉「苦手な船越先生の事を考えると、あんまりそんな気になれないんですよ」

旅人『まあ交際を迫られてトラウマになり、成績を下げた元凶の船越先生が相手じゃあ……そうなる気持ちも分かるね』

修哉「船越先生の事があるから見逃しておくが、それ以外の事だつたら説教しますよ」

旅人『そうかい……ではそうしてくれ』

第五問（前書き）

いつもより若干短いです。

第五問

バカテスト 物理

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい
『光は波であつて、（ ）である』

姫路瑞希の答え
『粒子』

教師のコメント
よく出来ました

天城修哉の答え
『量子』

教師のコメント
間違つてはいないのですが、残念ながらこの問題での答えは粒子です。
私個人としては丸を付けますが。

土屋康太の答え
『寄せては返すの』

教師のコメント
君の回答には、先生はいつも度肝を抜かれます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

それと天城君が言っていましたよ。次の問題でふざけた回答をしたら容赦なく説教をします。

俺は確実にDクラスの召喚獣を薙ぎ倒していたが……。

「工藤信也、戦死！」

「西村雄一郎、総合残り40点です！」

「森川が戻ってこない！ やられたか！？」

俺以外のFクラス生徒が盛り上がった土気のまま一緒に戦っている最中、段々と戦力差の影響が現れ始め、次々と景気の悪い方向へと進んでいた。工藤と森川が補習室送りになり、俺を含めた明久と

中堅部隊は残り6名。

ふむ…………やはり士気が高くなったとは言え、Dクラス相手じゃ点数差が違うか。出来ればそろそろ援軍を差し向けて欲しいが。

「隙ありいゝ！」

俺の召喚獣が動きが止まった瞬間に、Dクラス生徒の召喚獣は攻撃を仕掛けようとしたが……。

「甘い」

シャキンッ！ ザシュッ！

「なっ！？」

言葉を発すると同時に、俺の召喚獣が背後から襲いかかってきた召喚獣を居合で薙ぎ倒す。

「背後からの攻撃に、声を出したら折角のチャンスが台無しだろうが」

『Fクラス 天城修哉 化学 128点』

俺の召喚獣は未だにダメージを受けずに、一人一人倒していた。

「くっ！ さっきから攻撃をしているのに、何故当たらない！？」

「召喚獣の扱いは俺達と同じく大して慣れていない筈なのに!？」

「何であそこまで正確な操作が出来るんだ!？」

それはDクラスだけでなく味方の中堅部隊も疑問に思っている……
明久は少々苦い顔をしているが。

俺には明久があんな顔をしている理由は分かる。それは……。

「天城、明久、あと少し持ちこたえろ！」

と、いきなり後ろから俺と明久に檄が飛んできた。俺が後ろを見ると遙か後方には坂本達の姿が見える。

坂本達がいると言う事は……援軍か。此方としては助かる。中堅部隊が殆ど補習室送りにされていたからな。

「援軍だ！ 合流される前に早く吉井達をすぐに全滅させろ！ そうしたら天城に集中攻撃をするんだ!!」

ふむ……そうされたら俺としてはかなり不味い状況になるな。だったらそうなる前に、何とか持ちこたえるか。

と、俺が中堅部隊に気を取られているDクラスの召喚獣に攻撃を仕掛けようとしたが……。

「「させるかあ!」」

「おっと!」

俺の召喚獣の横からDクラスの召喚獣2体が攻撃を仕掛けたので、即座にかわして距離を取った。

「Fクラスの部隊が全滅するまで、俺達の相手をしてもらっぞ！」

「覚悟しろ天城！」

「やれやれ、お前達に構っている暇は無いんだが」

Dクラスの召喚獣2体が一斉攻撃を仕掛けてきたので、俺の召喚獣はかわしながら居合をやる。

シャキンッ！ ザシュ！ ザシュ！

「邪魔だ」

「くそっ！ 何でだ！？」

「お前イカサマしてるんじゃないのか！？」

俺の召喚獣がDクラス召喚獣を倒すと、相手が俺に文句を言ってきた。

「そんな訳あるか。俺は明久が雑用をしている際に監視を……」

「戦死者は補習……！！！」

「「うわあああ……！！！！！」」

俺が理由を言っている際に西村先生が現れて、戦死したDクラス生

徒2人を担いで連れて行った。

凄いな西村先生は……すぐに逃げようとしたDクラス2人を一瞬で捕まえるとは。

で、残りは俺と明久、そして中堅部隊の3人だけになってしまったか。

「シュウ……雄二達が来るまで、どうする？」

明久が自身の召喚獣と一緒にDクラスの攻撃を掻い潜りながら俺の所まで来た。

コイツは回避や逃走に関しては矢鱈とずば抜けているから、俺の所にいれば安心だと思いながら近づいたのだろう。

「どうすると言っても……坂本達が来る前に持ち堪えるしかないだろう」

「……………だよね」

「とは言え、多少は倒しても……これだけの人数相手に持ち堪えるのはキツイな」

俺と明久は前を見ながらDクラス生徒達を見て話している。そんな会話をしているのにも拘らずDクラス生徒達は、すぐには攻撃を仕掛けようとはしない。

「どうやらDクラスの皆はシュウを警戒しているみたいだね」

「下手に俺を攻撃したら反撃を喰らうと思っているんだろ」

「シユウは無傷で8体ほど倒しているからね……にしても凄いよ、そんなに倒すなんて。そこまで召喚獣を上手く操れるのは、僕と一緒に雑用をやったお蔭かな？」

「違う。お前が召喚獣を使用している際に下らん事を仕出かさないかの監視だ」

「うぐ……それを言わないでよ」

明久は苦々しそうな顔をする。

「まあその監視があつた事で俺も明久並に召喚獣の操作が可能になったけど……」

知つての通り、明久は観察処分者なので召喚獣を使用して教師の雑用を押し付けられている。それによって明久は召喚獣の扱いに関して誰よりも長けていた。明久が2学年の中で召喚獣を扱うのに使い慣れているのは分かるが、どうして俺も召喚獣を使い慣れている事に疑問を抱くだろう。

理由は俺が召喚獣を使って雑用をしている明久を監視していたからだ。それだけで召喚獣の扱いは関係無いだろうと思われるだろうが、俺は明久の監視と一緒に召喚獣も出していたのだ。

明久は以前に西村先生以外の先生に雑用を任されていた時に、人使いが荒い先生に散々扱き使われた所為で少しばかり暴走し、召喚獣を使って先生が目を逸らした隙に気絶させて逃走した事があった。

それを偶々現場に居合わせた俺が逃げようとしていた明久を捕まえようとしたのだが、物理干渉が出来る明久の召喚獣が邪魔した所為によって、思うように簡単に捕まえる事が出来ずに苦戦していた。けれど召喚フィールドが未だに展開されていた事に気付いた俺は、自身の召喚獣を使って鎮圧させた後、フィードバックによる痛みで悶えている明久を捕まえて説教した。その事を知った西村先生が自分以外の雑用の時は、明久がまた暴走しない様に監視して欲しいと言われたので、俺は召喚獣を出しながら明久を監視していた。

もう気付いたと思われるが、俺は明久の監視も含めて自身の召喚獣の操作練習をした事によって、明久程では無いがそれなりの操作が出来ると言っ訳だ。

「とまあ解説はこんな所で良いだろう」

「解説って……何を言ってるの？」

「コッチの話だから気にするな……それより、向こうもそろそろ攻撃を仕掛けそうだな」

Dクラスがタイミングを見計らっているように、Dクラスの召喚獣達が攻撃を仕掛けそうな雰囲気だった。

「だったらこれで……ああっ！霧島さんのスカートが捲れている！」

「おい明久、そんな稚拙な引っ掛けにDクラスが……」

明久がいきなりDクラスの背後を指差して叫ぶ事に、俺は呆れながら言おうとしたが……

『なにいつ！？』

「……………引っ掛かったな」

Dクラス生徒達が一斉に後ろを向いた……男子だけでなく女子も。

おいおいDクラスの諸君、散々バカ扱いしていた明久の幼稚な引っ掛けに騙されているって事は、自分達もバカだって言ってるようなもんだぞ？

俺が内心でDクラスに突っ込みを入れていると……。

ガシャアアン！！

「は？」

『な、なんだ！？ 何事だ！？』

明久が何を考えているのか、上靴を窓に向けて投げつけ、窓ガラスを割った。その事に俺やDクラス生徒達は一斉に窓を見る。

「うわっ！ 島田さん！ そんな物をどうする気だよ！」

窓の方に気を取られている隙に明久が何時の間にか消火器を持って……。

プシャアアアア！！！！

Dクラスに向けて消火薬を噴射させた。

「う、うわっ！ 何だ！？」

「ぺっぺっ！ こりゃ消火器の粉じゃねえか！」

「前が見えない！」

「お…おい明久！ お前何を……」

俺は明久の行動を不可解に思いながらも止めようとしたが……。

「島田さん！ キミはなんてことを！ ……シュウ、逃げるよ」

「あ…明久、お前まさか」

やったのが島田だと思い込ませるようなデカイ声を上げた明久は、後から小声で俺に逃げるように言ってきた。

おい明久……逃走する為に窓をぶち破っただけでなく、消火器を噴射させたのを島田の仕業にするのかよ。

「Fクラスの島田め！ なんて卑怯な奴なんだ！」

「許せねえ！ 彼女にしたくない女子ランキングに載せてやるからな！」

「そうだ！ 在学中には彼氏の出来ない状況にしてやる！」

「……でも、男らしくてステキ……。お姉さま……」

そして勘違いしたDクラスは島田に対して恨み言をぶつけている……最後の女子は若干危険な雰囲気を漂わせていたが。

「……それで明久、島田にどんな言い訳をするんだ？」

「あ……アハハハハ………すまない、島田さん。君の犠牲は無駄にはしないよ」

俺の問いに明久は島田に黙祷を捧げていた………当の本人は教室で俺によって気絶しているが。

明久、お前が島田に殴られても俺は知らんからな。今回の出来事については島田が明久を殴っても見過ごす事にしよう………度が過ぎる行為に発展すれば止めはするが。

そう思っていると坂本達の姿が近くなつたのを見た俺は、取り敢えず劣勢から脱する事が出来たと安堵する。

しかし……。

「だあああつ！」

ガンッ！ シュワァー――

明久は消火薬を出し切った消火器を天井に投げて、ぶつけた拍子にスプリングカラーが作動した。

それによって水滴が辺りに舞う粉を落とし始めている。

「おい明久、お前は どうして……」

学校の器物を何の躊躇いもなく壊せるのかと問い質そうとしたが……。

「待たせたな、吉井、天城！ Fクラス、こんどつよしむね近藤吉宗が行きます！」

坂本率いるFクラス本隊の一人、近藤が遮ってしまった。

「サモン試獣召喚！」

『Fクラス 近藤吉宗 化学 91点』

Dクラス なかのけんたVS 中野健太 化学 43点』

「くっ！ ここは退くぞ！ 全員遅れるな！」

Dクラスの塚本の撤退命令により中野や他のDクラス生徒達は退いて行ったのであった。

「深追いはするな。俺達も明久の部隊と天城を回収したら一旦戻ろぞ」

Fクラス代表、坂本の命令により追撃をしようとした本隊が足を止めた。恐らく坂本は相手の本隊が出てくるのを嫌ったから、こんな消極的な命令を下したに違いない。

俺もその判断は正しいと思う。

「さて、無事なようだな。明久、天城」

「うん、まあね」

「坂本の要望に応える事が出来なかったがな」

明久は安堵しながら答え、俺は少ばかり苦い顔をしている。

「気にするな、天城。得意科目じゃない化学であそこまで善戦したんだ。にしても驚いたぞ。まさか天城があそこまで召喚獣の操作に慣れていたとはな……」

「今はそんな事どうでもいいだろう。戻るんじゃないのか？」

「おっと、そうだったな。お前等！ 一度教室に戻るぞ！」

坂本の指示により俺と明久、坂本率いる本隊が教室に戻るのだった。

教室に戻って、消耗した化学の点数を補充し終えた俺や明久達であつたが……。

「明久、よくやった」

いきなり坂本が明久にらしくなり台詞を言い放った。

アイツが褒めると言う事は……何か仕出かしたな。おまけに晴れやかな笑顔になつてゐるし。

「校内放送、聞いてた？」

「ああ。バツチリな」

坂本は笑顔で答える。アイツが明久に向かってあんな笑顔をするのは、明久の不幸を喜んでゐるからだ。

「雄二、須川君がどこにいるか知らない？」

明久は明久で取り敢えず坂本を放っておいて、校内放送を流した須川に恨みを晴らそうと躍起になつてゐる。

「もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」

明久の燃え滾っている決意に対し、坂本は拍子抜けするような返事をする。

この反応からして、あの放送を指示した奴はやはり坂本だったか。

「やれる、僕なら殺れる……！」

「殺るなつての」

明久が須川を殺しそうな雰囲気だったので……。

「明久、確かに須川が放送したが、指示を下したのは坂本だ。そうだろう、坂本？」

「よく分かったな」

「シャアアアアアッ！！」

俺が坂本だと教えて、当の本人は正解だと言った。聞いた明久は何処からか持ち出したのかは知らない包丁を突き出して雄二に襲い掛かる。

「落ち着け、明久」

「離してシュウ！ この外道を刺した後は、頭の形を変えるほど殴らないといけないんだから！！」

「気持ちは分かるが、此処でソイツを殺したら試召戦争がFクラスの敗北になってしまうぞ」

坂本を殺そうとする明久に俺は羽交い絞めをして止めると、ジタバタと暴れている明久。

「あ、船越先生」

「！……！」

明久は忍者の如く俺の羽交い絞めから脱出して、即座に掃除用具入れの中に入ってドアを閉めた。

「……………逃げる事に関しては素早いな」

「さて、馬鹿は放っておいて、そろそろ決着を付けるか」

「そうじゃな。ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、
頃合じやのう」

「……………（コクコク）」

「おっしゃ！ Dクラス代表の首級^{くび}を獲りに行くぞ！」

『おうつ！』

俺の台詞を他所に、雄二達は教室から出て行く。

「……………はあつ……………明久、坂本が言った事は嘘だ。もし船越先生
がいたら、俺は即座に逃げているぞ」

「…………………………」

明久が恐る恐る掃除用具入れの扉をそつと開けて覗き……………。

「逃がすか。雄二いつ！」

教室には俺と姫路だけしかいなかったと分かった途端に、明久は掃除用具入れの扉を蹴り開けて、廊下に飛び出したのであった。

「……………全く……………明久を平然と陥れる坂本に呆れるが、すぐに騙される明久も呆れるな」

「あの、天城君。私達も早く坂本君達に合流しないと」

明久と坂本の行動に物凄く呆れる俺は深い溜息を付くと、姫路が早く行こうと言う。

「いや、姫路は急ぐ必要は無い。平賀にさりげなく近づいて挑めばいい」

「さりげなく……………ですか？でも私はFクラスですから……………」

「アイツは姫路がFクラスの生徒だと言う事をまだ知らない。だから今は姫路がDクラスに接近しても、警戒されずに素通りされるかな」

「そうなんですか……………」

「取り敢えず教室を出よう。それにDクラスの試召戦争が終わったら、明久には後で説教しないといけないから……………」

「え？ どうして吉井君を説教するんですか？」

俺と一緒に教室を出る姫路は、明久が説教をされる事に疑問を抱く。

「アイツは試召戦争中に、窓ガラス破損に消火器の無断使用、スプ

リンクラーを勝手に作動させたんだ」

「そ…そんな事をやったんですか」

明久の罪状を言つと、姫路は汗を掻きながら苦笑する。

「まあ今は平賀に近づいて、さっさと終わらせるとしよう。行くぞ、姫路」

「は…はいっ！」

俺と姫路は下校している生徒に紛れて平賀のいる所へと向かった。

「さてと、俺はここまでだ。後は姫路だけで平賀に近づいてくれ」

「わ…分かりました」

「それじゃあ後で」

下校中の生徒に紛れてギリギリまでDクラス本隊の近づいた俺は、姫路に後を任せて平賀率いる本隊へと向かう。

「ちくしょう！ あと一歩でDクラスを僕の手で落とせるのに！」

「何を言つかと思えば、彼氏くん。いくら防御が薄く見えても、流石にFクラスの人間が近づいたら近衛部隊が来るに決まっているだろう？ ま、近衛部隊がいなくてもお前じゃ無理だろうけど……頼みの天城がいたら話は別だが」

「くっ！ まるで僕がシュウの腰巾着みたいな言い方だね！」

「事実だろ？ 彼氏くんは天城がいなければザコ同然だ」

明久をザコ扱いねえ。

「天城が何処にいるのかは知らないが、取り敢えずお前を早く潰させてもらっぞ」

と、平賀が本隊に明久を襲うように指示をしようとするが……。

「果たして出来るのかな？」

「え？ …………… なっ！？」

「シュウッ！？」

俺のいきなりの登場に驚いていた。

「^{サモン}試獣召喚」

『Fクラス	天城修哉	現代国語	310点
VS			
Dクラス	本隊	現代国語	121点
Dクラス	本隊	現代国語	123点
Dクラス	本隊	現代国語	118点
Dクラス	本隊	現代国語	112点
Dクラス	本隊	現代国語	116点

「し…しまった！ 天城の得意科目だ！」

「今更気付いても遅いよ」

シャキンッ！ ザシュッ！ ザシュッ！ ザシュッ！ ザシュッ！
ザシュッ！

俺の召喚獣がDクラス本隊の召喚獣に神速の居合を使って一瞬で蹴散らした。

『Dクラス 本隊5名 現代国語 0点』

「助かったよ、シュウ！」

「残りはお前だけだぞ、平賀」

「くっ！ 吉井の近くに天城がいなかった事に油断した！」

予想外な展開になったと思っているであろう平賀は、非常に苦い顔をしている。

「それと平賀、お前に一つ言っておく。明久をザコ扱いしているが、もしお前が1対1で明久とやったら負けていると思うぞ」

「な…何だと!？」

俺の意外な台詞に平賀は驚愕した。

「しゅ…シュウ、それって……」

「明久、それについては後回しだ。取り敢えずDクラス代表の止めは切り札に任せるとしよう」

「そ…そうだね。姫路さん、よろしくね」

「は？」

『何を言ってるんだ、この馬鹿は?』と言った顔になっている平賀。

「あ、あの……」

そんな平賀の後ろから、申し訳無さそうに姫路が平賀の肩を叩く。

「え？ あ、姫路さん。どうしたの？ Aクラスはこの廊下を通らなかったと思うけど」

未だに現状を把握出来ていない平賀に俺は内心苦笑いをしていた。平賀の戸惑いは無理もない。まさか姫路がFクラスの生徒だなんて誰もが思わないだろう。俺が平賀の立場だったら、間違いなく平賀と同様に戸惑っているだろう。

「いえ、そうじゃなくて……」

「おい姫路、早く決着を付けてくれ」

もじもじと言い辛そうに体を小さくする姫路に、俺が早く終わらせるように催促する。

「は……はい！ Fクラスの姫路瑞希です。えっと、よろしくお願いします」

「あ、こちらこそ」

「その…… Dクラス平賀君に現代国語を申し込みます」

「……はあ、どうも」

「あの、えっと……さ、試験^{サモン}召喚です」

『Fクラス 姫路瑞希 現代国語 339点』

VS

「え？ あ、あれ？」

平賀は未だに戸惑いながらも召喚獣を出して、姫路の召喚獣と対する。おい平賀、いつまでも惚けていないで戦闘体勢を取った方が良いと思うが？

と言うか姫路の召喚獣は凄く強そうだな。騎士の鎧を着て、背丈以上に大きな両手剣を持っているんだから。

「ご、ごめんなさいっ」

そして姫路の召喚獣がアツサリと剣を振り抜くと、平賀の召喚獣が一瞬で倒されてしまった。

これによってDクラスの敗北が決まり、Fクラスが勝利したのであった。

第六問（前書き）

色々あつて遅れました。

普段書いているやつのは3倍近く書いているんで、時間が掛かります。

第六問

バカテスト 社会

問 以下の問いに答えなさい

『三権分立と呼ばれる国の権力を3つ答えよ』

姫路瑞希の答え

『立法権・司法権・行政権』

天城修哉の答え

『立法・司法・行政』

教師のコメント

2人とも正解です。

立法権は法律を作る権限。司法権は法律に基づいて裁判を行う権限。
行政権は法律に基づいて政治を行う権限。
以上3つの権限があります。

吉井明久の答え

『立法・司法………憲法か漢方のどっちか』

教師のコメント

最初の2つは合っていますが、最後は両方とも間違えています。

土屋康太の答え

『覗き権・盗撮権・女子のパンチラ権』

教師のコメント

もうそれは国として成り立たず、無法地帯となってしまうね。

Dクラス代表 平賀源二 ひらがげんじ 討死 うちじに

『うおおー！！！』

その知らせを聞いたFクラスの勝鬨かちどきとDクラスの悲鳴が混ざり、耳が響く様な大音響が校舎内に駆け巡る。

本当なら少し静かにしろと言いたい俺であるが、折角の勝利に水を差す真似はしない。

「凄えよ！ 本当にDクラスに勝てるなんて！」

「これで畳や卓袱台ともおさらばだな！」

「ああ。アレはDクラスの物になるからな」

「坂本雄二サマサマだな！」

「やっぱりアイツは凄い奴だったんだな！」

「坂本万歳！」

「姫路さん愛してます！」

代表である坂本を褒める声がいたる所から聞こえる………と言うか最後の奴、お前はドサクサに紛れて姫路に告白をしているが、当の本人は全く聞いていないぞ。

それとは逆にDクラスはガツクリとうな垂れて悲壮感を漂わせている。あの様子から見てFクラスに負けた事が相当悔しいんだろうな。

「あー、まあ。なんだ。そう手放して褒められると、なんつーか」

坂本にとってまだ通過点に過ぎないだろうが、それでも周りから褒められている雄二は満更でもない表情なりながらも明後日の方向を見る。

「坂本！ 握手してくれ！」

「俺も！」

もう坂本は英雄扱いだ。Fクラス生徒達が坂本と握手するのを見て、相当あの教室に不満を抱いているのだろう。

「雄二！」

「ん？ 明久か」

今度は明久が坂本に近づいて……。

「僕も雄二と握手を！」

手を突き出した……握っている包丁を坂本に向けながら。

「ぬおおっ！」

ガシッ

言っまでも無く坂本は明久の手首を抑えて阻止する。

「雄二……！ どうして握手なのに手首を押さえるのかな……！」

「押さえるに……決まっているだろうが……！ フンッ！」

「ぐあっ！」

坂本が明久の手首を捻ると、明久は悲鳴を上げて握りこんでいた包丁を取り落とす。

良かったよ明久、お前が坂本を殺していたら警察に連絡しなきゃいけない所だったから。

「……………」

「……………」

明久と坂本は無言になっていたが……。

「雄二、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいね」

「……………」

「明久、その台詞は無理があるぞ」

急に明久が笑顔で取り繕うように言っても坂本は無言だ。

「僕、仲間との達成感がこんなにもいいものだなんて、今まで知らな間接が折れるように痛いっ！」

「今、何をしようとした」

「も、もちろん。喜びを分かち合うための握手を手首がもげるほどに痛いっ！」

「……………はあっ」

更に明久の手首を捻る坂本に俺は溜息を吐く。

「おい。誰かペンチを持ってきてくれ！」

「す、ストップ！ 僕が悪かった！」

「……………チッ！」

ペンチを使うのは何かを曲げる気なのか？

「おい坂本、ペンを何に使ったもりなんだ？」

「……………ブツブツ……………」

「聞ってるのか？」

「……………生爪……………」

……………明久もやる事が非道だが、坂本も充分に非道だった。

「ってか明久、お前の考えで坂本を殺すのは到底無理だぞ」

「うつ……………」

俺の突っ込みに明久はしな垂れる。

「おい天城、このバカには後で説教しとけよ。俺を殺そうとしたんだからな」

「元はと言えば、お前があんな下らん校内放送を流す指示を出したからだろうが」

「さて、何の事やら？」

「お前な……………」

「けど天城にとっては好都合じゃねえのか？ もう船越女史に狙われる心配はないだろうが。寧ろ俺に感謝して欲しい位だな」

「……………」

どうやらこの外道は明久を陥れただけでなく、俺に貸しを作っておいた方が良くも思えないと思つてやったのだろつ。

つてか大きなお世話だ。坂本にそんな事されなくても、俺は船越先生を迎撃出来る許可を貰つていふと言つのに。

とは言へ、坂本に貸しを作られたのは事実だ。ここは大人しくしておこつ。

「取り敢えず明久、お前は後で説教だからな」

「ええ！？ 何で！？」

「お前な……窓ガラス破損に消火器の無断使用、そしてスプリングラーの作動。これだけの事をやっておいて、ただで済むと思つていいのか？」

「え……あ……でも、それは作戦中の出来事だから……先生達も許してくれる筈……」

「西村先生が許すと思うか？ 俺だったら許さないぞ」

「……………」

俺の言葉に明久はうな垂れるしかなかった。

と、俺と明久がこんなやり取りをしていると……。

「まさか天城だけでなく姫路さんまでFクラスだなんて……信じら

れん」

背後から平賀の声が聞こえた。

俺が振り向くと、そこにはよたよたと歩み寄る平賀。余りに予想外な事が起き過ぎてショックを受けているんだろう。

「あ、その、さっきはすいません……」

そんな平賀に姫路は駆け寄りながら謝っている。

「いや、謝る事はない。全てはFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ。天城だけしか警戒していなかったからな」

姫路の謝罪に平賀は必要無いと言う。まあ確かに騙し討ちみたいだったけど、姫路が謝罪する必要は全く無い。

戦争にはイレギュラーが付き物だと付け加える平賀に、俺は代表としての責任感がちゃんとあるなと思った。

平賀は以前から負けた時には潔く認めて、それをバネに強くなるタイプだ。またDクラスと試召戦争をやる事になったら、何重の策を考えて挑むだろう。

「ルールに則^{のっと}ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日でいいか？」

坂本に問う平賀に俺は少々気の毒だと思った。

平賀は再び試召戦争を挑む権利が回復するまでの3ヶ月間を、俺達

が使っていたFクラスの教室で過ごさなければいけない。それと同時にクラスメイトからも恨まれるのだ。

この試召戦争は勝てば代表は英雄扱いされて褒め称えられるが、負ければ戦犯扱いされて蔑まれて後ろ指をさされる。

「もちろん明日で良いよね、雄二？」

「まさか、いくらお前でも今日中に済ませろだなんて酷な事は言わないよな？」

明久も俺と同じく平賀を気の毒に思っており、明日で良いかと雄二に聞く。

もし坂本がすぐにやれと言ったら……。

「いや、その必要は無い」

すぐに撤回させ……何だと？

「え？　なんで？」

「坂本、それはどう言う意味だ？」

「Dクラスを奪う気はないからだ」

坂本の予想外な返答に明久と俺は更に疑問を抱く。

「雄二、それはどういうこと？　折角普通の設備を手に入れる事が出来たのに」

「忘れたのか？ 俺達の目標はあくまでもAクラスの筈だろう？」

「……………成程な」

坂本の言葉に俺は納得が行った。

あくまでDクラスは通過点に過ぎないから、設備交換の変わりに何か別の要求をするだろうと俺は予想する。

「でもそれなら、何で標的をAクラスにしないのさ。おかしいじゃないか」

明久は全然理解していないみたいだ。つてか明久、お前は俺が昼休みで言った時の事を忘れたのか？

「お前な……天城が言った事を完全に忘れているみたいだな。と言うか少しは自分で考えろ。そんなんだから、お前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称を付けられるんだ」

「なっ！ そんなに半端にリアルな嘘を吐かないでよ！」

「おつとすまない。近所の小学生だったか」

「おい坂本、いくらなんでもそれは無いだろうが」

俺が坂本に突っ込みを入れていたが……。

「…………人違いです」

「ちょっと待て、明久……お前……」

「まさか……本当に言われた事があるのか……？」

明久の返答に俺と坂本は信じられないような目でみると、明久は視線に耐えられなかったのか明後日の方向を向いた。

おいおい……お前は本当に小学生から『馬鹿なお兄ちゃん』って呼ばれてるのかよ。年下にそんな事を言われるって……哀れな。

そして坂本は悲壮感を漂わせる空気から脱したかったのが、平賀に話しかける。

「と、とにかくだな。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない」

「それは俺達にはありがたいが……。それでいいのか？」

「もちろん、条件がある」

やはりな。坂本がこのまま解散なんて言う訳が無い。

平賀も俺と同様に気付いている。

「一応聞かせてもらおうか」

「なに。そんなに大した事じゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

坂本が指したのはDクラスの窓の外にあるエアコンの室外機だ。

だがアレは本来Dクラスの物ではない。Dクラスの設備は普通の高校レベルの設備だから、あんな高価なエアコンは無い。

それが置いてあるのは、スペースの関係で此処を間借りしている隣のクラス。

「Bクラスの室外機か」

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあると思うが、そう悪い取引じゃないだろう？」

待て坂本。お前はBクラスに勝つ為の手段として室外機を壊すつもりか？

「あ……ま……まあ確かに……悪い取引じゃ無いんだが………その……」

「何か不満か？」

「いや……それはこちらとしては願っても無い提案だが………ってか坂本、それは天城に前もって説明したのか？」

「……………あ」

坂本が思い出したかのように恐る恐る俺を見ると………。

ガシッ！！

「さ……か……も……と……お……？ お前は何ふざけた事を考えてんだ？」

「イダダダダダ！！！！ ま、待て天城！！ これにはちゃんと理由があるから落ち着いて聞け！！」

俺が笑みを浮かべながら坂本の頭を思いっきり掴むと、痛そうな顔をしながらも俺に弁明を申し立てる坂本であつた。

「理由ねえ。いくら必要な準備とは言え、壊すのはやり過ぎじゃあないのかなあ？」

「イデデデデデ！！！！ つ…次のBクラス戦の作戦に必要なんだよ！ だから離してくれええ！！！！」

「そんな短い理由が通ると思っているのか？」

「グアアアアアア~~~~！！！！ 握力が更に上がってねえか~~~~！！？」

握力を上げる俺に坂本は更に痛そうな顔になっている。

俺が坂本の頭にアイアンクローをやっている事に平賀だけでなく、他のDクラス生徒達やFクラスの面々も呆然としていた。

「ちょ…ちよつとシュウ！ そこまでにしようよ！ 試召戦争が終わるまでは手を出さないってシュウが言い出したんでしょ！？」

「…………… 明久、何でそつちは覚えてて、屋上で話した事を忘れているんだ？」

明久の微妙な記憶力に俺は微妙な顔をしながらも、アイアンクロー

は続行中。

「と…取り敢えず手を離そうよ。シュウが雄二にアイアンクローをしているのを見ていると、僕も頭が痛くなりそうだから」

坂本を擁護しているような感じであるが、以前に俺のアイアンクローを喰らった明久としては見ていたくないのだろう。

取り敢えず明久に言われたとおり掴んでいた坂本の頭を離すと、坂本はズキズキと痛みが襲っているのか頭を抱えている。

「それにさ、雄二だって何の意味もなく機材を壊す訳じゃないんだから」

「試召戦争だからと言って学校の物を壊すのはどうかと思うんだが……」

「それ位は大目に見ようよ。それにさ……」

明久が俺に近づいて小言で話しかける。

「確かにシュウの言うとおり許される行為じゃないけど、そうするだけで平賀君はクラスメイトから恨まれずに済むんだからさ」

「……………」

確かに明久の言う事には一理ある。設備交換はせず室外機を壊すだけで平賀は周りから攻められる事は無い。

「だからさ、ここは平賀君を助けると思って……………」

「……………はあっ」

明久の言葉に俺は溜息を吐きながら……。

「……………坂本、今回だけだぞ」

「アタタタタ……た…助かる」

「あくまで一度きりだからな。それは覚えて置けよ」

未だに頭を抱えている坂本に釘を刺しながら承諾する事にした。

「と…と言う訳で平賀、タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行ってもいいぞ」

「わ…分かった。お前等がAクラスに勝てるよう願っているよ」

何かしどろもどろな会話だが敢えて気にしない事にする。

「無理するなよ。勝てっこないと思っているだろ？」

「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるわけがない。ま、社交辞令だ」

じゃあ、と手を上げて去ろうとする平賀に……。

「待て平賀、ちょっと聞きたい事があるんだが」

「何だ？」

俺はある事を聞こうと引き止めた。

「午前中に放送で呼ばれた件だが……」

「放送……ああ、アレか」

平賀が午前中に担任から放送で呼びされた事を思い出す。

「お前と一緒に呼ばれた奴はどうしたんだ？ 今回の試召戦争で見かけなかったが」

「アイツは担任の先生から叱られた後、西村先生が罰として今回の試召戦争は参加しないようにって言われて、戦争が始まって早々に補習をされているよ」

「そうか……通りでいなかったわけだ」

ソイツはさぞかし後悔していただろうな。

「あの時はすまなかった。俺がちゃんと言ってれば、あんな事にはならず……」

「気にするな。全く反省していない奴には丁度良いお仕置きだと思ってるから」

「そう言ってくれると助かる。じゃあ俺はこれで」

「ああ。引き止めて悪かったな」

平賀は今度こそ去って行つた。

「さて、皆！ 今日のご苦勞だった！ 明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆつくり休んでくれ！ 解散！」

坂本の号令により、雑談を交えながら自分のクラスへと向かうFクラス生徒達。

「雄二、僕らも帰ろうか」

「そうだな」

明久が坂本を連れて教室に戻ろうとしているが……。

「待て明久、何か忘れている事は無いか？」

「え？」

俺が笑みを浮かべながら立ち塞がった。

「忘れてるなら教えてやる。お前はその後、俺と一緒に職員室に行つて先生達に器物破損の事を謝り、俺の説教が待っているんだぞ」

「……………」

俺の台詞に明久は大量の汗を掻きながら無言となっている。

「さあ行こうか」

「……………ね…ねえシュウ、それって明日にしてくれないかな？ 僕は今、物凄く疲れてて……………」

「そんな言い訳が通じると思うか？ それに明日にした所で、お前はすぐに逃げるからな。そうはさせないぞ」

「……………」

「さてと、俺は帰らせてもらっぞ」

「ちょ…ちょっと雄二！ 僕を置いていかないでよ！！」

帰ろうとする坂本に明久は引き止めようとするが……………。

「ま、自業自得だと思って天城に説教される事だな。それにお前は俺を殺そうとしてたし……………天城、遠慮なくやってくれ」

「お前に言われなくてもそのつもりだ。と言うか坂本の事について説教をする気はない。明久が坂本を殺す原因を作ったのはお前自身だからな。だから俺はお前を擁護する気は一切無い」

「……………そうかよ」

納得が行かない顔をしている坂本であったが、下手に突つつくと巻き添えに遭いそうだと思って引き下がった。

と、そんな時……………。

「あ、あの、坂本君っ」

「ん？」

坂本が教室に向かおうとすると姫路が呼び止めた。

「お、姫路。どうした？」

「実は、坂本君に聞きたいことがあるんです」

「おう、わかった」

坂本と姫路は俺と明久から離れて話を始める。

「では職員室に行くとするか、明久」

「……………」

「会話が気になるんだろうが、お前は俺と一緒に職員室へ行くぞ」

2人が会話している所を見ている明久に、俺は有無を言わず明久の腕を引っ張って職員室へ向かったのであった。

その途中で……。

「……………悪魔に負けるか……………！ 僕の正義の心は……………」

変な事を言っている明久であつたが、取り敢えず無視する事にした。

「やれやれ、俺が説教をする必要が無くなったな」

「うっ……酷い目に遭ったよ」

「まあソレは明久の自業自得なんだが」

俺は明久を連れて職員室に行き、西村先生に明久が壊した物について説明しながら頭を下げて謝ったまでは良かった。けど西村先生がいきなり『吉井っ！ 天城が謝っているのに、事の発端である貴様が謝らんとは何事かあ！ 生徒指導室に来い！』と言って明久を指導室に連行されてしまったのだ。

抵抗していた明久は『助けてシュウ！』と懇願していたのだが、西村先生が有無を言わせず連れて行ってしまったので、どうする事も出来なかった。

そんな訳で取り残された俺は指導室前にいて、西村先生の説教が終わるまで明久を待って15分程経つと、明久が指導室から出て、今は一緒に帰っている途中だ。

「取り敢えず俺からも言っておこう。明久、作戦だからと言って勝手に物を壊すんじゃないぞ」

「わ…分かったよ」

明久は反省しながら頷いているが、また同じ事をするだろうと思った。何しろ明久は俺に説教をされて数日経った後に、また同じ事をしては俺に怒られると言う事が何度もあったからだ………とは言え同じ事をするのは何か理由があるんだろうが。

ソレを問い質した所で明久は、いつもはぐらかしながら自分が悪いと言っている。誰かの為に自ら汚名を被っているのは分かるんだが、俺としては正直に言っただけ。まあ明久は俺に迷惑を掛けない為に黙秘しているんだろう。俺からして見れば何を今更と言いたいが。

「あのさあシュウ、ちょっと聞きたい事があるんだけど」

「何だ？」

考え事を止めた俺は明久の方に耳を向ける。

「試召戦争中にシュウが、平賀君に“僕が平賀君と1対1でやったら僕が勝ってる”って言ったよね」

「ああ、言ったな」

「それって過大評価してないかな？ 僕みたいな点数の低いバカがDクラスの代表に勝てるとは思えないんだけど………」

「……………相変わらずお前は自分を卑下しているな。少しは自信を持ったらどうだ？」

「え？」

「まあ明久が言ったとおり点数では平賀に勝てないだろう。だがな明久、試召戦争で点数が低いからと言って相手には絶対に勝てない訳では無いんだぞ」

「？」

明久は俺の言ってる事が分かっていないみたいだ。

「つまり点数が低くても勝てる方法があると言ってるんだ」

「勝てるって……」

「……少し言い換えるか。格ゲーとかで攻撃力が高くても操作が扱いづらいキャラ、逆に攻撃力が低くても扱いやすいキャラがいるとする。お前だったらどっちを選ぶ？」

「そりゃあ、僕としては操作が扱いやすいキャラを使って地道に減らして……ってシユウ、それって……」

「漸く気付いたか」

やはりゲームに例えるとすぐに気付くみたいだ。

「召喚獣の扱いに慣れている僕でも充分に勝機があるってこと？」

「そう言う事だ。だから少しは自信を持て。2年の中でお前が一番のアドバンテージを持っているんだから」

とは言っても、点数差が余りにもあり過ぎたら勝てないが。

「そつか……僕が一番かぁ……何か自信が出てきたなあ。ありがとう、シュウ」

「一番だからと言って勉強は怠るなよ？」

「……………も……勿論だよ」

水を差されたかのような感じになっている明久であった。

「あ、それともう一つ」

「ん？」

明久はいきなり元気になって更に質問をしてくる。

「雄二の考えなんだけどさ。Dクラスとの勝負って本当に必要だったのかな？ 別にエアコンくらいなら他の方法でも壊せたと思うのに」

「ああ、それか。大抵の予想は付いてる」

「どう言う事？ シュウの言った事は思い出したけど、召喚獣の操作に慣れる為なのは分かったけど……他にもあるの？」

「あくまで俺の予想に過ぎないが……アイツは多分、他のクラスにブレッシャーを与えようとか、Fクラス全員に自信をつけて士気を上げさせようとも考えたんだろう」

「ふーん。それじゃ、Dクラスの設備を手に入れなかったのは？」

「お前や坂本の目的はAクラスなんだろう？ Dクラスの設備を手に入れる事で、一部の生徒が満足して試召戦争を反対するかもしれないと思っただろう。だからそうさせない為に、不満によるモチベーションを維持しようと交換しなかったんじゃないかと思う」

「成程。確かに雄二が考えそうだね」

予想に過ぎない俺の回答に、明久は納得するのであった。

「でもさ、僕達はホントにAクラスに勝てるのかな？」

「さあな。坂本の事だから勝つ為の策を考えているんだろう。でなきゃAクラスに勝てるとは言わないし」

「……………そうだね」

坂本は普段から明久を陥れる外道な奴だが、今回の試召戦争で人を纏める統率力と指揮能力、そして軍師としての才がある事が分かったから期待は出来るだろう……………今の所は。

「お前も頑張る事だな、明久。Aクラスに勝ちたいと思うなら、明日の補給テストでしっかりと点数を稼ぐ事だな」

「……………ぐう」

俺の台詞に明久は苦い顔をしているが敢えて気にしないようにする。

「前にも言ったが、ゲームばかりしてないで、少しは勉強しておけ」

「教科書くらいは読んで……ん？」

「どうかしたか？」

明久がいきなり鞆を見る事に俺は聞き……。

「あ！ 教科書、卓袱台の下に置いたままだった！」

「……………はあつ……………勉強しろと言った矢先にこれか。先が思いやられる」

溜息を吐きながら呟くのであった。

「と言うか明久、こんなに歩いてて鞆が軽かった事に何の違和感も感じなかったのか？」

「うう……………。んじゃ、先に帰ってていいよ」

「先に帰っててと言っても、俺の家はもう目の前なんだがな」

俺が指を差すと、そこには2階建ての洋風一軒家がある。

「……………そうだね。じゃあシュウ、僕はまた学校に戻るから。また明日ね」

「ああ、また明日な」

明久は走りながら学校へと戻ると、俺は家に入るのであった。

第七問（前書き）

今回は時間があつたので早めに出しました。

第七問

翌朝、俺は学校に着いて早々、補給テストをやる前の確認で数学の教科書を見ている。

「えっと、この計算式の因数分解は……」

「何だ天城、随分と梃子摺っているな」

「……………俺は数学が苦手なんだ」

俺が計算問題を解いている際に、坂本が俺の様子を窺いながら話しかけてきた。

「苦手だと？ 意外だな。お前にも苦手科目があったとは」

「俺だって苦手科目くらいはある」

「ってかそんな計算問題で躓^{つまず}くか？ その式は一見難しそうに見えるが、コツさえ掴めば簡単に解けるぞ」

「……………数学の問題を解いていると……思い出すんだ」

「何をだ？」

坂本は俺の発言に不可解そうな顔をして聞くと……。

「恐ろしい顔をした船越先生に交際を迫られるのを……………」

「……………スマン、俺が悪かった」

すぐに後悔して俺に謝罪するのであった。

「あの時ほどトラウマになりかけた事は無かったな」

「……………大丈夫なのか？ 今日の一時間目にある数学テストは船越先生が試験監督だぞ」

「問題ない。船越先生が、もし再び俺に交際を迫ろうとしたら迎撃する。他の先生達からは許可を貰っているし」

「……………まあそうだな。充分正当防衛になるだろう」

坂本は普段から教師に信頼されている俺だからこそ貰えた許可なのだろうと考えていそうだ。

と、そんな時…………。

ガラッ

「おはよー」

明久が教室に入ってきた。

「おう明久。時間ギリギリだな」

「テストぐらいは早めに来い」

「ん、おはよう雄二、シュウ」

席に座っている俺と隣にいる坂本を見た明久は挨拶をする。

「ねえ雄二、皆には何も言われなかったの？」

「ん？ 何がだ？」

「Dクラスの設備の事」

明久は早々に雄二に設備交換の事を聞くと、坂本は問題無さそうな顔をする。

「ああ。皆にもキチンと説明しておいたからな。問題無い」

「昨日は坂本を英雄扱いしてたからな。素直に聞いてたぞ」

「ふーん」

感心していそうな顔をしている明久を見て、昨日に俺と一緒に帰った時の話を思い出しているんだろう。

「それよりお前はいいのか？」

「何が？」

「昨日の後始末だ」

後始末？ …… ああ、アレか。そう言えば島田の姿が見当たらない

いな。まだ来てないのか？

俺が教室の周りを見ているがまだ島田の姿がない事に気付く。

「うん。いくら僕でも、生爪を剥がされると分かっているながら行動するなんてあり得ないよ」

明久は見当違いな事を言ってた。

と言うか明久、本当に昨日の事を忘れているのか？

「いや、俺の始末じゃなくて」

「一体何が言いたい……」

と、明久が言っている最中に……。

「吉井っ！」

「うぶあつー！」

島田が現れると同時に拳が明久の顔にヒットした。顔を殴られた明久は、その拍子に倒れる。

「し、島田さん、おはよう……」

「おはようじゃないわよっ！」

挨拶をする明久を見て、俺は昨日の事は完全に忘れていると分かった。

それと島田、お前が殴った所為で明久の鼻から鼻血が出ているぞ。どれだけお前の攻撃力が高いんだ？

「アンタ、昨日はウチを見捨てただけじゃ飽き足らず、消火器の悪戯と窓を割った件の犯人に仕立て上げたわね……！」

そう言えば明久は確かに島田の所為にしていたな。明久が西村先生に説教されてたからすっかり忘れてた。

「お蔭で彼女にしたくない女子ランキングが上がっちゃったじゃない！！」

まだ上がる余地があつたんだな。

島田は元から彼女にしたくないランキング上位者だから、昨日の件を差し引いた所で大して変わらないが。と言うか島田、そんな不名誉なランキングが上がっているのは、お前のすぐ手が出る悪い癖があるからだぞ。下げたかったら、そこを直す事だな。

「——と、本来は掴みかかっているんだけど」

おいおい、掴み掛かっている前から既に殴っているぞ。

「アンタにはもう充分罰が与えられているようだし、許してあげる」

「うん。さつきから鼻血が止まらないんだ」

「いや、そうじゃなくてね」

「ん？ それじゃ何？」

「一時間目の数学のテストだけど」

島田が心から楽しそうな顔をして告げる。

「監督の先生、船越先生だつて」

明久は聞いた瞬間に、扉を開けて廊下を疾駆したのであつた。

「さてと、吉井のお仕置きは済んだから……」

島田が俺の方に顔を向けると……。

「次はアンタよ!!」

「おっと」

即座に俺の顔を殴ろうとするが、俺は問題無く避けて距離を取った。ついでに坂本は島田が俺の顔を見た時に、巻き添えに遭いそうだと思つて避難している。

「何の真似だ、島田」

「アンタ！ よくもウチを殴つたわね!! 絶対に許さないんだから!!」

島田は昨日の試召戦争で俺が気絶させた事を言っているのだらう。

「何が許さないだ。島田が明久を殺そうと危険な事を考えていたら、俺は止めただけだ。と言うかそんな事をしたら俺はお前を警察に引き渡しているがな」

「そんな言い訳が通じると思ってるの！？ アンタは女の子であるウチを殴ったのよ！！」

俺が正論を言っても島田は聞く耳を持たなかった。寧ろ自分を被害者扱いしているから厚かましいにも程がある。

「お前な……………以前から散々明久を殴っておきながら、一回やられたからって被害者扱いするなよ」

「うるさい！ 取り敢えずアンタはウチに殴られなさい！！ それだけで勘弁してやるから！！」

「無茶苦茶な暴論だな」

島田は再び殴ろうとするが……。

ガシッ！！

俺はすぐに島田の両手首を掴んで殴るのを阻止する。

「このっ！ 離しなさいよ！！」

「殴られるのが分かってて、放すバカが何処にいる」

俺に両手首を握られている島田は逃れようと抵抗するが、俺は今の状態を維持するために力を込めて握っている。

「島田、お前がこれ以上続けるつもりなら、俺は実力行使で黙らせるぞ。それが嫌なら拳を引っ込めろ」

「なっ！ アンタ、またウチを殴る気なの！？」

「……………人を殴ろうとしておいて、勝手な事をほざくな」

「……………」

俺が目を細めながら低い声で言うと、島田は急に怯えるかのような顔になる。

「もう一度言う、さっさと拳を引っ込めろ。俺は明久と違って、向かって来る相手には容赦しない。たとえ相手が女だとしてもな」

「……………」

「それとも俺に説教されたいか？」

「……………わ…分かったわよ！ 止めればいいんでしょ…！」

本気でやると分かった島田は拳を解いて力を抜くと、俺は掴んでいた島田の両手首を離す。

「けど天城、女の子相手でも容赦しないって正気？ どうかしてるわよ」

「女が男を平気で殴っておいて許されるとでも思ってるのか？ 俺からして見れば、お前の行動がどうかしてる。そんな事をしているから明久に……」

「天城、そこまでにしとけ」

俺が言っている最中に坂本が割って入り……。

「そうじゃぞ修哉。ここは落ち着くのじゃ」

何時の間にか教室に来ていた秀吉も参加した……何故か秀吉の髪型がポニーテールだったのが敢えて気にしなかった。

「2人とも邪魔しないでくれ。この際だから島田にハッキリと……」

「悪いがそれは後回しにして欲しい。俺達Fクラスは補給テストが終わり次第、Bクラスと試召戦争をするんだ。もし此処でいざこざが起こったのをBクラスの連中に知られたら面倒な事になる」

「……………」

坂本の言葉に俺は黙った。

確かに此処で島田と言い争えばFクラスの士気は下がるだろうし、Bクラスに知られたら付け入る隙を与えてしまうので……。

「……………分かった」

俺は仕方なく止めるにした。

「助かる。島田、お前も穏便に頼むぞ」

「ふん！ ソイツがウチを殴るからいけないのよ！」

島田は颯爽と自分の席に座り数学の教科書を出して内容を確認する。

「やれやれ…………天城にしては意外だったな。まさかお前があんな事を言い出すとは…………女相手でも容赦しないって」

「島田以外の女子が聞いたら怒ると思うのじゃ」

「じゃあ2人は俺に“島田に大人しく殴られろ”とでも言うのか？」

俺の質問に坂本と秀吉は何とも言えなさそうな顔をする。

「いや、そこまでは言わないが」

「いくらお主が教師達に信頼されておるとは言え、女子を殴ったら問題になるのじゃ」

「ちゃんと理由を話せば先生達だって理解してくれる。それに女だからって理不尽な事をしても許されると言う、下らん考えを持っている奴がどうかしてる」

「……………」

「って、今はそんな事を言ってる場合じゃないな。苦手な数学の確認をするか」

俺はそう言つと、すぐに席に座って再び数学の教科書を見るのであ

った。

「ふうっ……少し疲れたな」

午前中の補給テストは取り敢えず四教科を終えて昼休みに入った。

「うむ。疲れたのう」

俺の隣にいる秀吉も俺と同調みたいで疲れたと言う。

ってか秀吉、朝も思ってたんだが何でお前は髪型をポニーテールにしてるんだ？ 男のお前がそんな髪型をすると凄く違和感を感じるぞ。

と、俺がそう思いながら明久の方に近寄ると……。

「うあー……づがれだー」

明久は全て出し切ったのような声を出しながら机に突っ伏していた。

「大変だったな、明久。一時間目が特に……」

俺がそう言つと一時間目の光景を思い出す。

あの時はテストが始まる前に船越先生が明久に迫って交際云々の話に突入したのだ。明久は船越先生に必死の説得（？）をして、明久の家の近所のお兄さん（39歳ノ独身……お兄さんじゃない気がするが）を紹介した。昨日の呼び出しはその人を紹介する為だったと言ふ事にして。

明久に迫っている最中に船越先生が、時折俺を見ていたので迎撃出来る準備を構えていた。そんな俺を見た船越先生は諦めたかのように明久の方をじつと見るようになっていたが、それでも俺は一時間目のテストが終わるまで終始気を抜かずに構えていた。隣にいた秀吉は苦笑していたが。

そんな事があつて、今の明久は体力と精神の両方がかなり磨り減っているのだ。

「まあこれでもう船越先生に狙われずに済むから安心だな、明久」

「そ…そうだね」

「災難じゃったのう」

明久が頷くと、秀吉は気の毒そうな顔をして言う……………秀吉の顔を見た明久は何故か見惚れているような顔をしていたが。

おい明久、お前は秀吉の髪型を珍しそうに見ているんだよね？ 自分の好みのタイプだと思つて見てはいないよな？

俺が危険そんな感じで明久を見ていると……。

「……………（コクコク）」

何時の間にか土屋が俺達の近くにいた。

コイツは相変わらず気配を消しながら近づいているな……まあ知っていたが。

「よし！ 昼飯食いに行くぞ！ 今日ラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

「坂本、過食は体に悪いと思うが」

勢い良く立ち上がって疲れを感じないかのように食べようとしている昼飯を言つと、俺はすぐに突っ込む。

「ん？ 吉井達は食堂に行くの？ だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「それじゃ、混ぜてもらおうね」

「……………（コクコク）」

土屋が下心丸出しで頷いていると……。

「って、天城も一緒なの？」

「人の顔を見てすぐに嫌そうな顔をしないで貰いたいんだが」

島田は俺を見て不機嫌そうな顔をしてきた。

どうやら島田は朝の出来事について、まだ根に持っているらしいな。

「言っておくけど、ウチはまだ許していないんだからね」

「許してもらおう為に殴られるのは嫌だぞ」

「何よ。随分と器の小さい男ね」

「そう言う問題じゃないんだがな……」

島田の発言に俺は呆れながら呟く。ってかコイツは仕返しと言う名の暴力を振るわないと気が収まらない性質なのか？ もしそうだとすれば幼稚な奴だ。

そんな俺と島田が不穏当な会話をしていると……。

「じゃ…じゃあ、僕も今日は贅沢にソルトウォーターあたりを……」

「明久、塩水を英語にした所で意味は無いからな」

明久がいきなり仕様も無い事を言い出したので、俺がすぐに島田から視線を外して突っ込みを入れた。

「と言うかお前、相変わらず貧しい食生活を送っているんだな。俺は何度も言った筈だぞ。家族からの仕送りをゲームや漫画に全て費やすとな」

「う……でも、面白い作品が一杯あるからつい……」

「これも何度も言ってるがな、そんな事をし続けると仕送りが来なくなるって。その内、家族の誰かが来て明久の一人暮らしを止めさせようと思うぞ。あくまで俺の予想だがな」

「……………」

俺の発言に明久は何も言い返さなかった。と言うより何か思い当たる節がありそうな感じだが。

「やっぱり天城も知ってたか。明久の食生活を」

「一応な」

坂本の言葉に俺は頷く。

以前に明久の家へ遊びに言った時、大量のゲームや漫画がある代わりに食事が貧相だった事に疑問を抱いたので聞いて見ると、殆どの仕送りを趣味に使っているとアツサリと言ったのだ。

そう言った明久に俺は物凄く呆れ顔になりながらも、何度も忠告をしていたのだが、当の本人は現在に至るまで同じ事を繰り返している。

明久、もう仕送りが来なくなったら俺は知らんからな。

と、俺がそう考えていると……。

「あ、あの。皆さん……………」

姫路が俺達に声を掛けてきた。

「うん？ あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いえ。え、えっと……、お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の……」

昨日の約束？ 何だソレは？

「おお、もしかや弁当かの？」

「何だ？ 弁当を食べる約束でもしてたのか？」

「うむ。昨日、修哉が職員室に行ってる最中に姫路が全員分の弁当を作ると言ったのじゃ」

「ほう。だから姫路は弁当の入った大きいバッグを持っていると言
う訳か」

「は、はいつ。迷惑じゃなかったらどうぞ」

姫路は体の後ろに隠していたバッグを出してくる。

「迷惑なもんか！ ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？ 良かったあゝ」

顔を綻ばせながら安堵する姫路。

「むー……っ。瑞希って、意外と積極的なのね」

姫路とは逆に不機嫌そうな顔をして明久を親の敵のように睨む島田。そう言えば島田は明久に好意を抱いていたんだっただ。だったら弁当を作れば良かっただろうに。

「それでは、折角のご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上に行こうかのう」

「そうだね」

秀吉の提案に明久が賛成する。

まあこんな腐った畳のある所で姫路の作った弁当を食べるのは良くないと思ったんだろう。此处より屋上の気持ち良い空間で感謝を込めながら食べた方が良く俺は思う。

「そうか。それならお前等は先に行っててくれ」

「ん？ 雄二はどこか行くの？」

「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

「あ、それならうちも行く！ 一人じゃ持ちきれないでしょ？」

島田が坂本と一緒に飲み物を買に行こうとする。

大方、明久達の中に俺も混ざって屋上に行くのが嫌だと思って坂本

に付いて行こうと思ったんだろう。自業自得だと言っのに何時まで根に持っているんだか。俺は島田の方が器が小さいと思う。

「悪いな。それじゃ頼む」

「おっけー」

坂本は島田の同行に感謝しながら受け入れている。恐らく坂本も俺と同じ事を考えている筈だ。朝の出来事や先程の俺と島田の会話を見て、連れて言った方が良いと思ったに違いない。

「きちんと俺達の分をとっておけよ。特に明久」

「大丈夫だつてば。あまり遅いと分からないけどね」

「そう遅くはならない筈だ。じゃ、行ってくる」

坂本と島田は財布を持って教室を出て行った。飲み物を買う為に一階の売店に向かったんだろう。

「僕等も行こうか」

「そうですね」

明久はそう言いながら姫路が抱えていたバッグを持って教室を出ようとしたが……。

「スマンが俺はちょっとトイレに行つて来る」

「そう。屋上で待つてるよ」

「ああ」

俺は一足先に教室から出てトイレに向かった。

その時の俺や明久達はまだ気づかなかった。これから屋上で悲劇が起こるという事を。

「さてと、さつさと屋上に行くとするか」

トイレで用を足した俺はすぐに屋上へと向かう。

と、その時……。

「そんなに急いでどうしたの、天城君？」

「ん？」

秀吉の姉である木下優子が俺に話し掛けてきたので足を止めた。

「木下さんじゃないか。何か用か？」

「貴方が走ってたのを見て声を掛けただけよ。それに元学級委員の貴方が廊下を走るのはどうかと思うけど」

「悪い悪い。ちょっと急いでいたからな」

「もしかして職員室に来いって呼ばれたの？」

「違う。つか木下さん、俺がまた問題を起こしたみたいな言い方をしないでくれるかな？」

「冗談よ。気を悪くしたなら謝るわ」

俺がヒクヒクと笑みを浮かべて言うと、木下は誠意の籠っていない謝罪をする。

「そう言えば聞いたわよ。試召戦争で貴方達FクラスがDクラスに勝ったみたいね」

「意外か？」

「それなりにね。天城君だけじゃなく、姫路さんもいたから勝てたんでしょ？」

「……その情報からして、もう姫路がFクラスにいるって事は他のクラスにも知れ渡っているみたいだな」

木下の質問に俺は特に焦る事も無く言い返す。

「ええ。姫路さんがFクラスにいたって事を聞いて、みんな驚いていたわよ」

「そうか」

「でもアタシとしては姫路さんの事より、他の事に疑問を抱いているわ。どうしてFクラスは設備交換をしなかったのかしら？」

「さあ？ 何でだろうね」

「質問を質問で聞き返さないで欲しいんだけど」

疑問を問う木下に俺は聞き流すと、木下は目を細めながら言った。

「悪いけど、その問いに関してはノーコメントだ」

「何だよ。それくらいは教えてくれたって良いじゃない」

「いくら元クラスメイトだからと言って、試召戦争についての情報は教えられるよ。もし木下さんが俺の立場だったら教えてくれるのかな？」

「……………確かにそうね。ごめんなさい、さっきの質問は無かった事にして」

「助かるよ」

流石に友達とは言え、他のクラスの試召戦争に対しての情報を聞き出すのはいけないと思った木下はすぐに謝罪した。

「所で、天城君は何処に行こうとしてたのかしら？」

「屋上に行って昼飯を食べる約束をしているんだ」

「……………そう。急いでいるんなら早く行った方が良いわよ」

「おう、そうする。じゃあな」

何やら木下が少々残念そうな顔をしていたが、俺は気にせず屋上に向かうのであった。

「木下と話して少々遅れてしまったな。明久が全部食ってなければ良いけど」

屋上の入り口前に着いた俺はドアを開けると……………。

「……………は？」

そこには姫路と倒れている土屋に、ジュースをぶち撒けて倒れている坂本、そして何やら怯えながら相談している明久と秀吉がいた。

島田が何故かいなかったが。

何か妙な雰囲気だったので俺は思わず隠れた。

「あつ！ 姫路さん、アレはなんだ！？」

「えっ？ なんですか？」

明久が指した明後日の方向を姫路が見ている最中……。

「何で明久は倒れている坂本に弁当を無理矢理…… っておい」

その隙に明久は姫路が作ったと思われる弁当を坂本に食べせると、坂本は痙攣しているかのように体を震わせて死んだみたいになった顔になっていた。

……… 明久が楽しみにしていた姫路の作った弁当を食べないって事は相当不味いのか？ ってか坂本は死ぬ寸前になっているんだが。

「あ…あれえゝ、シユウじゃない。随分と遅かったねえゝ」

「お…遅かったではないか、修哉よ」

「あ…ああ」

隠れている俺を見つけた明久と秀吉は声を掛けると、俺は近づいて明久達の所に近寄って胡坐を掻く。

「どうしたんですか、天城君。来るのが遅かったみたいですけど」

「……ちよつと友達に会つてな」

「そうですか。もう少し早く来てたらお弁当を食べれたんですけど」

「そ…それはすまなかつたな」

何故だろう。姫路がお弁当と言つた瞬間に危険なオーラが感じるのだが。

（おい二人とも、大体の予想は付いているんだが、一体何があつた？）

（う…うん。ムツツリー二が姫路さんのお弁当を食べてすぐ倒れちゃつて）

（その後は雄二も食べた瞬間に倒れてしまったのじゃ）

（姫路さんの作つたお弁当が凄く危険だと判断した僕等は、弁当を全て雄二に食べさせたんだ。それで雄二はあんな状態になっているわけ）

（……………）

俺が小声で明久と秀吉に事情を聞くと、俺は無言になった。

坂本と土屋が一瞬で倒れるつて…………ハッキリ言つて姫路の料理は毒物と言つても過言じゃないな。

「なあ姫路、ちよつと聞きたいんだが」

「はい、何ですか？」

「お前の作った弁当に何か隠し味になる物でも入れたのか？」

でなければ二人がすぐに倒れる訳がないからな。

「えっと、それぞれのおかずには硫酸や硝酸、クロロ酢酸を入れました」

「「「.....」」」

.....今何て言った？ 硫酸？ 硝酸？ クロロ酢酸？ 何でそんな物を入れるんだ？ 可笑し過ぎるにも程があるぞ。

隠し味の中身を聞いた明久と秀吉は更に体を震わせている。

「..... 姫路、何で化学薬品を入れるんだ？」

「そうした方が味が更に美味しくなると思いました」

..... コイツ、料理を冒涇していないか？

「..... ならハッキリ言おう。 姫路、君は——」

「ちょっとシユウ？ 君は何を言おうとしてるのかなあ？」

俺が姫路にもう弁当は作らなくていいと言おうとしたが、明久が即座に俺の口を塞いだ。

「むぐむぐ!!」

「シュウ、ちょっと向こうへ行こうねえ」

明久は俺の口を塞ぎながら姫路から距離を取ると……。

（どう言ってもりだ、明久。何故止める？ お前は聞いてなかったのか？ 姫路がどれだけ料理を冒読しているのかを）

（何考えているんだよ！ もしシュウが弁当はもう作るなって言ったら姫路さんが凄く傷つくじゃないか!!）

（あのなあ、この場合は気遣うんじゃなくてハッキリ言った方が良
いぞ。俺は化学薬品の入った料理なんて食いたくもない。増してや
死にたくも無い）

（だからと言って、一生懸命に弁当を作った姫路さんに、そんな事
を言ったら失礼じゃないか！）

（バカかお前は。姫路に気を遣うのと俺達の命、どっちが大事なの
か分からないのか？）

（そ…それを言われると……）

俺を説得するが、すぐに意思が弱まった。

（とにかく、俺はハッキリと言っからな。邪魔するなよ）

「ちょ…ちょっと!？」

明久から離れた俺はすぐに姫路のいる所に行く。

「スマンな姫路。で、さっきの続きだが……」

「えっと、その前にデザートを食べてからにしませんか？」

何……だと？ まだ他にもあったのか？

姫路が鞆から容器を取り出すと……。

「ああつ！ 姫路さんアレはなんだ！？」

「明久！ 次は俺でもきつと死ぬ！」

明久がさっき使った手をもう一回使おうとしたが、さっきまで倒れていた坂本が起き上がって必死に止めた。その途中から秀吉も一緒になって相談し始めている。

「……………もう付き合いきれん」

俺は明久達が相談をしている間に屋上から去ろうとする。此処で俺が姫路に本当の事を言おうとしても明久達が阻止するだろうと思ったからだ。

「あの、天城君。何処へ行くんですか？ デザートは……」

「悪いが遠慮しておくよ。それに俺はまだ飯を食ってないからな。デザートはあの3人にでも食わせてやってくれ」

「で……でも、一口くらいは……」

「俺は今デザートより飯を食いたいからな。それじゃあ」

引き止めようとする姫路であつたが、俺はすぐに屋上から去つて行つた。俺が屋上から出る事に気付いた明久達は阻止しようとしたのだが、姫路にデザートを勧められたので出来なかつた。

そして屋上から去つた俺はすぐに食堂へ行つて、昼飯を食べて事無きを得たのであつた。

第七問（後書き）

旅人『ハッハッハッハ！ 見事に姫路の弁当から回避したねえ、修哉』

修哉「明久には呆れますよ。何でハッキリと不味いって言わないのか」

旅人『アイツは女の子を傷つかせない為にああ言ってるからな』

修哉「だからと言って、命を散らしてまで気遣う必要は無いでしょうに。ってか坂本や秀吉にも言える事ですけど」

旅人『基本的にフェミニストだからね』

修哉「命に係わるなら、そんな物はドブに捨ててでも本当の事を言えば良いのに………はあっ」

第八問

俺は食堂で昼食を終えて教室に戻ると、屋上にいた明久達が既に戻っていた。特に土屋、坂本、秀吉がお茶をがぶ飲みしている。

教室に戻った俺を明久達は恨みがましい目で見ていたが、敢えて気にしないでいた。と言うか、最初から素直に死にたくないから食わないと言えば万事解決なんだが。

「で、結局デザートは秀吉が食ったんだな」

そして俺は隣の席でお茶を飲んでいる秀吉に聞く。

「う…うむ。………しかし、胃袋の強度を誇るワシでさえやられるとは………恐るべし」

「あのなあ。いくら胃袋に自信があるからと言って、危険な化学薬品の前では無意味だぞ。つか化学薬品を聞いたのにも拘らず、それでも食べる秀吉もどうかと思うんだが」

「で、何でお茶を大量に飲んでいるんだ？」

「お茶には殺菌作用があるからのう。だから飲んでおるのじゃ」

「………確かにそうだが、お茶程度で殺菌されるのか？」

ゴクゴクの飲み続ける秀吉に突っ込む。

硫酸や硝酸やクロロ酢酸がお茶なんかで殺菌されるとはとても思え

ない。お茶を飲んでいる秀吉達を見ると多少は回復しているみたいだが。坂本や土屋を見ると、お茶のお蔭で何とか復活している。

それにしても、まさか姫路があそこまで酷い欠点があるとは知らなかった。料理に化学薬品を入れるなんて常軌を逸している。と言うか姫路は化学薬品を何処から調達しているんだ？ 一般には簡単に買えない物なんだが。

まあ姫路に何処で調達したかなんて聞く気はないし、知りたくも無い。取り敢えず姫路が再び明久達に弁当を作って出したとしても俺は絶対に食べない。たとえ姫路が食べて下さいと言っても化学薬品の入った料理はいらないと言って、それでもしつこかったら不味い毒物料理なんか食いたくないと言う……俺がそう言おうとしても明久達が阻止するだろうが。

と、俺が考えている最中に……。

「そう言えば坂本、次の目標だけど」

「ん？ 試召戦争のか？」

「うん」

島田が坂本に試召戦争について聞こうとしていた。

あれ？ そう言えば島田は何で屋上にいなかったんだ？ 既に坂本は屋上に着いていたのに島田がいらないなんて……まあいいか。別に俺が気にする必要は無い事だし。

「朝に坂本がBクラスと相手をするって言ってたけど、どうしてB

クラスなの？ 目標はAクラスなんでしょう？」

島田の質問には誰もがそう思っているだろう。Aクラスを目標としているFクラスとしては、態々Bクラスを相手にする必要は無いと考えているから。

「正直に言おう」

坂本が神妙な顔をして……。

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

勝てないと断言した。

明久達は意外そうな顔をしていたが、俺は当然だと内心で頷く。

確かに坂本の言うとおり、今のFクラスでAクラスに勝てる要素は一つも無い。点数の低いFクラスが奇襲や不意打ち、先制攻撃がどんなに上手く行った所で、Aクラスはそれを簡単に押し退ける実力があるので返り討ちに遭うのがオチだ。

坂本はDクラスとの試召戦争に勝利したFクラスの士気は上がっているから、このままAクラスにも勝てると思っっている奴がいるだろうと考えて正直に言ったのだろう。

「それじゃ、ウチ等の最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、そんな事はない。Aクラスをやる」

「雄二、さっきと言ってる事が違うじゃないか」

島田の台詞を引き継ぐように明久が間に入ってきた。

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎討ちに持ち込むつもりだ」

「一騎討ちに？ どうやって？」

「まさかAクラスと戦う為の準備として、Bクラスを利用する気か？」

「その通りだ。よく俺の考えが分かったな、天城」

「何となくだが」

「ちょっとシユウに雄二、僕達にも分かるように説明してよ」

俺と坂本の会話に明久は付いて行けないみたいに言ってくる。

「じゃあ明久、確認だが試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知っているな？」

「え？ も、もちろん！」

坂本の質問に明久は分かるように言ってるが、俺は絶対に知らないだろうと思った。

明久、見栄を張らず素直に知らないと言えよ。そしたら俺が答えてやるのに。

因みに坂本の質問の答えは、下位クラスが負けたら設備のランクを一つ落とされるだ。

「設備のランクを落とされるんだよ」

「……まあいい。つまり、BクラスならCクラスの設備に落とされる訳だ」

近くにいた姫路から答えをこっそり教えてもらった明久が答えると、坂本は少々呆れながらも話を続ける。

「そうだね。常識だね」

だったら常識と言える答えを姫路に聞いて今理解したと言った顔をしていたんだ？

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

阿呆。そんな訳無いだろうが。

「ムツツリーニ、ペンチ」

「ややっ。僕を爪切り要らずの体にする動きがっ」

明久のバカな回答に坂本が土屋にペンチを用意するように指示をするので……。

「明久、分からないなら分からないって素直に言え。上位クラスが

負けたら相手クラスと設備が入れ替えられるんだよ」

「そ…そうなんだ」

今度は俺がフォローを入れると、明久は助かったみたいな顔をした。

「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられる訳だね」

「ああ。そのシステムを利用して、交渉をする」

「交渉、ですか？」

坂本の言葉に姫路が聞き返す。

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。先ず上手く行くだろう」

Bクラスに勝てればの話だけだな。

「ふんふん。それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』と言った具合にな」

「なるほどね！」

明久は理解して分かった顔をする。

流石のAクラスと言えども、休みも無しに連戦するのはキツイ筈だ。逆にFクラスは連戦になっても、設備に対する不満と言う原動力があるから続けられる。おまけに体力があり余ってる男子生徒ばかりいるから連戦しても問題は無い。

「じゃが、それでも問題はあるじゃろう。体力としては辛いし面倒じゃが、Aクラスとしては一騎討ちよりも試召戦争の方が確実であるのは確かじゃからな。それに……」

「それに？」

「そもそも一騎討ちで勝てるのじゃろうか？　こちらに姫路がいると言う事は知れ渡っている事じゃろう？」

確かに秀吉の言う通りだ。一騎討ちに持ち込んだ所で必ず勝てる訳でもないし、姫路がFクラスにいる事はもう他のクラスに知れ渡っている。現にAクラスの木下優子が知っているのだから。当然、何処のクラスでも姫路についての対策を練っている筈だ。

「その辺に関しては考えがある。心配するな」

「……………坂本、それは本当に勝算があるから言ってるんだよね？」

「勿論だ」

「……………ならいいが」

自信満々に答える坂本に俺は取り敢えずと言った感じで言うが、内

心余り信じる事が出来なかった。

いくら坂本がああ言っても不安だ………だが俺にはAクラスに勝てる策が浮かばないから、ここは坂本の言葉を信じるしかない。

「とにかくBクラスをやるぞ。細かい事はその後に教えてやる」

「ふーん。ま、考えがあるならいいけど」

明久もここは坂本を信じるしかないと思った感じた。

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに行つて宣戦布告を……」

坂本は明久にBクラスに行けと言つてる最中に……。

「どうやら坂本は説教するより体罰を与えた方がいいかもな」

俺がポキポキと指を鳴らしながら、いつでも坂本を殴る準備をする。

「……………ゴホンッ！ 明久、冗談だ」

「冗談？ 僕にはとてもそうは思えなかったけど？」

坂本は俺を見て冷や汗を掻きながら咳払いをしてやり過すが、明久はジト目で見ている。

「あまり調子に乗るなよ、坂本。いくらお前が代表だからと言って、やっていい事と悪い事があるぞ。これ以上、明久を陥れるなら今から此処で説教してやろうか？」

「……………すみませんでした」

俺の低い声に坂本は土下座して謝罪した。

「よろしい。ならば俺がBクラスに言って宣戦布告しても構わないだろう？」

「……………どうぞ」

「あ、シュウが行くんだったら僕も一緒に行くよ」

俺が土下座している坂本に確認を取ると、明久も一緒に行くと言い出す。

「明久、今回は俺だけで充分だ」

「でも一人だけで大丈夫なの？　もし宣戦布告してBクラスにリンチでもされたら……………」

「問題無い。そうなたとしても一人だけ伸せば向こうから勝手に退いてくれる」

「じゃが修哉よ、そんな事をしたらまた教師に呼び出されるのではないのかの？」

「その時は俺を陥れようとしたDクラスの奴と同じ運命を辿っても

らっ」

明久と秀吉の質問に淡々と答えながら、俺は教室から出ようとする。

「それじゃあ、ちよっくら行つて来る」

俺はそう言つて教室から出たのであった。

「大丈夫かな？ シュウだけに行かせて……」

「明久と違つて、天城はそれなりの対応は出来るからな」

「雄二、僕を行かせようとしておいて、よくそんな事が言えるね」

「まあ修哉は他のクラスでもよく知っておるから、心配は無いと思うのじゃ」

「……それに天城は荒事には慣れている」

「天城君に何かが起こらなければいいですけど」

「ふんっ！ ウチに言わせれば、女の子を殴る天城にはお仕置きされて欲しいわ」

「……島田、まだ根に持つてるのかよ」

「さて、さつさと宣戦布告をするか」

Bクラス前に着いた俺はドアを開ける。

「すいませ〜ん。Bクラスの代表はいますか〜？」

「ん？ 修哉か」

「やあ和人。久しぶり…… ってそんなに経っていないか」

俺が代表を呼ぶと、目の前にいる赤味が帯びた茶髪の男子生徒が俺の方に向かってきた。

「もしかして和人がBクラスの代表か？」

「いやいや、俺じゃないよ。ってか聞いたぞ修哉、お前Fクラスにいるんだって？ しかも訳ありで振り分け試験を受け損ねたみたいだな」

「まあな」

親しげに話す男子生徒の名は佐伯和人^{さへきかずと}。俺の幼馴染だ。

「俺としては残念だよ修哉。もし試験を受けてBクラスに来てくれたら、一緒に試召戦争をやって名コンビになろうと思ってたんだが」

「それは嫌味か？ 俺程度がBクラスに来れる訳がないだろうが……
…ってか和人、ちよつと離れてくれないか？」

「気にすんなよ。俺とお前の仲じゃないか」

「……………その台詞を女子が聞いたら完全に誤解されるだろうな」
寄り添うかのように腕を俺の肩に置いて、甘いマスクを浮かべながら俺に話しかける。俺と和人の近くにいる女子生徒は和人の笑みを
見てウツトリしている。

もう気付いていると思うが、和人はかなりのイケメンで女の子からは物凄くモテている。おまけに女子に対する接し方も巧く柔らかな笑みを浮かべて、見事に落とすプレイボーイだ。女子に告白された回数は20〜30を軽く超えている。正に男の敵と言えるだろう。

「で、お前が代表じゃ無いなら、一体誰なんだ？」

「ああ。代表はあそこにいる……」

「おい佐伯、男相手に気色悪い事してんじゃないやねえよ」

和人が指した方向を見ると、若干キノコ頭みたいな男子生徒がいた。

確かコイツは……。

「気にすんなよ根本。これは幼馴染のスキンシップだ」

「そうかよ。で、天城って言ったか？ 俺に何の用だ？」

根本……あ、もしかして根本恭二か。確か噂ではカンニングの常連で目的の為ならば手段を選ばない奴だと聞いたな。

余り噂とかは信じない俺だが、何度も耳にしているので恐らく真実なのだろう。見た目で判断してはいけないんだが、いかにもあくどい顔をしているので余計に真実味が増した。

まあそんな事はどうでもいいから、さっさと用件を済ませよう。

「えっと……俺達FクラスはBクラスに試召戦争の宣戦布告をしに来た」

『何だと！？』

「ほーう」

俺の宣戦布告にBクラス全員が驚いている中、和人だけは大きく驚かず面白そうな顔をしている。

「正気か？ Fクラス風情が俺達Bクラスに勝てると思ってるのか？」

「だから宣戦布告しに来たんだよ。それと和人、いい加減に離れてくれ」

「はいはい」

和人、お前は俺が言わなきゃ離れないのかよ。

「そう言う訳で明日の午後に挑むから、どうぞお手柔らかに」

「……………どうやらDクラス程度を倒した位でいい気になっているみたいだな。だったら教えてやる。お前等クズ揃いのFクラス風情が誰に向かって物を言っているのかをな」

「では承諾と言う事でいいんだな？　だったら俺はこれで失礼する」
挑発には乗らずに俺は教室から出ようとするが…………。

「まあ待てよ。その前に俺達からの挨拶を受け取ってくれ」

根本は俺に何かを渡すように引き止めた。

「何をだ？」

「はっ。分かってんだろ？　……………お前等！！　ソイツに挨拶をしてやれ！！」

『うおおおお~~~~！！！！！！』

根本の指示により、Bクラス生徒達が一斉に俺へと襲い掛かってきた。

「やはりこうなるか。仕方ない」

俺は大して慌てずに襲い掛かってくる一人を伸そうとしたが…………。

バキッ！！

「ぐあつ!!」

「なっ!? お…おい佐伯! 何の真似だ!？」

「ん？」

俺に攻撃を仕掛けた奴が、突然横から和人のパンチを喰らって伸ばされた。その事に根本は和人に激昂して怒鳴ると、他のBクラス生徒達は和人の行動によって足を止めている。

「悪い悪い。ちょっと手が滑ってな」

「ふざけるな! 手が滑ったじゃないだろうが! 味方に攻撃するなんて何考えていやがる!？」

「と言うか和人、お前はそっち側だろ？」

根本の怒鳴り声を聞き流す和人に、俺は突っ込みを入れるが無視されている。

「おい根本。使者にリンチするのがお前の挨拶なのか? とてもBクラスのやる事とは思えないぞ」

「何言ってやがる! 下位クラスには上位クラスに挑む事を後悔させる為の見せしめをするって相場が決まってるだろうが!」

「やはりそう言う認識なんだな。本当に明久を行かせなくて良かったよ」

問題発言とも言える根本の台詞に俺は明久を行かせなかった事に安堵する。

「おい和人、別に助けなくても俺一人で充分に対処出来たんだが」

「つれない事を言うなよ、修哉。幼馴染として放って置ける訳がないだろ」

「……………そうかい」

まあ和人のお節介は今に始まった事じゃないが。

「さ、修哉。根本には俺が言っておくから、お前は教室に戻るといい」

「おい佐伯！ お前何勝手な事を！」

「なら俺はこれで失礼する」

「ま…待て！ って何やってるお前等！ アイツを捕まえる！」

俺がBクラスの教室から出ようとすると、根本はBクラス生徒達に俺を捕まえるように指示するが……。

「悪いが根本。修哉には手を出させないぞ」

「なっ！」

佐伯が立ち塞がるように出入り口に立ったので捕まえる事が出来な

くなってしまった。

「それじゃあ和人、明日の試召戦争で」

「ああ。修哉と戦えるのを楽しみに待っているよ」

修哉は戻ったか。後は……。

「佐伯！ お前どう言つつもりだ！？」

さっきから怒鳴っている根本をどうにかするか。

「何がだ？」

「惚けるな！ 何で俺の邪魔をするのかと聞いているんだ！？」

「言っただろ？ 修哉は俺の幼馴染だから助けたんだ。幼馴染がリ
ンチされるのを黙って見ている訳が無いだろう」

「今回は試召戦争だぞ！ 下位クラスの士気を下げさせる為に見せ
しめをするのは当然だろうが！」

「だから一人相手にリンチするのか？　とてもBクラスのやる事とは思えないな」

と言うか、リンチするのが当たり前の様に言うお前がどうかしてるま、こんな小物にそんな事を言っても無駄だろうが。

「根本、お前は俺のやった事に対して憤っているみたいだがな。もし俺があそこで間に入っていなかったら、お前等の内の誰かが返り討ちにされていたかもしれないんだぞ。寧ろこの程度で済んだ事に礼を言ってもらいたい物だ」

「なっ!？」

俺の言葉に根本は信じられない顔をする。他の連中も同様に。

「修哉はああ見えて、俺と同様に腕が立つぞ。アイツは以前から觀察処分者の吉井や、騒ぎを起こす問題児達を簡単に鎮圧している。だからお前達が集団で襲いかかった所で返り討ちされるだけだ。もうついでに言うておくが、修哉は向かって来る相手には容赦しないぞ。たとえ相手が女でもな」

『……………』

俄かに信じられないような顔をしている連中だが事実だ。

「まあ信じる信じないは勝手だが、これだけは言うておく。根本、今回は試召戦争前だから見逃してやるが、また俺の前で不快な行動を取ったら……………どうなるか分かってるな？」

「！！！！……わ…分かった……」

俺がほんの少しだけ殺気を出すと、根本は怯えた顔をしている。この程度の殺気で怯えるとは……やはり小物だな。修哉だったら簡単に受け流すぞ。

おっと、どうやら女子も怯えさせてしまったみたいだ。すぐに殺気を引っ込めなければ。

「女子の皆、怖がらせてすまない。君達まで巻き込んでしまつて大変申し訳ない」

「あ…き…気にしないで佐伯君」

「私達はそんな……」

俺が笑みを浮かべながら謝罪すると、女子達は気にしていないように言っている。

だけど俺としては本当に申し訳なかった。

「そうは行かないよ。お詫びとして、放課後にクレープを奢るよ。どうかそれで許してくれるかい？」

『……………はい……………』

女子達は顔が物凄く赤くなりながらも許してくれた。

男子全員は揃いも揃って修哉に襲い掛かってきたから何もする気は無い。無論、俺によって気絶している奴にもだ。

午後の補給テストが終わった放課後。

「坂本、Bクラスには明日の午後に試召戦争をやるって言っておいた」

「よし、後は明日の午前中のテストが終われば開戦だ」

「もうついでに言っておくが。やはりBクラスはDクラスと同様、使者にリンチをやるうとしていたぞ？」

「……………」

「もし明久を行かせてたら、酷い目に遭っていたらろくな」

「……………」

「やはりお前は今の内に体罰を与えた方が良さそうだ」

「ま…待て！ 明久の代わりに天城が行ったんだから問題は……」

「問答無用だ。齒を食い縛れ」

「ギヤアアアアア~~~~~!!!!!!」

俺が折檻すると坂本は断末魔の悲鳴を上げるのであった。

第八問（後書き）

早くもオリキャラの登場です。

佐伯和人については後ほど紹介します。

第九問

バカテスト 化学

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

簡単でしたかね。

天城修哉の答え

『 C_6H_6 』

コメント……明久と土屋がバカな回答したら職員室に連れて行かせます。

教師のコメント

言うまでも無く正解です。

それとコメントについてですが、その時はお願いします。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学を舐めていませんか。

吉井明久の答え

『B - E - N - Z - E - N』

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように。

いえ、天城君に頼んで二人纏めて連れて来させた方がよろしいですね。それでは天城君、お願いします。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立った坂本が手を置いて俺達の方を向いている……………昨日、俺が体罰を下した所為か未だに痛そうな顔をしているが誰もそれに突っ込まなかった。

つい先程の午前中に全科目の補給テストが終わって昼食を取ったところだ。今回のテストで俺の全科目は点数があるので万全な状態で

試召戦争に充分挑める。とは言え苦手科目は余り万全な点数ではないのだが。

まあそこは置いといて、とにかく補給テストが多くてかなり大変だった。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『おおーっ！』

坂本の言葉にFクラス達は大声を上げる。やはりモチベーションを維持する為には設備交換をしない方が良かったみたいだな。

俺としては設備交換して、満足している奴と結託して試召戦争を終わらせたかったが。恐らく坂本はそれも考えて設備交換をしなかったと思う。

そう考えている最中、坂本は作戦を説明し始める。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込む事が重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下は絶対に負ける訳にはいかない」

『おおーっ！』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を執ってもらう。野郎共、キツチリ死んで来い！」

「が、頑張ります」

若干引き気味になっている姫路は一步前に出てペコツと頭を下げると……。

『うおおーっ！』

前線部隊が姫路と一緒に戦えると分かって、士気が最高潮に達していた。

流石に姫路をすぐ前線に出さなければいけないと坂本は考えたのだろう。Fクラスの点数ではBクラス相手に負けるのは一目瞭然だから、最大の奥の手である成績優秀者の姫路を出さなければいけない。主戦力の姫路が敵を倒している最中、他の前線部隊は姫路を守る為の盾だ。坂本が死んで来いなんて言うから、姫路以外の前線部隊はただの時間稼ぎ部隊だ。まあ犠牲覚悟で挑まなければBクラスに勝てないのだから仕方ない。

キンコーンカーンコーン！

昼休み終了のチャイムが鳴り響いた事によって、Bクラスとの試召戦争が始まった。

「よし、行つて来い！ 目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

坂本の掛け声により、Fクラス前線部隊は一斉に教室を出るが……。

「み…皆さん、待って下さい」

「少しは姫路の事を考えればいいんだがな」

姫路は出遅れてしまった。

「それじゃあ姫路、前線は任せたぞ」

「は…はい。それでは行ってきます」

「それと天城はここに残れ。今回は数学がメインだからな」

教室を出た姫路に俺も後を追おうとしたが、坂本が残れと言われたので仕方なく残る事にした。

「確かに数学は苦手だが、一応それなりには戦えるぞ？」

「だとしてもBクラス相手にはキツイ。それに向こうは比較的文系が多いからな。万が一の事を考えて、ここに攻め込まれて文系で挑まれたら天城が対処して欲しい」

「……………ここは従おう」

坂本の言葉に従って教室に残る事にした。

「それと他に聞きたい事があるんだが……Bクラスの代表は誰か知っているか？」

「ああ、そう言えば昨日言い忘れていたな。代表は根本恭二だ」

「根本……アイツか」

俺が根本と言ったら坂本は顔を顰める。どうやら坂本も根本の事について知っているみたいだな……特に悪い噂について。

「その顔を見る限りでは知っているみたいだな」

「根本は勝つ為なら、どんな汚い手段でもやる男だつて誰もが知ってるぞ。例えば“球技大会で相手チームに一服盛った”とか、“喧嘩に刃物は当然装備”^{デフォルト}つてな」

「……………ソイツには正々堂々と言う単語が全く無いみたいだな。そんな汚い手を使ってまで勝利を得たいのか？」

「お前からして見れば卑怯だと思うが、俺にはそんな大した事は無いが」

「……………卑怯に関する点については、お前も根本と同様だな」

少しばかり坂本に軽蔑の眼差しを送る俺。

「やれやれ。俺や和人がこんな卑怯者の代表の命令に従う事になるとは……………」

「和人？ ……………おい、ソイツは佐伯和人か？」

「ああ、俺の幼馴染だ。と言うか坂本は和人の事も知ってるのか？」

「アイツは有名だろうが……特に女の話題に関して。学園の男子の誰もが佐伯を“男の敵”と呼んでいるだろうが」

「……………まあそこは否定出来ないな」

確かに和人は容姿端麗で成績優秀、運動神経抜群の3拍子揃った奴だ……………おまけに女子から物凄くモテている。

「俺が知ってるのはそれだけなんだが。まあそれはいいとして、幼馴染のお前から見て佐伯をどう見る？」

「知つての通り和人は女性相手に優しく接する奴だ。かと言って男相手にもちゃんと普通に接するし、中々面倒見の良い奴だ」

「……………意外だな。ああ言うのはてつきり男相手には冷たく接すると思つてたが」

「もしそうだとしたら、今頃俺とは仲の良い幼馴染じゃないからな」

「そうか……………つて違う！俺が聞きたいのはそんな事じゃなくて、試召戦争でどう戦つかについてだ！」

「ああ、そつちか」

坂本の突っ込みに俺は答える内容を間違えたと気付く。

「和人は真つ向勝負を好むから前衛に挑むだろうし、後衛で策を練るかもしれないな」

「……………つまり佐伯はオールラウンダーって事か。厄介な奴が

Bクラスにいたもんだな」

「けど和人の事だから、今頃は前衛で戦っていると思う」

「何故そう言い切れる？」

「俺がBクラスで宣戦布告をした後に和人と根本の会話を見て、どうも馬が合わなさそうな感じがしてな」

「だから前衛で戦っている？」

「ああ。もし和人が後衛で策を練るとしても、根本と違って余り卑怯な手は好まない。互いの戦力や状況を見てどうやって攻めようかと考えるタイプだからな」

「……………成程な」

俺の回答に坂本は少々考える仕草をする。恐らく今の前線部隊の戦況を考えているんだろう。

「天城の言うとおり佐伯が前衛にいるなら、俺達にとっては好都合かもしれないな」

「それって姫路が前線にいるからか？」

「まあな。いくら佐伯が強くても、姫路がいたら真つ向では勝負にならないだろうし、策を使っても簡単には倒せないからな」

姫路を信頼している故の台詞だろう。

だが……。

「とは言え余り軽視は出来ない。天城、お前も前線に行ってくれ」

「そう言うと思ったよ」

坂本は後々の事を考えて俺を前線に行かせようとしていた。俺もその判断は間違っていないと思う。

「もし和人が誰かと戦っていたら、真つ先に助太刀して倒す事にする。幼馴染の俺から見ても、和人は前から掴み所が無い奴だからな」

「そう言う奴ほど厄介な相手だな。是非そうしてくれ」

「ああ、それじゃ行つて来る」

俺は頷いて教室を出ようとしたが……。

「ちよつとよろしいですか？」

いきなり担任の福原先生が教室に入ってきた。

「福原先生、どうかしたんですか？ 今は試召戦争中ですよ」

「坂本君に用がありました」

「俺に？」

「ええ。Bクラス代表の根本君が話があるそうです」

福原先生の台詞に俺と坂本は疑問を抱いた。俺が坂本の顔を見ると、坂本は分からないと言った感じで首を横に振る。

根本が坂本に話したと？ 一体何を考えている？

「話って何なんだ？」

「協定について話をしたいと言ってましたよ。屋上で待っているそうです。では私はこれで失礼します」

言うだけ言った福原先生はすぐに教室から去って行った。

「……………どうする、坂本？」

「取り敢えず行つて聞く事にする。一応は協定についての話だからな」

「そうか。俺はこのまま前線に行くが、どうする？」

「いや、変更だ。本隊と一緒に前も付いて来い。相手は根本だから用心しないといけないからな」

「分かった。ではそうしよう」

協定と言って実は罠だったなんてオチと言う可能性が考えられる。坂本は当然それを想定して俺も一緒に行かせようとしているのだろう。

俺は一応、姫路の次に点数が高いから……と言ってもかなり点数差がある。それでも状況次第によってはBクラスとまともに戦える…

…相手が文系の科目で挑めばの話だが。

「それじゃ屋上に行くぞ」

「了解」

『おうつ！』

坂本と一緒に俺や本隊は屋上へと向かう。

しかしこれは根本の罠だったと俺達は後から気付くのであった。

「ようこそ、Fクラスの代表さん。待ってたぞ」

俺達が屋上に着くと、そこにはBクラス代表の根本や近衛部隊、そして和人がいた。

ん？ 何で和人がいるんだ？ アイツが根本の傍にいたとは……
どうやら俺の読み間違いみたいだな。

「和人、俺はてつきり前線で戦ってると思ってたが」

「いや、最初はそうしようと考えていたんだけど、根本の指示で行くと言われてね」

頭をポリポリと掻く和人を見て、俺の読みは間違っていなかったみたいだが、待機させられていたのは予想外だった。

「俺としてはすぐに修哉と戦いたかったんだが、根本がこの後の……」

「おい佐伯、余計な事は言うな。いくら幼馴染だからと言っても今は敵同士だ」

「はいはい」

根本の注意に和人は頷いて喋るのを止めた。

「で、協定の内容について聞かせてもらおうか？」

和人から情報を聞き出す事が出来ないと分かった坂本は本題に入る事にした。

「ああ。今回の試召戦争で、四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時から持ち越し、その間は試召戦争に関する一切の行為を禁止するって話だ。どうだ？ お互いに悪い話じゃ無い筈だ」

「……………」

根本の協定内容を聞いた坂本は無言で考えていると……。

「……………」分かった。協定を結ばせて貰う」

少し経って承諾するのであった。

まあ確かに根本の言うとおり悪くない話だ。Bクラスを倒すにしても、かなりの時間を労するだろうし、何より一番の頼みである姫路がずっと戦い続ければ疲弊して倒れる恐れがある。そんな事になったらBクラスは一斉に姫路に襲い掛かるだろう。

かと言ってBクラスの方も長期戦に持ち込まれて次回に持ち越しとなったら、かなりのダメージを負った状態で戦うのはキツイ筈だ。

当然、坂本はそれを考えた上で協定を結んだと思う。何しろ互いにとってメリットのある話なのだから。

承諾した坂本に根本は笑みを浮かべているが、和人は根本を見ながら不快そうな顔をしていた。まるで気に食わないと言わんばかりに

和人の不快な顔をしていた理由は俺達が教室に戻ってすぐに気付くのであった。

「……………成程、和人があんな顔をしていた訳だ」

「やってくれたな、根本の奴」

協定を結んだ俺達は教室に戻ると、穴だらけになった卓袱台とへし折られたシャープペンや消しゴムが大量に転がっていた。

そして戻っていた明久と秀吉や前線部隊数名も、その光景に顔を顰めている。

「酷いね。これじゃ補給がままならない」

「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

「いくら試召戦争だからと言って人の持ち物を勝手に壊すのはどうかと思うが」

明久と秀吉の台詞に俺も頷く。

と言うか嫌がらせ以前に器物破損で訴える事が出来るんじゃないか？ うわ、俺の筆入れの中のペンや消しゴムも無残な状態になっているし。

和人はコレを知って不快な顔をしていたのか。アイツはこう言った手段は嫌いだからな。恐らく根本に対する評価はかなり下落しているに違いない。

「あまり気にするな。修復に時間は掛かるが、作戦に大きな支障は無い」

「雄二がそう言うなら良いけど」

「いや、修復や作戦以前に、この事を先生に言った方が良くないか？ これは明らかに問題だろ」

人の持ち物を勝手に壊したんだから。

「根本の事だ、どうせ白を切るに決まってる。Bクラスの犯行だと分かった所で、部隊の誰かが勝手にやった事だからと言って責任逃れするだろう」

「だとしても実行した奴等には壊した筆記用具を請求してやる。それと一緒に説教もな」

まあ実行した奴等がダンマリした所で和人に聞くが。

「それはそうと、どうして雄二やシュウは教室がこんなになっているのに気付かなかったの？」

「協定を結びたいと言う申し出があつてな。調印の為に教室を空にしていた」

「それに根本が本当に協定を結ぶかどうかの確信が無かったから、俺や本隊も一緒に付いて行つたんだ。もしかしたら騙し討ちをするんじゃないかと思つてな」

明久の質問に俺と坂本は答えると、秀吉が意外そうな顔をする。

「協定じゃと？」

「ああ。四時までに決着がつかなかったら、戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間、試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな」

「それ、承諾したの？」

「そうだ」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方がこっちとしては有利なんじゃないの？」

「姫路以外は、な」

「戦力の要である姫路がやられたら、いくら俺がいても不利だからな」

明久と秀吉は調停を結んだ理由が分かると納得する顔をした。

「アイツ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日と言う事になる」

「そうだね。この調子だと本丸は落とせそうに無いね」

「その時はクラス全体の戦闘力よりも姫路個人の戦闘力の方が重要になる。まあ天城も重要な戦力の一人だが、数学以外はな」

ほっとけ、俺だってそれなりの努力はしているんだ。確かに数学は苦手だが、それでも坂本達より点数は高いっての。

「だから受けたの？　姫路さんが万全の態勢で勝負できるように」

「そう言う事だ。この協定は俺達にとってかなり都合が良い」

果たして本当にそうなんだろうか。坂本はそう言うが俺は何か釈然としなかった。

屋上で話を聞いた時には俺も坂本と同様に悪くない話だと思っていたが、教室に戻って悲惨な状態となった事に疑問を抱いた。

今思えば裏で嫌がらせを指示していた根本が、互いにメリットのある協定を提案をする。あの卑怯者と称される根本が嫌がらせだけで済ませる程の甘い奴なんだろうか？

それに和人もだ。アイツが前線へ出ずに根本と一緒にいた事が気になる。『この後』って和人が言ってたな。根本は後から何かをやる為に和人を傍に置かせたのか？

まあ今はこんな事を考えても埒があかないか。

「明久、取り敢えずワシ等は前線に戻るぞい。向こうでも何かされているかもしれん」

秀吉が明久にそう言うのと教室を駆け足で出て行き……。

「ん。雄二、あとよろしく」

「おう。シャープや消しゴムの手配をしておこう」

明久が手を挙げて坂本に背を向けて教室を出て……。

「坂本、俺も前線に行くが構わないか？ 明日に持ち越しとなるなら、出来るだけ倒しておきたい」

「そうだな、なるべく倒しておいた方がこっちとしても多少は有利になる。行ってくれ」

坂本から許可を得た俺も教室から出て明久達と一緒に前線へ向かった。

「明久、秀吉、今度は俺も参加させてもらおう」

「シュウも出るの？ それなら心強いね」

「数学だったら明久達と大して変わらんがな」

「そうは言っても、修哉はワシ等より点数は高いからのう。おまけに明久と同様に召喚獣の操作も慣れておるから、こっちとしても頼もしいのじゃ」

「嬉しい事を言ってくれてありがとう」

明久と秀吉の言葉に俺は礼を言いながら前線に向かっている。

「だからと言って油断は出来ないぞ。相手は根本だからな」

「うん。なんか、まだまだ色々やってきそうだね」

「そうじゃな。この程度で終わると思えん。気を引き締めた方が良さそうじゃ」

果たして今度はどんな狡猾な手を使うんだろうか。にしても根本の奴、宣戦布告してきた時にはFクラスを見下してたのに、いざ戦うとなればアレか。戦力は向こうの方が上だと言うのに、何であんな手段を使ってまで勝とうとするのか俺には理解出来ん。和人もさぞかし嫌だろうな。

と、俺がそう思っている最中に前線部隊の姿が見えてきた。

「修哉よ、お主はこの部隊で戦うのじゃ？」

「取り敢えずは明久の部隊と一緒に戦わせてもらう。明久とはお互いに操作が慣れてて連携攻撃が出来るからな」

「そうだね。ボクとしてもシュウと一緒に戦いやすくなるから」

「そうか……ワシとしては修哉と一緒に戦いたかったのじゃが、それなら仕方あるまい。では、くれぐれも用心するのじゃぞ！」

「ああ」

「秀吉もね！」

残念そうな顔をしていた秀吉は部隊に戻り、俺は明久の部隊へと向かう。

「吉井！ 戻ってきたか！ ん？ 天城もいるのか、こっちとしては助かる」

出迎えた須川が俺を見て心強い味方が来てくれたと言わんばかりに安堵している。

「待たせたね！ 戦況は？」

「かなり不味い事になっている」

「え！？ どうして！？」

須川の台詞に明久は驚愕した。不味いと言ってもBクラスの方から本隊は出ている様子がなくて劣勢なのに、こちらとしても戦力がまだ結構残っているからかなり優勢だ。なのに何で不味いのだろうか。

「島田が人質に捕られた」

「なっ!？」

「おやおや」

今度は人質の手段を取ったか。劣勢な状況では確かに有効な手だろう。と言うか島田がどうして人質にされたのかは知らんが。

「おかげで相手は残り二人なのに攻めあぐんでいる。どうする？」

成程。明久の部隊はそのせいでBクラスと睨み合いになっているのか。さあ明久、お前はどうするつもりだ？

「……そうだね。取り敢えず状況を見たい」

「それなら前に行こう。そこで敵は道を塞いでいる」

須川が前を歩き、明久と俺は後に続く。

明久の部隊の人垣を抜けると、そこには須川の言つとおり二人のBクラス生徒と捕らえられた島田と召喚獣の姿があった。その近くには補習担当行使もいる。

おいおい島田、どうしてそんな状態になっているんだよ。いつも明久を殴っているお前がその気になれば、直接ソイツ等をブチのめせる筈だが？

「島田さん!」

「よ、吉井!」

「……………」

何だかドラマみたいな流れに俺は少々呆れ顔をする。

そして……。

「そこで止まれ！ それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

「……………」

相手も相手に悪役らしからぬ台詞を言った事に俺は更に呆れた。

恐らく相手は数少ない女子である島田を戦死させるだけじゃなく、人質にして補習室送りをチラつかせて、此方の士気を下げようとしているんだろう。

内の男子達は女子に飢えている傾向がありそうな連中ばかりだからな。あまり褒める物じゃないが、こつちとしてはかなり有効な手だ。

それにこの作戦は根本が指示したと思う。和人は根本と違いこんな手は考えない。相手が女子なら尚更だ。普段から女子に優しく接している和人はそんな事をしない筈だ。

まあそんな事より、さてどうするか。こんな状況がいつまでも続いていたら島田が補習室送りにされるのは時間の問題だ。俺としてはこれ以上こんな事に付き合う気はない。島田には悪いが、さっさと片付けさせてもらおう。

と、俺がそんな事を考えていると……。

「総員突撃用意いーっ！」

「隊長それでいいのか!？」

明久が須川達に突撃の指示を下した。

どうせ明久の事だから、戦争に犠牲は付き物とか言っつて、日頃痛めつけられている仕返しをしようとしても考えているんだろう。

俺から言わせれば何も言い返さずに黙って島田にやられている明久もどうかと思うんだがな。

取り敢えず島田には悪いがBクラスの連中と一緒に退場してもらおう。アイツは試召戦争中にも拘らず、明久にだけは容赦しないからな。

「ま、待て、吉井！」

Bクラス生徒から待てと言いながら片手を開いた状態で前に出す。

「コイツがどうして俺達に捕まったと思っている？」

「バカだから」

「殺すわよ」

明久はBクラス生徒の質問にあっさり答えると、島田が恐ろしい殺気を出してきた。

おい明久、思った事を素直に言うのは良い事だが少しは相手を見て考えような。

「コイツ、お前が怪我をしたって偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かったんだよ」

島田、明久を気遣うのは悪くないんだが敵の情報に踊らされるなよ。しかも護衛も付けずに一人だけ行くななんて……もう少し後先考えて行動しろ。

「島田さん……」

「な、なによ」

島田は顔が少々赤くなっているが……。

「怪我をした僕に止めを刺しに行くなんて、アンタは鬼か！」

「違うわよ！」

明久の見当違いな発言によって台無しになってしまった。

けれど明久は島田に散々な目に遭わされているから、あんあ突拍子も無い事を言うのは無理もなかった……島田が普段から明久に暴力を振るっていなければ変わっていたかもしれないが。

「ウチがアンタの様子を見に行っちゃ悪いっての！？ これでも心配したんだからね！」

おい島田、そんな事を言っても対する日頃の行いが悪い故に明久は

ああ言っただぞ。お前が一番の原因なんだからな。

「島田さん。それ、本当？」

「そ、そつよ。悪い？」

ぶいっとな顔を背ける島田。なんかまたドラマみたいな展開になっているな。

「へっ。やっとわかったか。それじゃ、おとなしく……」

Bクラス生徒がやっと立場が分かったと思って要求を突きつけようとしたが……。

「総員突撃いーっ！」

「どうしてよっ！？」

明久はまた突撃の指示を下した。

「あの島田さんは偽者だ！ 変装している敵だぞ！」

「待て明久、どうしてそんな答えになるんだ？ あれはどう見ても正真正銘の島田だと思うが」

「天城の言うとおりよ！ 何でそんな考えになるわけ！？」

「ふっ……それは簡単だよ、シュウ。何故なら……」

明久は少々もったいぶった様な感じになると……。

「あの島田さんにそんな優しさがある訳がない！ 嬉々として僕を殺りにくるに決まっているじゃないか！」

「何だよ！？」

「……………島田には気の毒だと思うが、俺は納得してしまった。島田の自業自得、もしくは身から出た錆とも言えるだろう。」

「否定は出来ないな」

「でしょう？」

「天城まで何言ってるのよ！？」

ではさつさと倒すとするか。運が良い事に科目が英語だし。

「試獣^{サモ}召喚！」

「おい待てって！ コイツ本当に本物の島田だって！」

俺が召喚獣を出している最中、狼狽しているBクラス生徒。

「黙れ！ 見破られた作戦にいつまでも固執するなんて見苦しいぞ！ さあシユウ！ 早く倒しちゃって！」

「はいはい」

とは言ってもBクラスの言うとおり、あそこにいるのは本物の島田なんだがな。

「では覚悟」

「だから本当に……！」

『Fクラス	天城修哉	英語W	160点
	VS		
Bクラス	すけみぎことお 鈴木次郎	英語W	33点
	よしただくお		
Bクラス	吉田卓夫	英語W	18点

シャキンッ！ ザシュッ！ ザシュッ！

俺の召喚獣は瀕死のBクラス召喚獣に居合をやって即行で倒した。

そして……。

「ぎゃあああー……！」

「たすけてえー……！」

近くにいた補習講師によって連行されたBクラス生徒の二人であった。

さて、後は島田をどうやって宥めるかな。

「皆、気をつけろ！ 変装を解いて襲い掛かってくるぞ！」

……… 明久、お前はまだ島田を偽者扱いしているのか。

「よ、吉井、酷い……。ウチ、本当に心配したのに」

「まだ白々しい演技を続けるか！ この大根役者め！」

「そこまでにしろ、明久」

未だにバカな事を言っている明久に俺は割って入る。

「コイツは本物の島田だぞ」

「何言ってるんだよシュウ！ そんな訳無いじゃないか！」

明久、これ以上バカな事を言い続けていると流石に俺もフォロー出来なくなるぞ。

「そうよ！ 本当に心配したんだから！」

「取り囲むんだ。いくらBクラスでも、この人数なら勝てるから」

「本当に、『吉井が瑞希のパンツ見て鼻血が止まらなくなった』って聞いて心配したんだから！」

「包囲中止！ コレ本物の島田さんだ！」

そんな嘘に騙される島田もどうかと思うが、明久は漸く本物だと信じたみたいだ。

「島田さん、大丈夫だった？」

「……………」

掌を反したかのように優しく接して、床に座っている島田に手を差し伸べる明久に俺は無言になりながら物凄く呆れた。

「……………」

島田も俺と同様に無言になりながらも明久の手に掴まって立ち上がる。あの様子だと明久がおかしな事を言ったら即座に殴りそうだな。

「無事で良かったよ。心配したんだからね」

「……………」

「教室に戻って休憩するといいよ。疲れているでしょう?」

「……………」

「それにしても卑怯な連中だね。人として恥ずかしくないのかな?」

「……………」

島田のノーリアクションに明久はやりにくそうな顔をしている。次に変な事を言ったら確実に明久を殴るな。

「あー、島田さん。実はね」

「……………なによ」

明久が最高の笑顔を作ると……。

「僕、本物の島田さんだって最初から気付いていたんだよ」

その台詞を言った後に物凄い勢いの乗ったパンチが明久の顔に炸裂したのであった。

明久、ハッキリ言って今回はお前が悪い。

流石に今回ばかりは明久に味方する事は出来ないので、俺はさつさと秀吉のいる部隊を掩護しに行くのであった。

第九問（後書き）

明日か明後日に更新しますので、次回をお楽しみに！！

それと感想もお待ちしております！！

第十問（前書き）

今回は今まで長く書きました、

それではどうぞー！

第十問

Bクラスとの試召戦争の最中、俺は秀吉の部隊に加わって敵をあらかた倒し、明久を制裁している島田の方に向かい……。

「島田、いくら明久が許せないとは言え、これはやり過ぎだ」

「何言ってるの。これは当然の報いよ」

島田を説教していた。その隣には明久が倒れて気絶しており、散々殴られただけでなく頭から血が出ている……まるで何かに叩きつけたかのように。

「だからと言って意識を失っている明久を殴り続けるだけでなく、頭を掴んで廊下に叩き付けるのはダメだろうが」

「ふん！ 元はと言えば吉井が悪いのよ！ ウチを偽者呼ばわりしただけでなく、気遣いまで無下にしたんだから！」

「前者は気の毒に思うが、後者はお前が普段から明久に暴力を振るっている故だ」

すぐに手が出る悪い癖が無ければ、明久も対応が変わっていたんだがな。

「何よソレ！ まるでウチが悪いみたいな言い方じゃない！」

「事実を言ったまでだ。と言うかお前は全く自覚が無いみたいだな。少しは自分の行動を反省したらどうだ？ そんな事ばかりしている

から、お前の明久に対する想いが伝わらないんだぞ」

「！……！！」

島田は俺の最後の台詞に顔が真っ赤になった。

「な……何言ってるのよ！？　う……ウチは吉井の事なんて……！！」

「そうか、ならコレだけは言っておく。何時までもそんな状態が続いていても、明久はお前に恋愛感情は抱かずに友達関係のままで終わる」

「！……！！」

「それが嫌なら、すぐに手が出る悪い癖を直して……」

俺が言っている最中……。

「ウチは吉井に恋愛感情なんて抱いていないわ！！　それに今までの事は全部吉井が悪いのよ！！」

島田はいきなり大声で怒鳴りながら何処かへと去っていった。

「……………はあっ……………人が説教している最中に逃げ出すとは……………。島田には困ったもんだ」

俺は島田の行動に溜息を吐きながら呆れ、倒れている明久を担ぎ……………。

「……………どうせ捕まえて説教を再会した所でまた逃げ出すだろうな。」

全く、我儚な子供を相手にしているみたいだ……」

愚痴りながら教室へと戻って行った。

「明久、お前にも問題があるんだからな」

気絶している明久にも突っ込みを入れて。

時刻は午後四時過ぎ。

「……ここはどこ？」

「やっと起きたか」

教室にて気絶していた明久が漸く起きた。

「あ、気が付きましたか？」

俺の隣にいた姫路が目を開けた明久に声を掛けると、明久は癒されているような顔をしている。

「心配しましたよ？ 天城君に連れてこられた吉井君ってば、まるで誰かに散々殴られた後に頭から廊下に叩きつけられたような怪我をしていたんですから」

まるで見たような姫路の推測に俺は内心で正解と言う。

「いくら試召『戦争』じゃからと言って、本当に怪我する必要は無いんじゃないぞ」

違うぞ秀吉。明久が怪我をしたのは味方である島田がやったんだよ……いや、戦争と言うより虐殺同然だったが。

「ちょっと色々あってね。それで試召戦争はどうなったの？」

明久は何でもないように言いながら畳に横たわっている体を起こして、試召戦争の事を聞き出す……痛そうな顔をしながら。

と言うか明久、お前はあれだけの事をちよつとで済ませるのか？俺だったら即行で島田に詰め寄っているぞ。

「今は協定どおり休戦中じゃ。続きは明日になる」

「戦況は？」

「一応計画通り教室前に攻め込んで、天城が出来るだけBクラスの数人を補習室送りにさせた。もっとも、こちらの被害も少なくは無いがな」

坂本がFクラスの被害を書いたメモを読み上げる。予想してたとは

言え、被害がかなり多い。俺は後半から廊下戦に加わって多少の戦果は上げたが、全体としてはあまり良くない。

「ハプニングはあったけど、今のところは順調って訳だね」

「まあな」

「だが相手は根本だから油断は出来ない。奴の事だから他にも何か企んでいる筈だ」

「そうだな。あの根本が教室の嫌がらせ程度で終わらせるような奴じゃない」

俺の言葉に坂本は頷く。次はどんな狡猾な手を使うのやら。

と言うか和人、いくら根本が代表だからと言って少しは反抗してくれ。これ以上、根本を調子に乗らせていたら度が過ぎる行動を取りそうな予感がある。

俺がここにいない和人に愚痴っていると……。

「……………（トントン）」

「お、ムツツリー二か。何か変わったことはあったか？」

土屋が背後から坂本の肩に指を突っついていた。

そう言えば土屋は戦いには参加せずに情報係として、周囲の警戒をしていたな。隠密行動が得意な土屋にとっては打って付けの任務だ……そのスキルは盗撮にも使っているが。

まあ土屋に盗撮関係の説教をした所で無駄なのは分かっているから、俺は敢えて何も言わない。ああ言う奴は一度警察に捕まらなければ分からない奴なのだから。だからと言って俺は警察に連絡する気は無いがな。

「ん？ Cクラスの様子が怪しいだ？」

「……………（コクリ）」

情報を聞いた坂本は聞き返すと、土屋は首を縦に振る。

「おい土屋、坂本だけじゃなく俺達にも教えてくれ」

「…………説明する」

俺の言葉に土屋は周りに聞こえるように話を始める。

土屋が入手した情報を端的に言うと、Cクラスが試召戦争の用意を始めているとの事だ。

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

「確かにそうだが、実際の戦争ではよくある事だ。確実に勝つ為に有効な手段の一つでもある」

「……………」

「どうした？」

俺の台詞を聞いた坂本は無言になりながらこつちを見てくる。

「いや、意外だと思つてな。正々堂々と戦つ天城が何かしらの不満を言つかと思つてたが」

「個人戦なら不満を言つてゐるが、集団戦は別だ」

「……………そうか」

「と言つか坂本、今はそんな事どうでもいいだろう。Cクラスの方はどうするんだ？」

「んー、そうだなー」

坂本は考える顔をしながらちらりと時計を見る。現在の時刻は午後四時半。時計を見た坂本は何かを決断したかのように俺達の方に顔を向ける。

「Cクラスと協定を結ぶか。『Dクラス使つて攻め込ませるぞ』つとか言つて脅してやれば、俺達に攻め込む気も無くなるだろ」

「それに、僕らが勝つなんて思つてもいないだろうしね」

明久は坂本に賛成しながら頷く。

確かに坂本の言うとおりの事をすれば、Cクラスもすぐには試召戦争を開始しないだろう……………けど妙だな。どうしてCクラスがこんなタイミングで試召戦争をやるうとしているのか。漁夫の利を狙うにしても何か都合が良すぎる気がする。

「よし、それじゃ今から行つて来るか」

「そうだね」

俺が考えている最中に坂本たちはCクラスに向かおうとしている。

「坂本、行く前にちょっといいか？」

「何だ？ 質問ならCクラスに行つた後にして欲しいんだが」

「まあちよつと聞いてくれ。Bクラスとの協定は無視していいのか？ 一応奴等とは今から明日の午前九時までは“試召戦争に関する一切の行為を禁止”するつて結んでいる筈だが。俺達がCクラスと協定を結んだつて事を、もしBクラスに知られたらどうするんだ？」

「……………それは俺も考えてはいたが、Cクラスの行動を無視する事は出来ないからな。あくまで俺達FクラスとBクラスの中での話だ。Cクラスはそんな事をしているのは知らないだろう。たとえばBクラスに何か言われたとしても黙つてればいいだけだしな」

「……………」

坂本の返答に俺は未だに納得出来なかった。けど坂本の言つたとおりCクラスは無視出来ないし、Bクラスとの協定と言っても口約束に過ぎない。白を切ればそれで終わるだろう。

だが……………本当にそれで大丈夫なのだろうか。

「まだ納得してないみたいだが、取り敢えず天城もCクラスに行くぞ」

「……………ああ」

俺は洪々と坂本達と一緒にCクラスに行こうとするが……。

「秀吉は念の為ここに残ってくれ」

「ん？ 何じゃ？ ワシは行かなくて良いのか？」

坂本は秀吉に待機の指示を出した。やはり坂本も後々の事を考えているみたいだな。

「お前の顔を見せると、万が一の場合にやろうとしている作戦に支障があるんでな。俺も天城と同様に多少の不安があるからな」

「よく分からんが、雄二がそう言うのであれば従おう」

素直に引き下がる秀吉。万が一と言う事はCクラスに何かをやるって事か。まあ考えがあるなら俺は何も言わんが。

「じゃ、行こうか。ちょっと人数少なくて不安だけど」

秀吉を残して、明久、坂本、姫路、土屋、そして俺がCクラスへと向かう。

と、その時……。

「吉井、アンタの振り返り血こびり付いて洗うの大変だったんだけど。どうしてくれんのよ」

「それって吉井が悪いのか？」

廊下に出ると、ハンカチで手を拭っている島田と鞆を肩に担いでいる須川に会った。

つてか島田、返り血が付いたのをあたかも明久の所為にしているが、そうだったのはお前だろうが。

「あ、島田さんに須川君。丁度良かった。Ｃクラスまで付き合つてよ」

明久も明久でさっきの出来事を忘れているかのように島田に話しかけている。お前は島田にやられた事に対して何とも思わないのか？ 普通はあんな事されて話しかけないと思うんだが。

「んー、別に良いけど？」

「ああ。俺も大丈夫だ」

須川はともかく、島田もさっきの事を忘れているかのように明久の誘いを承諾する。

……………何でこの明久と島田はこんな仲良さげに話せるんだ？ おかしくないか？ 本当にさっきまでの虐殺を忘れているのか？

「……………」

「どうかしたか、天城？」

明久と島田の会話を見ている俺に坂本が声を掛けてくる。

「……………坂本、明久と島田は去年からああなのか？」

「そうだな。あの二人は事が済んだら、何も無かったかの様な感じで普通に話しているぞ」

「……………理解出来ん」

「ま、明久はバカだから、何でも自分が悪いと決めて甘んじているからな」

「……………そのバカである明久を利用して陥れている奴は俺に何度も説教されているがな。懲りずに何度も、ね」

「……………」

俺の突っ込みに坂本は何も言い返す事が出来ずに目を逸らすのであった。

島田と須川を加えた俺達七人はCクラスへと着いた。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

教室の扉を開いて早々に坂本は大きな声を出して告げる。

Cクラスの教室には帰っている生徒が余りおらず、かなりの人数が残っていた。やはり土屋の情報通り、漁夫の利を狙って試召戦争の準備をしているな。

しかし分からんな。何故Cクラスはこんなに早く試召戦争をやろうとしている？ 俺達Fクラス側は設備が酷い理由で入学早々に試召戦争をやっているのだが、Cクラスにそんな理由は無い筈だ。もしやるとしても召喚獣の操作が慣れるまで時間を置いて挑もうとするのだが。

「私だけど、何か用かしら？」

俺達の前に出てきたのは黒髪のベリーショートにした気が強そうな女子だ。確か小山友香だったか？ バレー部のホープとか呼ばれているみたいだが。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？ ふうん……」

坂本の問いに小山はいやらしい笑みを浮かべている。俺の勝手な予想だが、コイツはあまり性格が良く無さそうだ。

あの笑みなんか根本に似ていそうで……………ん？ ちょっと待て、去年の俺のクラスメイトの女子が小山は彼氏がいるって聞いた事があったな。確かその彼氏は……………ハッ！ 不味い！

「ああ。不可侵条約を……………」

「待て坂本！！ それ以上は言うな！！」

「ん？ どうした天城？」

俺が坂本が言っている最中に大声を出して遮ったが…………。

「不可侵条約ねえ…………。どうしようかしらね、根本くん？」

チツ！ やはり聞こえていたか！！

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

「なっ！？ 根本君！ Bクラスの君がどうしてこんな所に！」

Bクラス代表の根本がいきなり出てきた事によって、明久は驚愕の声を出す。

やはり根本が潜んでいたか……………小山の彼氏である根本が俺達Fクラスに協定を結んだ理由はこの為だったか。

「酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。師匠戦争に関する行為を一切禁止したよな？」

「何を言って……」

「先に協定を破ったのはソツチだからな？　これはお互い様、だよな！」

明久の言葉を見無視した根本が告げると同時に、他のBクラス生徒達が動き出した。その中には和人もいる。アイツが言った『この後』とはこう言う事だったみたいだな。

和人は俺を見て申し訳無さそうな顔をしているが、今はそんな事に気にしている場合じゃない……げっ！　数学の長谷川先生を連れて来ているのかよ！　よりもよって俺の苦手科目で……。

「長谷川先生！　Bクラス芳野^{よしの}が召喚を……」

「させるか！　Fクラス須川が受けて立つ！　試獣^{サモン}召喚！」

Bクラス芳野が坂本に対して攻撃を仕掛けようとした所を、間一髪で須川が身代わりになった。良い判断だ。もし代表の坂本がやられたらFクラスの敗北が決定するからな。

「僕等は協定違反なんてしていない！　これはCクラスとFクラスの……」

「無駄だ明久！　コイツ相手にそんな言い訳は通用しない！」

「天城の言つとおりだ！　根本は条文の『試召戦争に関する一切の行為』を盾に白を切るに決まっている！」

「ま、そゆこと」

あのヤロウ、こうなる事が分かっていたくせに抜け抜けと……！

「屁理屈だ！」

「屁理屈も立派な理屈の内ってな」

「明久！ 天城！ ここは逃げるぞ！」

「ちっ！」

「くそっ！」

坂本の台詞に俺と明久は戦闘中の須川に背を向けて、Cクラスから離脱しようと駆け出す。

『Fクラス 須川亮 数学 41点

VS

Bクラス 芳野孝之 数学 161点』

「逃がすな！ 坂本を討ち取れ！ 佐伯！ お前は天城を討ち取るんだ！」

背後から聞こえてくる根本の指示と複数の足音。おまけに和人を使って俺を倒そうとしてやがる。アイツの事だ、倒されるなら幼馴染の方が良いだろうと思って指示したに違いない。

ハッキリ言ってこれは本当に不味い。今のFクラスでBクラスを相手をするのは無理で、一番の戦力である姫路も数学の点数は消費している。恐らく根本は廊下戦で姫路が数学を消費していると知ったから長谷川先生を呼んだんだろう。卑劣な手で癪に障るが効果的な事には間違いない。

「はあ、ふう……」

「姫路、大丈夫か？」

俺達が廊下を走っている最中に姫路が遅れ始めた。大して運動神経が無い上に体が弱いのが、全力疾走は厳しい筈だ。

「あ、あの、さ、先に……行つて、ください……」

息が物凄く上がっている姫路が言う。このまま姫路を連れていたら確実に追いつかれてしまう。だからと言って、ここで姫路を戦死させる訳にはいかない。姫路がいなかったら明日の試召戦争での勝率が大幅に下がるし、明久の事だから女の子を見捨てる事は出来ないと考えている筈だ。アイツは前からそう言う奴だからな。

「雄二！ シュウ！」

「なんだ明久！」

「いきなりどうした？」

明久の大声に坂本と俺が言い返すと、明久は立ち止まって……。

「ここは僕が引き受ける！ 雄二とシユウは姫路さんを連れて逃げてくれ！」

自ら殿しんがりの役を立候補した。

やはりそう来たか。お前って本当に誰かの為に自分を犠牲にする奴だな。

「よ、吉井君、私の事は、気に、しないで……」

「……分かった。ここはお前に任せる」

姫路の言葉を遮って、坂本がそう応える。坂本も今のままだと姫路がやられると思ったから明久の提案を承諾したのだろう。

「……………（ピタッ）」

「いや、ムツツリーニも逃げて欲しい。多分明日はムツツリーニが戦争の鍵を握るから」

一緒に立ち止まる土屋であったが、逃げるように言う明久。

「んじゃ、ウチは残っていいのかしら、隊長どの？」

「……………頼めるかな？」

「はいはい。お任せあれっと」

明久の隣に立って一緒に殿をやるうとする島田に、明久が頼む。

「……………（グッ）」

土屋は明久に親指を立てながら走り去っていった。

「で、明久。お前が殿を務めるなら、当然何か策があるからなんだろう?」

「うん。僕に考えがある……ってシュウ! 何で君は逃げないの!」

「お前だけに任せると何か失敗しそうな気がしてな。折角だから俺も付き合わせてもらおうよ」

残っている俺に明久は驚いているが、俺はあまり気にしないように言い返す。

「……………僕ってそんなに信用無い?」

「いつもここぞと言う時に失敗しては、俺にいつもフォローされているのは誰かな? 必要ないんだったら俺はこのまま逃げるが?」

「……………お願いします。どうか僕と一緒に残って下さい」

俺の言葉が聞いたのか、明久は俺に残ってくれと言ってきた。

「素直でよろしい。と言う訳で島田、俺も残らせてもらっからな」

「……………あっそう。勝手にすれば」

島田は面白く無さそうな顔をしながら背ける。大方、俺がいる事に

明久と二人だけで戦うのが出来ない事に不満なんだろう。それに試召戦争中に俺が説教した件もあってか、俺の顔をまともに見ようとするしない。

まあ俺としては今はそんな事どうでもいいので、取り敢えず向かって来るBクラスの方に意識を集中する。

と、その時……。

「漸く追いついたよ、修哉」

俺達の目の前にいきなり和人が現れた。

「和人……」

「うわっ！ いつの間に!？」

「アンタいつからそこにいたのよ!？」

和人のいきなりの登場に俺は大して驚いていないが、明久と島田は物凄く驚いた顔をしながら和人を見ている。

相変わらず神出鬼没な奴だな。他のBクラスより先に行って一番に着いたんだろう。以前から和人はいきなり現れては姿を消したりしているから、俺はもういつもの事だと思ってもう慣れている。

「さて修哉、根本に指示通り俺と相手をしてもらうよ」

「何よソレ！ まるでウチと吉井は眼中に無い言い方ね!!」

「おつと失礼。そう言う風に言つたつもりは無いんだが、そう捉えてしまったなら謝罪するよ。申し訳無い」

「なっ……………」

島田の憤りに和人は訂正しながら手を胸に当てて頭を下げる。その事に島田は和人の突然の謝罪に大きく戸惑って顔を赤らめた。

コイツは試召戦争中で女子が敵であつても優しく接するんだな。感心するか呆れるべきか……そんなのはどっちでも良いか。

けど……。

「……………やっぱり佐伯君は僕の敵だ」

明久は小声で言いながら和人を目の敵にしている。女子にモテる和人に、その逆である明久にとっては男の敵と認識している。

「ねえシュウ、佐伯君は僕が相手していいかな？ 今だつたら佐伯君を倒せるかもしれない」

「バカ。今のお前じゃ和人の相手にならん」

「修哉の言うとおりだぞ、吉井。そんな怒り狂つた状態で俺に襲い掛かっても無駄だ。お前は以前から俺に突進して来ては、勝手に自滅しているんだからな」

「……………佐伯君はともかく……酷いよ、シュウ」

明久が黒いオーラを出して笑みを浮かべながら俺に和人の相手をさ

せろと言つが、俺だけでなく和人にも無理だと言い返されていじけてしまった。

和人とそんなやり取りをしている時……。

『いたぞつ！ Fクラスの吉井と島田と天城だ！』

『ぶち殺せ！』

『佐伯くゝん！ 私達が掩護するわゝ！！』

和人以外の追つ手が追いついて来た。長谷川先生も一緒だ。

やっぱり数学で相手をしなければいけないか。和人は俺と違って数学が得意だから、こっちはかなり不利だ。おまけに他の追つてもいるからな。まあそんな事を言ってる場合じゃないから、やるだけやるしかない。

「Bクラス！　そこで止まるんだ！」

と、俺が召喚獣を出そうと思った矢先に明久が突然大きな声を出して、Bクラスを呼び止めた。

「良い度胸だ。たった三人で食い止めようつてのか？」

「いや、その前に長谷川先生に話がある」

長谷川先生だと？　一体何を話すつもりだ？

「何ですか、吉井君」

明久に呼ばれた事で長谷川先生が前に出てきた。

「Bクラスが協定違反をしている事はご存知ですか？」

どうやら明久は審判である長谷川先生に違反の事について訴えるつもりみたいだな。

「話を聞く限り、休戦協定を破ったのはFクラスのようにですね。そこで反撃を受けて協定違反を訴えるのは、戦争云々以前に人としてどうかと思いますよ」

やはり長谷川先生は根本に前もって言い包められたみたいだな。根本自身が仕組んだ事は伏せて、全てFクラスが悪いように説明したに違いない。

さて、ここまでは予想通りの返答だ。果たして明久はどんな風に言い返すのやら。

島田も島田で明久に期待するかのよう片目を瞑っている。

そして……。

「……万策、尽きたか……」

『コイツ馬鹿だあーっ！』

明久の台詞に此処にいる全員が明久を罵倒するのであった。

コイツは本当にもう……………バカだ。和人も完全に呆れ顔だよ。

とは言え、俺は明久のバカな行動は既に予想していた。此処は俺が出て何とかしよう。

まだ戦闘前だから此処でBクラスと戦わずに済むかもしれないからな。

「あー、明久のバカは放って置いて下さい。長谷川先生、俺から話があります」

「何でしょうか、天城君」

俺が前に出ると長谷川先生はこっちを向いて来る。俺を見て今度はちゃんとした回答を持って言うのだろうと思って真面目な顔をしていた。

「長谷川先生は根本から話を聞いたんですよ？」

「ええ。根本君がFクラスは自分達Bクラスが提案した協定を破ったと言われて私が来ました」

「それは根本本人がちゃんと言ったんですか？」

「勿論です」

「ふむ……………」

俺の質問にBクラスは『何言ってるんだコイツ？』みたいな顔をしている……………和人は何か期待していそうな顔をしているが。

「質問はそれだけですか？」

「いえ、まだ他にもあります。長谷川先生は根本に言われて、一緒にCクラスに潜んでいましたね？」

「そうです」

「根本が俺達FクラスがCクラスに協定を結ぼうとしていたのを見て、違反だと判明して戦争の承認をしたんですよね？」

「ええ……………と言うか天城君。どうしてそう言う質問をするのですか？ 私には全く理解出来ないのですが」

長谷川先生は俺の質問の意図が分からず、一体何を聞いているのだと不思議な顔をしている。他のBクラス生徒達も同様だ。

だが……………。

「……………ふふふ、成程ねえ。流石は修哉だ」

和人が小声で呟いていた。どうやら和人は感じているみたいだな。

だがまだ続けさせてもらっぞ。

「おかしいとは思いませんか？ 俺達がやろうとしていたのはFクラスとCクラス内での協定です。ではどうしてBクラス代表である根本は俺達FクラスがCクラスに協定を結ぼうとしている事を何処で知ったんですか？」

『！！！！！！』

俺の質問に長谷川先生と明久や島田、そしてBクラス生徒達は俺の質問の意図が分かった途端に驚愕した……………和人だけは笑みを浮かべていたが。

「それは……………確かに妙ですね。どうして根本君は知っていたんでしょうか」

「何処からか情報が漏れない限り知る事は出来ません。当然FクラスはBクラスにそんな事教えてはいません。何しろCクラスとの協定は試召戦争を中断してすぐに代表の坂本が急遽考えた物ですから」

「ふむ……………」

「もしかしたら……………Cクラスは根本から情報を得て、俺達Fクラスが協定を結ぼうと前もって知っていたんじゃないでしょうか？ そうでなければ、Bクラス達がCクラスの教室に潜んではいませんかね」

「そうですね。考えてみれば天城君の言うとおり、Bクラスがどうして知っているのが引っ掛かります」

長谷川先生が俺の言葉に頷くと、Bクラス達是不味いと言うような顔をしている。和人は未だに笑みを浮かべているが。

と、その時……。

「長谷川先生！！ ソイツの言っている事は出鱈目です！！」

根本が急に現れては長谷川先生に出鱈目とデカイ声で言うて来た。

態々自分から来てくれるとはな…… 手間が省けたよ、根本。

「しかし根本君、天城君の話を聞く限り、君はどうやってFクラスがCクラスに協定を結ぼうと知っていたのですか？」

「そ…それは……」

「私が君から聞いた話では、Fクラスが先に協定を破ったと言われて来たんです。これはどう言う事ですか？」

「あ……いや……その……」

根本は長谷川先生の質問に返答する事が出来ないみたいだ。だが根本、まだ追い詰めさせてもらっぞ。

「そう言えば根本、お前は付き合っている女子がいたよな？」

「そ…それがどうした！？」

「確か俺の記憶によれば、根本が付き合っている彼女って………Cクラス代表の小山友香じゃなかったか？」

「なっ!？」

何で知っているんだ!？　と言うような顔をしているな。まあそんな事はどうでもいい。

「もしかしてお前は、彼女である小山と結託していたんじゃないか？　そうでなければＣクラスがいきなり試召戦争をやるだなんて言い出さないし、俺達ＦクラスがＢクラスとの間に結んだ協定は知らない筈だからな。さあ、何か言い返すことはあるか？　俺の言っている事が何処か間違っていたら教えてくれ」

「う……………あ……………」

顔を青褪めている根本は完全に追い詰められている。

「何も言い返さないと言う事は事実みたいだな。長谷川先生、どうやら根本がＦクラスより先に協定を破っているみたいです」

「そのようですね。では根本君、Ｃクラス代表の小山さんと一緒に話を聞かせて貰いましょうか？」

「……………こ……………今回の出来事は無かった事にして下さい!！」

そう言った根本は早々に去って行くのであった。

そして……………。

『おい根本！　自分だけ逃げようとするな!!』

他のBクラス生徒達も根本に続いて去って行った……和人だけは残っている。

「やれやれ、逃げた所で後日聞くんもりなんですが」

「長谷川先生、そんな事をする必要はありません。それは俺達の方で処理しますので」

「そうですか。では私はこれで失礼します。それと疑ってすいませんでしたね、天城君」

「いえいえ、お気になさらず」

「ではこれにて」

長谷川先生がそう言って職員室へと戻っていった。

「す……凄いやシュウ！！ あんな土壇場で逆転するなんて！！」

「アンタ一体どんな手品を使ったのよ！？」

先程まで呆然としていた明久と島田が急に息を吹き返したかのように、俺を問い詰めるかのように言ってくる。

「落ち着け二人とも」

「これが落ち着いている訳無いでしょ！！ だってシュウは戦う前からBクラスを退かせたんだから！」

「さっさと教えなさいよ！！」

あーもう、この二人は………落ち着いて話しをする事が出来ないな。
と、その時……。

パチパチパチパチッ！

「いやゝ流石だったよ、修哉。見事な大逆転だったよ」

「「！！！！」」

「和人、お前いたのか」

和人は拍手をしながら俺に賛辞の言葉を述べた。その事に明久と島田は驚きながら和人を見ている。

「根本を見てて滑稽だったよ。修哉にあそこまで言われて何も言い返せなくなっただから。笑いを抑えるのが大変だった」

「あのな………俺はお前の代表である根本を追い詰めたんだぞ？
普通は同じクラスメイトとして助ける筈だが？」

「生憎、俺はあんな卑怯な手段でしか勝てない小物を助ける気は無い」

「「なっ！？」」

同じクラスメイトだと言うのに根本を小物扱いする和人に、明久と

島田は驚く。

「だとしても、あそこでお前が助けなければ要らぬ疑いを掛けられるんじゃないのか？ 俺とお前が幼馴染だって事を根本はもう知ってるし」

「あの状況で言い返せなかったら、俺が助けた所で勝手に自滅しそうだったからな。だから敢えて助けなかった」

「そうかい……で、和人がまだ此処にいるって事は、俺に用があるのか？」

「用が無ければいちゃダメなのかい？ つれないねえ、修哉は」

「別にそんな事は言っていないが……と言うか戻ったほうが良いと思うぞ。遅れて戻ってきたら根本が何を言い出すか分からんし」

「それもそうだね。では戻るとしよう。じゃあまた明日の試召戦争で会おう。吉井、島田さん、失礼するよ」

「あ……うん」

「え……ええ」

和人は俺達に別れを告げると、ゆったりと教室へ戻るが……。

「ああ修哉、言い忘れてた。明日の試召戦争で俺は真っ先にお前と戦うからな。無論、正々堂々の勝負だ」

「そうか。だからと言って数学で挑まれるのは御免だが」

「そんなアンフェアな真似はしない。お互い得意科目である英語で勝負だ。じゃあな」

俺に対する宣戦布告を言つて去つて行つた。

「やれやれ、真つ先に勝負を挑まれるとは……」

「……………」

「どうした二人とも？」

無言になっている明久と島田に俺が問いかける。

「いや……佐伯君の事は前から知つてたけど……あんなにハッキリとシュウに正々堂々な発言をすると……」

「意外ね。Bクラスの代表が根本だから、てつきり卑怯な事をする奴だと思つていたけど……」

「和人は真つ向勝負を好む奴だからな。特に俺との勝負は……まあそんな事より、取り敢えず教室に戻つて坂本に報告だ。行くぞ」

「そ…そうだね」

「ええ……って何でアンタが仕切るのよ」

そして俺と明久と島田は教室に戻るのであつた。

第十一問

バカテスト 英語

問 以下の問いに答えなさい

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

『good | better | best
bad | worse | worst』

天城修哉の答え

『good | better | best
bad | worse | worst』

教師のコメント
その通りです。

吉井明久の答え

『good | gooder | goodest』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。Goodやbadの比較級と最上級は語尾に-erや-estを付けるだけではダメです。覚えておきましょう

土屋康太の答え

『 b a d | b u t t e r | b u s t 』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

俺と明久と島田が教室に戻っている最中の事。

「突然だが明久、ちょっと聞いてもいいか？」

「なんだい？」

「もし俺が残らずに、Bクラスと戦う事になったらどうやって切り抜けようとした？」

俺のちょっとした質問に明久は……。

「その時は逃げる事に専念して島田さんに消火器を使わせよう」と……
「」

「……………それは本人がいる時に言う台詞じゃないな」

「あ……………」

「……………吉井、アンタ今度は本当にウチを実行犯にさせようと考えていたみたいね」

安心しきって思わずボロを出してしまい、俺はともかく島田は怒った顔をしていた。

「ご…ゴメン島田さん！」

「どうやらアンタはもう一回お仕置きをした方がよさそうね」

ボキボキと指の骨を鳴らして明久に近づこうとする島田。

どうやら俺は余計な事を聞いてしまったようだ。ここは俺が責任を持って対処しよう。

「島田、ここで明久を殴るなら、俺はお前を気絶させてでも止めるぞ。それが嫌なら拳を引っ込める事だな」

「……………」

俺が本気だと思わせる雰囲気を出すと、島田は拳を引っ込め……。

「……………吉井、許す代わりにウチの言う事を聞いてもらっわよ？」

「は…はい！ 僕に出来る事なら何なりと！」

許す条件を出すと、明久は即座に答えた。少しは利口になったみたいだな。

「それじゃ、先ずは呼び方から変えてもらいましょうか」

「変える！ 変えさせて頂きます！」

「じゃ、今後ウチはアンタの事を『アキ』って呼ぶから、アンタはウチの事を『美波様』って呼ぶように」

「み、美波様！ これでいい！？」

「……………」

俺は島田の呼び方に少しばかり呆れた。『美波様』ってお前、女王様気取りでもしたいのか？

「今度の休み、駅前『ラ・ペデイス』でクレープ食べたいな」

「おのれ！ 僕が塩水で生活していると言っのに何と言っ贅沢を……って！ お……奢ります！ 奢らせて頂きますから殴ろうとしないで下さい美波様！」

呼び方の次は集りか……断ったら殴ろうとする脅しは気に食わんが、まあそれぐらいは見逃してやろう。

「よろしい。じゃ、最後に」

「まだあるの！？ もういいでしょう！？」

何か段々調子に乗り始めてきているな。そろそろ止めるか？

俺が割って入ろうとしたが……。

「ウチの事を愛してるって、言ってみて！」

「ウチの事を愛してる！」

「……………」

……………急にやる気が失せたので、俺はさっさと教室に戻った。

「戻ったぞ」

「ん？ って天城！ 戻って来るの早くないか！？」

俺が教室に入ると坂本を始め、秀吉達も俺を見て驚いている。

「Bクラスと廊下で戦う前に退けさせたからな。だからこんなに早く帰ってこれた」

「何だと！？」

俺の言葉に坂本達は驚愕の顔をしていた。

「おい天城、それは一体どう言う……」

「天城君！ 吉井君はどうしたんですか！？」

坂本が俺にどうやったかを聞こうとしたが、姫路が突然俺に詰め寄ってきた。

「吉井君が此処にいないって事は……まさか！」

「落ち着け、姫路。明久と島田も今戻ってくる。ほら、丁度いいタイミングで戻って来た」

「え？」

姫路が俺の後ろを見ると……。

「何か疲れた感じがする」

「よ、吉井君！ 無事だったんですね！」

戸が開いて明久が教室に入ってくると、姫路がすぐに明久へと駆け寄った。

そんな姫路に明久は鼻の下を伸ばしていた……姫路の揺れている大きな胸を見て。

「うん。今回はシュウのおかげでいдаあっ！」

「ふんっ！」

姫路の胸に見とれていた明久に島田が、明久の爪先を思いつきり踏んだ。

おい島田、そんな事で嫉妬するなよ。心が狭い奴だと思われるぞ。

「し、島田さん、僕が何か悪い事でも……」

「（キツ！）」

「あ。い、いや。美波」

射殺するような眼光で睨んでいる島田に、明久は怯みながらも島田を名前で呼んだ……様付けはしなかったみたいだが。

まあ本人も何も言わないって事は気にしていないんだろう。

「……随分二人とも仲良くなったみたいですね？」

「え？　これで？」

明久と島田のやり取りに、姫路は面白く無さそうな顔をして見ていた。

何だ。姫路の方も明久の事が気になるみたいだな。良かったな明久、片思いじゃなくて。

「お。明久と島田も戻ったか。お疲れさん」

「お主等も無事じゃったようじゃな」

「ん。ただいま……と言っても、僕達は何もしていないんだけどね」
坂本と秀吉も明久に労いの言葉を掛けながら寄っている。土屋の方も明久を見て小さく頷いていた。

そして……。

「さて天城、聞かせてもらおうか。お前が言った戦う前にBクラスを退けたって事をな」

「修哉よ、お主はどうやってBクラスを退かせたのじゃ？」

「……俺も聞きたい」

「わ……私も聞かせて下さい」

明久と島田を除くFクラス全員が俺の方を見てきた。

「分かった。では説明しよう」

「ホントに凄かったんだから！ シュウがいなかったら僕達やられてたかもしれないからね！」

「ウチは手品かと思っ たわよ」

「明久と島田、知っているとは言え少し静かにしてくれ」

坂本が二人を静かにさせると、俺は廊下での出来事を説明し始めた。

説明して5分後

「と言う訳だ」

「成程な……その手があったか。俺とした事が焦ってて考えていなかったな。それに根本がCクラス代表の小山とそんな関係だったとは……よく知ってたな、天城」

「去年のクラスメイトが言ってたのを思い出してな」

坂本が俺に賛辞を呈すると……。

「凄いのじゃ修哉！」

「……見事」

「す……凄いですね、天城君。私にはとても出来ません」

秀吉、土屋、姫路も感心しながら賛辞を呈した。何か妙に照れ臭くなるな。別にそんな凄い事じゃないんだが……まあいいか。

「明久が戦闘を始める前に長谷川先生を呼んでくれたから戦わずに済んだしな」

「うんうん、僕のお蔭で助かったんだよね」

「調子に乗るな、明久。俺がいなかったら、あのままBクラスと戦う事になっていただろうが」

「……………ゴメン」

明久が調子づく前に釘を刺しておく。こうでも言わなければ明久は天狗になるからな。

「とは言え、坂本。Bクラスと戦うのを明日に持ち越して勝ったとしても、今度はCクラスが即行で仕掛けるぞ」

「そうだな。同盟戦が無い以上は連戦と言う形になるだろうが、正直Bクラス戦の直後にCクラス戦はきつい……………ってか天城、長谷川先生にCクラス代表を問い詰める必要は無いって説明の際に言ってたが、何でやらなかった？」

「お前の事だ、Cクラスが敵になった際の対処を既に考えているんだろう？ 長谷川先生に任せるより小山をもっと無様にする方法を……………」

「え？ そうなの、雄二？」

俺の台詞に明久が坂本に問いかけると……………。

「……………よく分かってるじゃねえか」

坂本が正解と言わんばかりの顔をしながら感心していた。

「で、Cクラスをどうするつもりだ？」

「それは明日の朝に説明して実行する。目には目を、な」

そして続きは翌日へと持ち越しになった。

その頃、Bクラスでは

さて、根本の様子は……………おやおや。

「くそっ！ くそっ！ くそっ！ Fクラス風情がよくもこの俺に
恥を……………！」

教室に戻ると、根本は地団太を踏みながら喚き散らしていた。他の

Bクラス達は根本に八つ当たりをされたくないのか、遠目で見て
いる。

「随分と荒れているなあゝ根本」

「五月蠅いぞ佐伯!!」

根本は戻って来た俺に早々八つ当たり染みた怒鳴り声を出してきた。
これは修哉の予想通り、何か突拍子も無い事を言いそうだな。

「作戦が失敗したからと言って、そんなに怒鳴り散らすなよ。たっ
た一回失敗した位で……」

「どう言う事だ!! お前から聞いた情報とは全く違うじゃないか
!?!」

俺が言ってる最中だと言うのに聞く耳持たない状態だな。

「何がだ?」

「惚けるな!! お前の幼馴染である天城の事についてだ!!」

「俺は嘘を吐いてはいないんだが……」

「佐伯の情報では、『天城は前衛で戦う事のしか出来ない能無し』
だっって言ってたろうが!!」

「……………俺はそんな風に言った覚えは無い。『修哉は基本的
に真っ向勝負で挑む前衛タイプだ』って言ったんだ。誰も能無しだ
なんて一言も言っていない」

情報を歪めないで欲しいものだ。何で俺が修哉を罵倒したかのような情報になっている。不愉快だな。

「じゃあさっきのアレは何だったんだ！？ お前の言った前衛タイプが何故あそこまで頭が回る！？」

「あんなの冷静に考えれば、誰でも出来るだろう」

「Fクラスにそこまで考える連中なんかいなだろうが！！」

「修哉は考えてたぞ？ ってかさっきも言ったが怒鳴り散らすな。耳が響く」

こんな近くで怒鳴られたら鼓膜が破れそうだ。現に他の連中も耳を塞いでいるし。

「それにお前、あたかも俺の所為みたいな言い方をしているな」

「当たり前だ！ じゃなかったら、天城が俺と友香が付き合っているって情報を何処で知ったんだ！？ ソレを知った所為で俺は数学の長谷川に……………！」

根本はそんな事を気にせずにもた怒鳴る。

おいおい、俺は修哉にそんな事を教えた覚えは無いんだが。それと教師を呼び捨てにするのはどうかと思うぞ。

「知るか。修哉が何処かで聞いたんだろ？ それと自分の失態を人の所為にするな。見苦しいにも程がある」

「そうさせたのはお前だろうが!!」

「だから俺は修哉にお前の事について何も教えてない。俺は根本の指示通りに動いて……」

「信用出来るか!! 勝手な事をした佐伯には罰を与える!!」

……もう小物に何を言っても無駄だな。いい加減に俺も我慢出来なくなりそうだ。

「俺を信用して欲しかったら、明日の試召戦争では天城を容赦なく叩き潰しガアッ!!」

「……………黙れ」

根本が喋っている最中に俺は首を片手で掴む。その事に他のBクラス達は驚いているが、今はそんな事どうでもいい。

「俺はお前の指示通り動いているし、修哉に何も情報は与えていない。それなのに……」

「あ……………がが……………」

「人を勝手に密告者扱いするわ、罰を与えとか……………お前は何様のつもりだ?」

少々声を低くしながら殺気を出しているが、根本は余り聞いておらず俺の腕から逃れようと抵抗している。

これでは話が出来ないな。放してやるか。

「ゴホッ！　ゴホッ！　さ…佐伯！！　何のつもり……ヒイツ！！」

根本は俺の顔を見た途端に腰を抜かして尻餅を付いている。だがそんな事はどうでもいい。

「根本、余り調子に乗らないでもらおうか。俺はお前がBクラスの代表だから従っているに過ぎない。だがな、自分の失態を俺に押し付けて罰を与えようとするのは従えないな」

「あ……あ………」

「そんな事をする暇があるなら、明日のFクラスとの試召戦争で勝つ為の策でも考えているんだな。それと余り俺を怒らせようとするなよ？　ただでさえ試召戦争中にやった貴様の行動は不愉快だと言うのに、これ以上勝手な事を言うなら………お前が振り分け試験の際にやったカンニングを教師に報告するぞ」

「！！！！！！」

俺が根本にしか聞こえないように言うと、奴は顔を青褪めた。

おいおい、適当に言っ たつもりだったんだが………まさか大当たりとはな。まあそんな事はどうでもいいか。

「な…何でお前がそれを………」

「そんな事を気にしている場合か？　………さあどうする？」

根本に問いかけると……。

「……わ…悪かった、佐伯。俺とした事が調子に乗り過ぎてた……」

流石にカンニングした事をバラして欲しくない為か、すぐに謝罪してきた。

立場が悪くなるとすぐ保身に走るか………とは言え、もしカンニングを教師に知られたら根本は代表じゃなくなり、それなりの重い処分も下されると思ったからこそ、こんな行動に出たのだろう。

根本は将来、己の地位を守る為なら何だってする悪党に成り下がりそうだな。

「そうか。なら明日の試召戦争で俺は即行で前衛に行かせてもらおうぞ」

「も…勿論だ。好きにしてくれ」

よし、これで修哉と戦う準備が出来た。

後は怖がらせてしまった根本以外のBクラス達に謝罪とお願いをすれば良いだけだ。ふふふ……修哉、明日が楽しみだよ。

そして翌日

「昨日、天城に言った作戦を実行する」

現在、午前八時半過ぎ。既に登校済みの俺達に坂本は開口一番にそう告げた。さて、坂本はどんな作戦を実行するのやら。

「作戦？ でも、開戦時刻はまだだよ？」

明久は今日の九時に開始するBクラス戦の事を言っているのだろう。と言うか明久、お前は昨日俺が言ってた事を忘れてるのか？

坂本も明久の見当違いな発言に呆れている。

「Bクラス相手じゃない。Cクラスの方だ」

「あ、成程。それで何をすんの？」

「秀吉にコイツを着てもらう」

そう言つて坂本が鞆から取り出したのは俺達の学校の女子の制服だった。

…………… 待て坂本、作戦を行う以前に、その制服は何処で手に入れたんだ？ 男のお前が女子の制服を持ってたら危険な感じがするんだが？

明久も俺と同様に坂本を信じられないような目で見ているし。一体坂本に何があつたんだ？

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするのじゃ？」

待て待て秀吉、そこは構うだろうが。男のお前が女装する事に何の抵抗は感じないのか？

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらう」

…………… おいおい、秀吉を女装させて姉の木下を利用する気かよ。

確かに秀吉と木下は一卵性双生児かと思うほどよく似ており、違う個所と言えばテストの点数と話し方だ。

だからと言って秀吉を木下に化けてAクラスとして圧力をかけるのはどうかと思うんだが…………… やっぱり長谷川先生にCクラスを問い

詰めさせた方が良かった様な気がして後悔し始めて来た。

「と、言う訳で秀吉。用意してくれ」

「う、うむ」

坂本から制服を受け取り、その場で着替えようとした秀吉であったが……。

「待て秀吉」

「何じゃ？」

俺が待ったをかけて秀吉に近づいた。

「秀吉、その隅っこで着替える。坂本、俺と一緒に秀吉が見えないよう壁になれ」

「あ……ああ。それは構わないが」

俺の指示に秀吉は隅っこに立って着替え始め、俺と坂本は相手に見せないように壁として立った。

その事に……。

「シュウ！ 何やってるんだよ！！」

「……そこをどけ！！」

『そつだそつだ！！』

案の定と言すべきか、俺と坂本を除く男子が一斉に抗議して来た。土屋、お前は何かカメラを持っているんだ？　それで秀吉を撮るつもりか？

「おい天城、何でコイツ等はあんなってんだ？　ってか俺とお前が壁になる必要があるのか？」

「奴等を見ると何故か危険な感じがした。それだけだ」

俺と坂本が男子達の抗議を無視していると……。

「よし、着替え終わったぞい。ん？　皆どうした？　と言うより修哉よ、ワシの着替えにそんな事をする必要があつたのかの？」

秀吉が着替えを終えたみたいだ。

「さあな？　俺にもよく分からん」

「気にするな、秀吉」

「おかしな連中じゃのう」

着替えを終えた秀吉が前に出ると、女子の制服を見た秀吉に男子達は複雑な表情をしていた。

それと同時に……。

「……………無念！……！」

土屋がカメラを握りしめて物凄く悔しそうな顔をしていた。やつぱり着替え中の秀吉を撮ろうとしていたな。土屋の撮影行為を阻止出来て良かったかもしれん。

「んじゃ秀吉、Ｃクラスに行くぞ」

「うむ」

坂本が秀吉を連れて教室を出て行った。

「あ、僕も行くよ」

「俺も行く。何故か嫌な予感がするからな」

明久と俺は慌てて追いかける。

追いかけた俺と明久は坂本と秀吉と合流して暫く歩き、Ｃクラスを目の前にして立ち止まる。

「さて、ここからはすまないが一人で頼むぞ、秀吉」

秀吉が木下になってＡクラスの使者に成りすます以上は、Ｆクラスである俺達が同行するのは不味い。それにより、俺達は離れた場所から様子を窺う事にする。

俺としては本物の木下が来ない事を願うんだが。もし木下が此処に来てCクラスの様子を見てしまったら、間違いなく木下は秀吉にお仕置きをする筈だ。そうならない為に俺と一緒に付いて行つたのである。

「気が進まんのう」

あまり乗り気じゃない様子の秀吉。それは当然だ。もしこれが木下に知られたら絶対に折檻されるだろうと予想しているのだから。

それを知っているのは俺が以前、休日に秀吉から家に招待されて遊んでいる時の事だった。その時に木下が下着姿で秀吉の部屋に入ってきた事によって、木下は羞恥で顔が真っ赤になりながらも秀吉を何処かに連れ込んでお仕置きをしていた事があつたのだ。

あの時の木下を見て、弟には容赦しないタイプだと思った。それと同時に意外とルーズな所があるんだなと知ったら突然木下が現れて「もし学校に言ったらどうなるか分かつてるわよね？」と言われて口止めされた。正直アレは恐ろしく、絶対に口外しないと即座に誓った。

とまあ、そんな事があつたので俺は秀吉が木下に殺されないように一緒に来たのである。

「心配だなあ……」

「シツ。秀吉が教室に入るぞ」

おっと、秀吉がいつの間にか教室に入つたみたいだな。

ガラガラガラ

秀吉がCクラスの扉を開ける音が聞こえた。

そして……。

『静かになさい、この薄汚い豚ども!』

……おい、ちょっと待て秀吉。何だその挑発は？

「流石だな、秀吉」

「うん。これ以上は無い挑発だね」

「いやいや待て二人とも、それ以前に可笑しいとは思わないのか？」

確かにあんな挑発をすればCクラスの敵意はAクラスに変わるんだが……もしこの事が木下にバレたら秀吉は絶対にタダでは済まないだろう。

『な、何よアンタ!』

教室の中から高い声はCクラス代表の小山だな。顔を見なくても怒っている事が容易に想像出来る。そりゃあいきなり豚呼ばわりされ

たら、誰だつて怒る。

『話しかけないで！ 豚臭いわ！』

コラコラ秀吉、自分から話し掛けたのに豚臭いつてのは何だ？ つか木下つて普段からそんな事言ってるのか？ 突っ込み所が満載なんだが。

『アンタ、Aクラスの木下ね？ ちょっと点数良いからつていい気になってるんじゃないわよ！ 何の用よ！』

小山は女装している秀吉を木下と見事に勘違いしている。まあ知名度としては秀吉よりもAクラスの木下優子の方が高いからな。言うまでも無く小山は完全に騙されて冷静な判断力が無くなっている。あんまり賛同したくないが、見事な作戦である。

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！ 貴方達なんて豚小屋なんて充分だわ！』

『なっ！ 言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって！？』

待て小山、貴様は“Fクラス”豚小屋”つて方程式が成り立っているのか？ 確かに汚いが豚小屋は無いだろうが。

『手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴方達を相応しい教室に送つてあげようかと思うの』

……なあ秀吉、それは本当に木下が普段から家で言ってるのか？ もしそうなら俺は木下のイメージが物凄く変わって行くんだが。

『ちょうど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近い内に私達が薄汚い貴方達を始末してあげるから!』

女装した秀吉はそう言い残し、靴音をたてながら教室から出て来た。

「これで良かったかのう？」

何故か妙にスッキリした顔をした秀吉がこっちに近づいてくる。なあ秀吉、お前は普段から木下に不満があったのか？

「ああ。素晴らしい仕事だった」

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！ Aクラス戦の準備を始めるわよ!』

坂本が秀吉に労いの言葉をかけると、Cクラスの教室からは小山のヒステリックな叫び声が聞こえた。

………上手く行っただとは言え、根本と結託した小山に多少の罪悪感があるんだが。

「作戦も上手く言った事だし、俺達もBクラス戦の準備を始めるぞ」

「あ、うん」

そう行っただ坂本と明久はFクラスに戻り始めた。

「……………なあ秀吉、ちょっと聞いて良いか？」

「何じゃ？」

俺は坂本と明久と一緒に付いて行ってる秀吉に問いかける。

「木下って家では何時もあんな感じなのか？ 俺、木下に対するイメージがメチャクチャ変わったんだが……後で木下に聞いてみて良いか？」

「……………それは姉上に聞かないで欲しいのじゃ！」

俺の問いに秀吉は顔を青褪めて、俺の肩をガシツと掴んできて迫るかのように見てきた。

「お願いじゃ修哉！ この事を姉上には黙っていて欲しいのじゃ！」

「あのな…………俺が黙った所で、いずれ木下の耳に入ると思うんだが」

「……………」

追い討ちを掛けられたかのように秀吉はこの世の終わりみたいな顔をする。

そんな秀吉に俺は…………。

「……………ちゃんと木下に謝っておけよ。その時は俺もフォローしてやるから」

余りに気の毒すぎた感じがしたので助ける事にした。

「ほ…本当か修哉よ！」

「ああ。ってかそんなに顔を近づけなくても良いから」

「す…すまぬ」

秀吉はすぐに俺から離れて一緒に教室に戻るのであった。

けどこの時、俺と秀吉はまだ知らなかった。偶然見ていた生徒が俺と秀吉のやり取りを見て、さらに木下に誤解を招いた事に。

第十二問（前書き）

また無駄に長いです。

そして今回は修哉無双となっています。

第十二問

バカテスト 保健体育

問題 以下の問いに答えなさい

『女性は何（ ）を迎える事で第二次成長期になり、特有の体付きになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

天城修哉の答え

『思春期』

教師のコメント

惜しいです。間違っただけではありませんが、今回は女性に関する問題ですので不正解です。

本当に天城君は吉井君達とは違って、まともな間違いをするので先生は安心します。決してバカにしている訳ではありませんが、謝っておきます。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理の事を月経、初潮の事を初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が1.5kgに達する頃に初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳しくすぎです。

午前九時過ぎ、Bクラス戦が再会して早々に……。

「さあ修哉、始めようか」

「ああ、そうだな」

俺と和人は廊下で対峙していた。

「では遠藤先生、お願いします。それとフィールドは2〜3m程度で」

「はい。では承認します」

和人が連れて来た英語の遠藤先生に声を掛けると、遠藤先生は試験召喚フィールドを展開した。

「^{サモン}試験召喚！」

フィールドが出た後に俺と和人は召喚獣を出す。

『Fクラス	天城修哉	英語	402点
	VS		
Bクラス	佐伯和人	英語	408点』

『……………何だ、あの点数は？』

『佐伯が凄いのは知ってるが、天城って奴も凄いな……………ホントにFクラスなのか？』

俺と和人の召喚獣の点数を見たFクラスとBクラスは呆然と見ていた。俺達はそれに全く気にしておらず無視している。

「流石は修哉だ。得意科目だけあって、点数もそれなりに高いな」

「若干お前に負けているけど。それはそうと何故フィールドを狭くしたんだ？」

「他の連中が割って入らないように狭めただけさ。その方が修哉やFクラスには好都合だろ？　これはあくまで俺と修哉だけの戦いなんだから」

「……………試召戦争だと言うのに、そこまでして俺と戦いたいのかな？　呆れた奴だ。ってかよく他のBクラスの連中は何も言わないんだな」

「な〜に、ちょっとしたお願いをしたら快く承諾してくれたよ」

「……………あっそう」

そんな会話を気にしないかのように俺と和人の召喚獣が互いに睨んでいる。

和人の召喚獣は、赤のロングコートを纏っている中に防刃ベストを着て、白のスラックスにロングブーツを穿いており、右手には大剣を持ったデフォルメの和人だ。

格好は俺の召喚獣と色違いで似ているが、武器だけは違うな。まあそんな事はどうでもいいが。

「では行くぞ、和人」

「お手柔らかに」

そう言った途端、俺の召喚獣と和人の召喚獣が駆け出した。

そして……。

シャキンッ！！ ガキイイン！！！！ キイン！ ガキンッ！ キイン！

居合いと斬撃の音が鳴り響いた。

言うまでも無く俺の召喚獣が居合いを放ち、和人の召喚獣が重そう
な大剣であるにも拘らずに軽がると振り回して斬撃を繰り返している。
互いの攻撃に刀と大剣がぶつかり剣戟を鳴り響かせていた……
それも高速で。

「やるなあ和人」

「修哉こそ。伊達に召喚獣の扱いには慣れてないね」

「それはお前にも言える事だな」

ガギンッ！ ギンッ！ カアンッ！ キンッ！

『……………』

俺と和人の召喚獣戦に敵味方問わず、呆然と見ていた。

「何をしているお前等！ こっちはばかり気を取られているな！」

「俺と修哉の戦いを見てくれているのは嬉しいけど、今は試合戦争中だ。目の前の敵に集中してくれ」

『……………はっ！！』

俺達の突っ込みにFクラスとBクラスはすぐに気が付き……。

「ど…ドアと壁を上手く使うんじゃ！ 戦線を拡大させるでないぞ！ それと修哉と佐伯の戦いには決して割って入らないようにするのじゃ！」

秀吉がFクラスに指示を出し……。

『お前等！ 俺達は目の前のFクラスを叩くぞ！ 昨日佐伯に言われたとおり、二人の戦いに手を出すなよ！』

『おう！』

『佐伯く〜ん！ 頑張つてえ〜〜！！！！』

Bクラスも指示を出して頷いている…… 最後の方は佐伯を応援している女子達のエールであったが。

「相変わらず女子から好かれているな、お前は。その顔で一体何人落としているのやら」

「そうかい？ 俺は普通に接しているつもりだが」

「……………他の男から聞いたら、さぞかし嫌味だろうな……………」

まあいい。戦いに集中させてもらっ

「それは結構だ」

ブオンツ！ ヒュツ！ シャキンツ！ ガキンツ！ ブンツ！ キ
インツ！

俺と和人の召喚獣は攻撃↓防御↓攻撃↓回避↓攻撃と言っような流れの繰り返しになっている。

それによって5分ほど続いているが……。

『Fクラス 天城修哉 英語 400点

VS

Bクラス 佐伯和人 英語 402点』

召喚獣には大してダメージが無いのだ。

「ふむ。俺個人としては、このまま勝負を続けていたい……が、あんまりそうは言ってられないな。それに……」

ただでさえFクラスが不利な状況なのだから。

「そんな連れない事を言わないでくれよ、修哉。俺はもっとお前と戦っていたいんだから」

「それと同時に召喚獣の操作も完全に慣れておきたいんだろう?」

「……………やっぱりバレてたか」

俺の台詞に和人は少し間を置いて答えた。

コイツ……………やはりそう言う目的で俺との勝負を望んでいたみたいだな。

けれど和人の召喚獣操作レベルは他の生徒と違って高い。

先程までの勝負で俺と互角に戦っていた理由は、和人は過去に観察処分者である明久が教師の雑用作業をしている時に俺と一緒に監視していた事があった……………とは言っても3〜4回程度だが。

その時に和人も俺と同様に召喚獣の操作練習をして、一通りの操作が出来るようになっていた。だが、あくまでそれだけだ。

「和人、すなまいが早々に決着を付けさせてもらう。お前を倒してすぐに姫路の掩護に行かなければならないからな」

「やれやれ、バレてしまつては仕方ない。なら奥の手を使わせてもらうよ」

「何?」

奥の手だと?

「修哉も知っている筈だ。単体科目で400点オーバーしていると、

特殊能力が付属される事を」

……やはりそう来たか。和人の召喚獣の腕に付いてる腕輪が光り始めてきている。

一体何の特殊能力は出るのやら。

と、考えたその時……。

『Fクラス	天城修哉	英語	400点
VS			
Bクラス	佐伯和人	英語	202点

ん？ 和人の点数が半分も消費した……まさか！

「そう。俺の召喚獣の特殊能力は点数を消費する事で……コレを作ったんだ」

和人の召喚獣が両手に持っている大剣から二挺拳銃に……ってヤバッ！！

「くっ！！」

「遅い！！」

俺の召喚獣は避けようとしたが……。

ダアンッ！　ダアンッ！　ダアンッ！　ダアンッ！　ダアンッ！
ダアンッ！

和人の召喚獣が即座に二挺拳銃を連射して来た。

それにより……。

『Fクラス　天城修哉　英語　289点

VS

Bクラス　佐伯和人　英語　202点』

避けてはいたのだが、掠りの連続に肩に一発受けてしまつて点数が消費してしまった。

「あらら、仕留めかと思つたんだが……流石は修哉だ。そう簡単には倒せないみたいだね」

「……………」

「まだ俺が思つた通りに撃てないからと言つ理由もあるけどね」

「…………俺にとってはそれが唯一の救いだつたな」

「でもだからと言って安心しないでね。この銃は一度出したら使い続けられるから」

「……………チッ」

唯でさえ厄介な武器だと言うのに、あれを使い続けられたら此方としては分が悪い。遠距離攻撃を主体にされたら負けてしまう。

ならば……。

「だったらコッチも遠距離攻撃で行かせてもらっぞ！」

「ほう？　今度は修哉の特殊能力か」

俺の召喚獣の腕に付いている腕輪が光り始めた。

そして周りには六本の剣が浮いており……。

『Fクラス　天城修哉　英語　109点

VS

Bクラス　佐伯和人　英語　202点』

点数の大半が消費された。

「俺の特殊能力は剣を創生する事だ……」

因みに一本の剣を作ることにより30点消費される。

「おいおい……それって少しばかり反則じゃない？　もしかして、その浮いている剣を……」

「ご明察……行け！」

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン！！！！

俺の召喚獣が片腕を前に出すと、六本の剣が一斉に和人の召喚獣に襲い掛かり始めた。

無論、和人の召喚獣は剣を避けているが……。

「ちょ…ちよつと！ 剣を遠隔操作出来るなんて反則だよ！ これってファンネルかドラグーンみたいじゃないか！」

何度も向かってくるので避けるばかりであった。

「やかましいわ！ コレはお前の銃とは違って壊れたら無くなるんだよ！」

「だからと言って銃で撃つても剣が勝手に避けているじゃないか！」

「当たらない為に操作しているんだよ！ そら隙あり！」

「げっ！」

ザクッ！

一本の剣が和人の召喚獣の左腕に刺さり……。

ザクッ！ ザクッ！ ザクッ！ ザクッ！ ザクッ！

残りの剣も右腕、両足、両肩に刺さった。

『Fクラス 天城修哉 英語 109点

VS

Bクラス 佐伯和人 英語 22点』

「チェックメイトだ、和人！！」

「くそっ！ こんな事になるなら先に修哉の方の能力を出させれば良かった！」

和人が後悔している最中……。

シャキンッ！ ザシユッ！

『Fクラス 天城修哉 英語 109点

VS

Bクラス 佐伯和人 英語 0点』

俺の召喚獣は串刺しにされている和人の召喚獣に居合いを使って倒

したのであった。

「0点になった戦死者は補習……!!!」

「……………西村先生、逃げたりしません。ですから俺を担ごうとしないで下さい」

「む？　そうか。なら行くぞ」

突然、西村先生が現れて連行するかのよう to 担ごうとしたが、和人が逃げないと言ったのですぐに止めた。

「修哉、今回は俺の負けだけど、次はこっちは行かないよ」

「楽しみにしてる」

「ふっ…………そうそう、一つ教えておくよ」

「ん？」

和人が西村先生と一緒に補習室に行こうと俺を横切ろうとした時……。

「根本が姫路さんに対して下衆な手段を使っている。遠慮なく叩きのめしてくれ」

「何？　それはどう言っ…………」

小声で呟いた事に俺は再度聞こうとしたが、和人はもう行ってしまった。

「……………和人の発言が気になるが……………まあいい。取り敢えずは姫路の掩護に向かうか。あ、遠藤先生、もういいですよ」

「そうですか。では私はこれで」

遠藤先生が英語のフィールドを解除しようとしたが……………。

「遠藤先生！ Bクラス芳野が天城に挑みます！ サモン 試獣召喚！」

「同じくBクラス工藤も挑みます！ サモン 試獣召喚！」

「Bクラス真田も挑みます！ サモン 試獣召喚！」

「ちっ！ 邪魔が入ったか！」

Bクラス3名が俺に挑んできた。

『Fクラス 天城修哉 英語 109点』

VS

Bクラス 芳野孝之 英語 182点

Bクラス 工藤信二 英語 178点

Bクラス 真田由香 英語 179点』

「弱った俺を即座に狙うとは……………根本の指示か？」

「佐伯を倒したお前は危険だからな！ 悪いが即行で倒させてもら

う！」

「姫路の次に厄介な相手をすぐに倒すのは定石だしな！」

「佐伯君の敵は取らせてもらっわよ！」

「そうか。なら掛かって来い！」

Bクラス3名の召喚獣が俺の召喚獣に襲いかかってきた。

ブンッ！ ヒュッ！ ブオンッ！ ヒュッ！ ブンッ！ ヒュッ！

「ふむ、流石に一斉攻撃をされたら避けるので精一杯だな」

俺の召喚獣が余裕そうな顔をしながら避けている事に……。

「な…何で当たらない！？」

「点数は俺達の方が上なのに！？」

「どうして！？」

Bクラス3名は驚愕していた。

「点数が上だからって勝てる訳じゃない。それに……」

シャキンッ！ ザシユッ！

『Bクラス 芳野孝之 英語 136点』

「ああっ！」

俺の召喚獣がBクラスの芳野に攻撃をした事によってダメージを与えた。

「チッ。やはり点数が消費していると攻撃力も落ちているな……だが」

ザシユッ！ ザシユッ！ ザシユッ！

『Bクラス 芳野孝之 英語 2点』

「連続攻撃をすれば倒せるか」

「な…何だと！？」

「芳野は下がれ！ ここは俺と真田がやる！」

「何でこんなに強い相手がバカのFクラスにいるのよ!？」

Bクラスの芳野を下がらせる工藤と真田が俺の前に立ち塞がる。

「さて、どうするか……」

「行くぞ真田!」

「ええ!」

二人の召喚獣が再び一斉攻撃を仕掛けようとしたが……。

「真田って言ったか？ さっきの差別発言をすると、君の大好きな和人に嫌われるぞ?」

「なっ!？」

「隙あり」

シャキンッ! ザシュッ! ザシュッ! ザシュッ! ザシュッ!

『Bクラス 真田由香 英語 0点』

Bクラスの真田が動きを止めてくれたので、俺の召喚獣はすぐ真田の召喚獣に連続居合いをして戦死させた。

「さ…真田！ くそっつー！！」

「はい、一人目」

「ひ…卑怯よ！」

と、俺に訴える真田であつたが……。

「戦死者は補習……！！！」

「いやあああ……！！！」

西村先生にすぐ連行されてしまった。

「人の事は言えないだろうが。そっちも卑怯な手を使っておいで、よくあんな事が言えるな」

考えたのは根本だが。まあその根本に従って行動する他のBクラスも同罪だ。

「さて、お前はどつする？ 戦死覚悟で俺に挑むか？」

「くっ！ ……………お…覚えてろ！」

捨て台詞を言ったBクラスの工藤は後退した。

「やっと退いてくれたか。さて、これで漸く姫路の掩護に……ん？」

姫路の所に向かおうとした俺であつたが、姫路は召喚獣を出さずに

後方にいた。

どう言う事だ？ 何で姫路が戦っていないんだ？ それと様子が可笑しい。一体姫路に何があった？

「そう言えば明久の姿が見当たらないな。アイツは一体何処に行っただ？」

と、俺が明久を探していると……。

「天城！ ちょっといいか！？」

「ん？ 坂本？」

坂本が大声を上げながら本隊と一緒に俺の方に向かってきた。

「どうした坂本？ 何でお前が此処に来ている？」

「今からDクラスに行つて例の指示をする。だから天城も一緒に来てくれ」

例の指示……………つてアレか。Dクラスの教室にあるBクラス用の室外機を壊すと言う指示を。

「……………余り気は進まんが分かった」

「そう嫌そうな顔をするな。これは試召戦争なんだから」

「だからと言って室外機を壊そうと指示をするのはどうかと思うんだが……………まあいい。で、姫路が何故か戦う気が無いみたいに見える

んだが、何か知ってるか？」

「知らん。それについては明久が知ってるみたいだが、アイツは理由を話そうとしない。おまけに何を血迷ったか、姫路を今回の戦闘から外して欲しいってお願いをされてな」

「何だと？ お前はそれを承諾したのか？ 姫路が一番の戦力だと言うのに何故外そうとする？」

明久の不可解な提案だけでなく、それを承諾する坂本もどうかしてると思った。

「明久がいつもと違ってマジ顔になっただけでなく、俺に頭を下げてまで頼んだからな。条件付きで承諾した」

「……………何？」

「天城なら分かるんじゃないか？ 明久がそんな行動をするって事は」

「……………」

坂本の台詞に俺は少し考えた。

和人が補習室に行こうとしている際に言った台詞、姫路が戦おうとも戦えない様子、そして明久の予想外な行動。

それ等を総合すると……………。

「……………そう言う事か」

漸く腑に落ちた。

恐らく姫路は根本に何か弱みを握られているから動けないに違いなく、明久が坂本に頭を下げた事にも納得が行った。

「ん？ 何だ。天城は何か分かったのか？」

「一応な。それと坂本。明久は他にも何か言っていなかったか？」

「ああ。何でも根本の制服が欲しいって言ってたな」

「……………明久の要望に少しばかり呆れる俺だが、ソレを欲しいと言う事は恐らく姫路に対する弱みを取り返そうとする為にそう言ったのだろう。」

「……………まあアイツがそう言うって事は何かあるんだろうが、取り敢えずDクラスへさっさと行こう」

「そうだな。じゃあ行くか」

俺と坂本と本隊はDクラスへ向かう事にした。

現在の時刻は午後二時五十七分。Dクラスへ指示をした後、俺と坂本と本隊はBクラス教室前にいて根本と対峙していた。

「お前等いい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に集まりやがって暑苦しい事この上ないっての」

根本が余裕そうな顔をして俺達に言ってくる。

ドンッ！ ドンッ！

Bクラスの教室の壁の方から音が聞こえているが、俺は敢えて気にしなかった。

「どうした？ 軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？」

「降参した方が良くんじゃないか？ お前達Bクラスの要である和人がやられたんだから、そっちの士気はガタ落ちの筈だが」

坂本と俺は根本の挑発には乗らずに言い返してくる。

「はあ？ ギブアップするのはそっちだろ？ ってか佐伯の奴、俺に偉そうな事を言っておきながらFクラス風情に負けるなんて……使えない奴だ」

「無用な心配だな」

「そのFクラス風情である俺に昨日、策を看破されたのは誰だ？
あの程度で言い負かされる貴様の方が使えないと思うぞ。そんな貴
様に真っ向勝負で負けた和人を責める資格は無い」

「っ！！」

俺の言葉に根本は苦々しい顔をしていたが、すぐに激昂しなかった。

ドンッ！ ドンッ！

「はっ！ Fクラス風情に気遣われるなんて佐伯も地に堕ちたもん
だな！ それと坂本、頼みの綱である姫路さんの調子が悪そうだぜ
？」

おいおい根本、それは失言だと思うぞ？ それによつて教室にいる
女子達がお前を睨んでいるし。ってか此処のBクラス女子の大半は
佐伯に落とされていたのか…… 本当にモテ男だな、アイツ。

「…… お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ」

「けっ！ 口だけは達者だな。負け組み代表さんよあ」

「負け組？ それがFクラスの事なら、もうすぐお前が負け組代表
だな。っ！ かお前、昨日は天城に負けたじゃないか」

ドンッ！ ドンッ

「ちっ！ ……さっきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやっているのか？」

「さあな。人望の無いお前に対しての嫌がらせじゃないのか？」

「あり得るな。お前って卑怯な事しかやらない下種野郎だし」

ソイツは姫路の弱みを握っているお前に対して恨みを抱いている奴だからな。

「けっ。言ってる。どうせもうすぐ決着だ。お前等、一気に押し出せ！ それと天城には集中攻撃だ！」

「……態勢を立て直す！ 一旦下がるぞ！」

「了解」

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！」

俺達が下がってすぐに……。

「後は任せたぞ、明久」

と坂本が言った瞬間……。

ドゴオッ!!

先程からドンドンと聞こえている方から、いきなり壁が崩れた。

「ンなっ!？」

余りの出来事に驚いて引き攣った顔をしている根本に、壊れた壁の奥から召喚獣と一緒に出てくる明久。

………ってか明久、お前は どうして 何時も 何時も 学校の 器物を 壊すんだ？ いくら 試召戦争 とは 言え、 器物破損 は ダメ だろうが！ 弁償 出来る のか!？」

「くたばれ、根本恭二いー!」

明久は俺の考えている事を無視するかのように、根本に勝負を挑む為に駆け寄っている。

「遠藤先生！ Fクラス島田が……!」

「Bクラス山本が受けます！ 試獣^{サモン}召喚!」

「くっ！ 近衛部隊か!」

根本に挑もうとした島田であつたが、近衛部隊が根本を守るかのように立ち塞がって召喚獣を出した。

「は、ははっ！ 驚かせやがって！ 残念だったな！ お前等の奇

襲は失敗だ！ それに英語で挑むのは更に失敗だったな！ 英語が得意な天城は佐伯によって点数が消耗しているから逆に此方の勝率を上げたも同然だ！」

明久の奇襲を嘲笑いながら蔑みの言葉を送る根本。近衛部隊も俺が英語でやるのであれば充分に勝てると踏んで、明久達の方に集中している。

「と、根本は言ってるが、どうなんだ坂本？」

「確かにこれは明らかな失敗だ。だがこれは計算の中で、目的も達成された」

「けっ！ ハツタリもそこまでかけると逆に感心するなあ！ 負け組代表！」

坂本の台詞に根本は虚勢だと思っていた瞬間……。

ダン、ダンッ！

エアコンが停止した故に、涼を求める為に開け放たれた窓。

そこから屋上よりロープを使って2人の人影が飛び込み、根本の前に降り立った。その二人の人影は土屋と保健体育担当の大島先生だ。

「……Fクラス、土屋康太」

「き……キサマ……！」

「……Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

「ムッツリニイーツ！」

明久が近衛部隊を引き付けた事により丸裸になった根本。最早何処にも逃げ場は無い。

「……^{サモン}試獣召喚」

『Fクラス 土屋康太 保健体育 441点』

VS

Bクラス 根本恭二 保健体育 203点』

土屋の召喚獣は手にした小太刀を一閃して、根本の召喚獣を一撃で切り捨てた。

よって、Bクラス戦は終結したのである。

「全く、お前と言う奴は。何でそうやって物を壊すんだよ」

「明久、随分と思いつた行動に出たのう」

終戦後、俺が明久を少し説教していると秀吉がBクラスにやってきた。

「うう……。痛いよう、痛いよう」

明久は俺と秀吉の言葉を聞いておらず、負傷している手を擦っていた。それは当然だ。観察処分者である明久の召喚獣が素手で鉄筋コンクリートの壁を殴っていたから、痛みの何割かがフィードバックされているからな。その痛みは並大抵じゃない。

「なんとも……お主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？ もっと褒めても良いと思つよ？」

「戯け。教室の壁を壊しておいて褒められる事じゃないだろうが」

少し調子に乗っている明久に叱咤すると……。

「後の事を何も考えず、自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」

「……遠回しに馬鹿って言ってない？」

「それ以外に何があるんだ？」

「……………」

俺の言葉に明久は凹んでしまった。

「明久、俺からの説教はここまでにしておこう。代わりに職員室で西村先生達のキツイ説教を存分にされる事だな」

「……………出来ればシュウだけのお説教で終わらせたい」

「俺個人の説教で済む問題じゃないだろうが」

学校の壁を破壊するのは、とても俺だけの説教で済まされない。さつき俺が言ったが、明久は放課後に職員室で先生達のキツイお説教が待っている。もしこれが初犯じゃなかったら留年や退学は確実だ。

「ま、それが明久の強みだからな」

いつの間にか坂本が俺達の方に来ており、明久の肩をバンバンと叩いている。

坂本、それは明久にとって大変に不名誉な事だと思っぞ。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談と行くか。な、負け犬代表？」

「……………」

床に座り込んでいる根本。先程までの強気が嘘みたいに無くなって凄く大人しい。散々卑怯な手を使ったにも拘らず、俺達に負けた事にショックなんだろうな。同情はしないけど。

「本来なら設備を明け渡して貰い、お前等には素敵な卓袱台をプレゼントする所だが、特別に免除してやらんでもない」

そんな坂本の発言に、BクラスだけでなくFクラスもザワザワと騒ぎ始める。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

「うむ。たしかに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば開放してやるうかと思う」

坂本の言葉によりFクラス全員は納得した表情になる。これはDクラス戦でも言ってた事でもあり、坂本の性格を理解しているのだから。俺としてはこのままBクラスの設備を交換して欲しいが。

「……条件は何だ？」

力なく根本が問い掛けて来る。

「条件？ それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やつてもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

坂本が罵倒に等しい言葉を発しているが、俺は特に何も言わない。それだけの事を行っているのだ、根本は。その証拠に味方であるBクラス生徒達は誰一人根本をフォロイしようとしな。無論、和人もその一人であるが。

「そこで、お前等Bクラスに特別チャンスだ」

それは昨日の昼に言ってた、あの取引の事を言うのだろう。

「Aクラスに行って、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……それだけで良いのか？」

疑うように坂本を見る根本。

しかしソレだけでは済まされない。何故なら……。

「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃そう」

坂本が取り出した女子の制服を着る事になっているからだ。因みにアレは午前秀吉が着ていた制服だ。

どうして坂本がああ言ったのかは、明久が根本の制服を得る為にやったのだ。恐らく根本の制服のポケットの中に姫路の弱みとなる物が入っているのだろう。

それと同時に坂本の個人的な理由も含まれているような気がするが。

「ば、馬鹿な事を言うな！ この俺がそんなふざけた事を……！」

言うまでも無く根本は嫌がっていた。それは誰でも嫌がる。

しかし……。

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！ 必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！』

他のBクラス生徒達はやらせる気満々だった。コレを見るだけで根

本が今までどういった行動を取っていたのかが充分に分かる。

「んじゃ、決定だな」

「くっ！ 冗談じゃない！！」

根本は教室から脱出しようとしたが……。

「おいおい根本、敗者であるお前が逃げるのはダメじゃないか」

「さ…佐伯……！」

教室の出入り口から和人が立ち塞がっていた。

「お前……補習はどうした？」

「そんな事はどうでもいいだろう。今お前がやるのは坂本の指示に従う事だ」

ドンッ！！

「ぐふうー！！」

「根本は黙らせたよ。後はお好きに」

「お、おう。ありがとう」

和人の行動に驚いている坂本。和人も根本のやる事に相当頭に来て

いるんだろう。そうでなかったら、容赦なく気絶させないからな。

「では、着付けに移るとするか。明久、任せたぞ」

「了解」

坂本の指示に明久は根本に近づき制服を脱がせている……………それも物凄く嫌な顔で。

「ま、男が男の服を脱がすのはさぞかし苦痛だろうね」

和人がそう言いながら俺の方に近づいてくる。

「服を脱がすのはやはり女が良いってか？」

「勿論」

「……………」

即座に答える和人に俺は無言になった。ついでに和人は一体何人の女子の服を脱がせたんだろうと少し気になる俺であったが。

「で、吉井があんな嫌そうにしてまで根本の服を脱がせているのは？」

和人が急に真面目な顔をして俺に小声で問いかけたので……。

「お前が言った“根本が姫路に対して下種な手段を使った物”の回収だ。因みに先に気付いたのは俺じゃなくて明久の方だ」

「…………そう」

俺が答えると納得した。

「明久は姫路の為なら平気で汚名を被るからな。その証拠に壁まで壊したから」

「……………誰が壊したのかは気になっていたけど、アレは吉井が壊したんだね」

壊れた壁を見ている和人は呆れ顔になっていた。

「ま、放課後には職員室で先生達のお説教が待っているからな」

と、俺が和人と話していると、明久は根本の着ていた制服を持ってBクラスを出て行った。

「明久が出て行ったな。そう言えば、根本は姫路に対する弱みを握っていたのは知っていたが、実際は何を持っていたんだ？」

「……………ラブレターだよ。誰宛かは知らないけど」

「……………成程。確かに明久が怒る訳だ」

もし和人がBクラスじゃなかったら、間違いなく根本をお仕置きしていたに違いない。和人は女子の大切な物に対しての脅迫は誰よりも許せないから。

ま、それは今は置いといてだ。

「ところで和人、話は急に変わるんだが……昨日の戦いでFクラスの設備と俺達の筆記用具を壊した実行犯は誰だ？」

「ん？ ああ、あそこにいる四人だよ」

和人が指した方を見ると、根本の女装撮影会に快く手伝っている連中だった。

「そうか。ではソイツ等には俺の説教と同時に弁償させてもらおう。全員分の卓袱台と筆記用具代を、な」

「教室を破壊した事に関して俺もすまないと思ってる。お詫びとして卓袱台の方は俺の方で手配しておくよ」

「別にお前が壊した訳でも無いんだがな」

「流石に全員分の卓袱台となると、とても高校生が払える額じゃないからね。だからここは俺に任せてくれないか？」

「……………分かった、ではそうしよう。にしても流石は佐伯グループの御曹司だ。よくまあポンポンと出せるもんだ」

「親友の修哉だからこそ出すんだよ」

「……………そうかい。さて、俺はあそこの四人を連れ出して説教するか」

俺が坂本と一緒に撮影を手伝っている四人を呼んで別の部屋に連れて行くと、ソイツ等は断末魔の悲鳴をあげたのであった……キチンと筆記用具代も徴収済みだ。

その間に和人は携帯を使って卓袱台の手配をしていた。

第十二問（後書き）

原作だったら、筆記用具を壊した事は有耶無耶になっていたけど、ちゃんと覚えて実行犯に説教する修哉でしたゝゝ！！！！

第十三問（前書き）

遅くなりました。

やっぱり原作本を片手に書いて考えると時間が掛かりますね。

それではどうぞー！

第十三問

バカテスト 生物

問題 以下の問いに答えなさい

『人が生きていく上で必要となる5大栄養素をすべて書きなさい』

姫路瑞希の答え

『？脂質 ？炭水化物 ？たんぱく質 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね

天城修哉の答え

『？平穩 ？常識 ？ルール ？理性 ？品行方正……………特に騒ぎを起こす明久と坂本と土屋に必要なもの』

教師のコメント

……………天城君らしくない回答ですね。けれど確かにそうかも
しれません。

吉井明久の答え

『？砂糖 ？塩 ？水道水 ？雨水 ？湧水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、更に十八歳になっても所長がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

教室を破壊したBクラス生徒4名を説教して筆記用具代を徴収した俺は、Fクラス全員に各自の筆記用具代を渡した後、職員室にて肉体と精神がズタボロになって戻って来た明久を家まで送った。

そして和人によって手配した卓袱台を使い、補給テストを終えた二日後の朝。

俺達Fクラス生徒全員はAクラスと戦う前に坂本の説明を受けていた。

「先ずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われているのにも拘らず此処まで来れたのは、他でもない皆の協力があったの事だ。感謝している」

素直に礼を言う坂本に俺は目が点になった。あの坂本があんな事を言うのが余りにも意外だったから。

明久も坂本を信じられないような目で見ている。

「ゆ、雄二。どうしたのさ。らしくないよ?」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

何だかんだ言って坂本もここまで行けた事に嬉しいのだろう。俺も俺で凄いと思っている。明久達の顔を見るとよくここまで来たと喜んで多いに実感している。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すれば良いってもんじゃ無いと言う現実を、教師に突きつけるんだ!」

『おおーっ!』

『そっだーっ!』

『勉強だけじゃねえんだーっ!』

最後の勝負の前にFクラス全員の心は一つになっていた。

.....だがな坂本、確かに勉強だけが全てじゃ無いが、それなりの学力が無ければ進学や就職を勝ち取るのは無理なんだぞ？根性だけで生き延びるほど現実には甘くないんだから。

ま、今ソレを言ったら士気がガタ落ちになると思っから敢えて言わないが。

「皆ありがとう。そして残るＡクラス戦だが、これは一騎討ちで決着を付けたいと考えている」

それは四日前の昼食時に聞いた話だったから俺や聞いた明久、秀吉、土屋、姫路、島田は驚きはしなかったが、聞いていない他の連中はかなり驚いており、教室中がザワザワと広がった。

『どう言う事だ？』

『誰と誰が一騎討ちをするんだ？』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

坂本がバンバンと机を叩いて周りを静かにさせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

翔子？ 翔子ってＡクラス代表の霧島翔子の事か？ 名前で呼ぶとは随分と親しいんだな。もしかして俺と和人みたいな関係か？

と、俺が考えていると……。

「馬鹿の雄二が勝てる訳なあつ！？」

明久が思った事を言った事により、坂本はカッターを投げて明久の頬を掠めた。

おい坂本、カッターは人に向けて投げるものじゃないぞ。お前は明久を殺す気か？

「次は耳だ」

「坂本、そんな事をしたら即座に俺の折檻が待っているぞ？ やるんだったら覚悟しとけよ」

「……………」

「それと明久、思った事をすぐ口に出すのは止めると前から言ってる筈だ」

「……………ゴメン」

俺の台詞に坂本は青褪め、明久は謝るのであった。

「……………ご…ゴホンッ！ まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目は無いかもしれない」

認めているならカッターを投げるな。

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？ まともにやりあえば俺達に勝ち目は無かった」

しかし現に俺達Fクラスは今こうして勝ち進んでいる。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない」

一応は坂本を信じてはいるんだが、俺は未だにどうやって勝つつもりなのかと疑問に思っていた。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおーっ！！』

俺以外の奴等は坂本を心底信じている。Bクラスまで勝ち進んだのだから坂本を信じるのは無理も無いが。

「さて、具体的なやり方だが……一騎討ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？ 何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

秀吉の質問に坂本は自信満々に答える。日本史って……霧島は日本史が苦手なのか？ それに坂本が日本史は得意だって事も知らないが。

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

……小学生程度のレベルで満点の上限あり……だと？

「……ま…待て坂本、お前は何を考えているんだ？ 確かにそれは注意力の勝負にはなるんだが」

「そうだよ。それにもし同点になったら、きっと延長戦だよ？ そうなったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに修哉と明久の言うとおりじゃ」

明久と秀吉、俺が言いたいのはその言う事じゃなくて。どうして小学生程度の日本史で挑むのかと聞きたいんだ。

「おいおい、余り俺を舐めるなよ？ いくらなんでも、そこまで運に頼り切った作戦などと言う物か」

「?? それなら、霧島さんの集中を乱す方法を知っているとか？」

「いいや。アイツなら集中なんてしていなくとも、小学生レベルのテスト程度なら何の問題も無いだろう」

俺が聞こうとしているにも拘らず、明久と坂本は話を進めている。

………もういいや、俺が何を言っても状況が変わると思えないから黙っている事にしよう。

「雄二、余り勿体ぶるでない。そろそろ種を明かしても良いじゃろう？」

それは秀吉だけじゃなく他の連中も思っている事だ。その証拠にFクラス全員が頷いている。

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

前置きが必要なのは分かるが、余り長すぎるのもどうかと思う。

「俺がこのやり方採った理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

ある問題だと？

「その問題は……『大化の改新』」

大化の改新……645年に中大兄皇子・中臣鎌足らが蘇我氏を打倒して始めた政治改革。

誰でも知っている簡単な歴史の問題だ。

「大化の改新？ 誰が何をしたのか説明しろ、とか？ そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

明久の質問に坂本は首を横に振る。

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ」

「単純というと……何年に起きた、とかかのう？」

「おっビンゴだ秀吉。お前の言う通り、その年号を問う問題が出た

ら、俺達の勝ちだ」

年号って……おいおい坂本、学年主席の霧島がそんな簡単な問題を間違えるとは到底考えられないんだが。

「坂本、いくらなんでもそれは無いだろう。そんな簡単な問題は明久でさえ間違えないと言うのに」

「そうだな。確かに明久ですら間違えない」

俺の台詞に坂本が頷いていると、明久が後ろめたいような感じで視線を逸らしていた……っておい明久、何で目を逸らす！？ 間違えた事あるのか！？

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

明久の様子に呆れた視線を送っていた俺であつたが、坂本は気にせず話しを続ける。

……坂本がああ言うなら霧島は大化の改新の年号は間違えるんだろうが……それだけか？

と、俺が疑問を抱いたので坂本に聞こうとするが……。

「あの、坂本君」

「ん？ なんだ姫路」

「霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」

先に姫路が坂本に質問をしたので後回しにした。何故なら俺も姫路の質問が気になっていたから。

「ああ。アイツとは幼馴染だ」

何だ、やっぱり幼馴染か。通りで名前で呼ぶわけだ。けど才色兼備の霧島と幼馴染とは少しばかり羨ま……。

「総員、狙ええっ！」

「なっ！？　なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵！　Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺が一体何をしたと！？」

……………何やってるんだ、明久。そして坂本と秀吉を除く男子共。

「遺言はそれだけか？　……待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえ付けた後で口に押し込む物だ」

「了解です、隊長」

「……………おい明久、何故そんな下らん行動に走るんだ？　俺にはとても理解出来ないんだが」

「何言ってるんだよ、シユウ。雄二に霧島さんと幼馴染だなんて万死に値するじゃないか。僕としては、どうしてシユウも加わらなか

ったのが疑問だよ。そうすればすぐに雄二を瞬殺出来るのに」

「……………たかが幼馴染だからって、そこまでするお前等の方がどうかしているんだが。って事は俺もBクラスの佐伯和人とは幼馴染だから抹殺対象に入るのか？」

明久の言い分にメチャクチャ呆れる俺は念の為に聞いてみたが…………。

『野郎はどうでもいい!!』

「……………あつそ」

明久だけでなく、他の男子共が叫んで言った事で更に呆れた。要は女子の幼馴染が気に食わないって事が……………実に下らん。

もしここで和人はかなりのモテ男で、俺はアイツに時々可愛い女の子が沢山いる合コンに連れて行かれていっていると知ったらどうなるんだろうか？ 言った途端、即座に俺を抹殺すると思うが敢えて言わない。

と、明久が坂本を抹殺しようとする時…………。

「あの、吉井君」

「ん？ 何、姫路さん」

姫路が明久に声を掛けたので一時中断した。

「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。美人だし」

「……………」

「え？　何で姫路さんはボクに向かって攻撃態勢を取るの！？　それと美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険な物を投げようとしているの！？」

「まあまあ。落ち着くんじゃ皆の衆」

「ってかお前等、話がドンドン変な方向に進んでいるぞ」

パンパンと手を叩いて取り持つ秀吉に、明久達に突っ込む俺。

「む。秀吉とシュウは雄二が憎くないの？」

「冷静に考えて見るが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ？　男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが」

秀吉の台詞に明久達は思い出したかのような顔になる。

「むしろ、興味があるとすれば……………」

「……………そうだね」

明久達が一斉に……………。

「な…何ですか？　もしかして私、何かしましたか？」

姫路を見た事により、彼女は慌てた。

真実かどうかは分からないが、聞いた噂だと霧島は女子が好きで男には一切興味が無いみたいだ。

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ」

坂本は早く話題を打ち切らせようとしている。

「アイツは一度覚えた事は忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

まるで完全記憶能力を持っているみたいだな。もし霧島が坂本の言った大化の改新の年号を間違えたとしても、それ以外は確実に覚えて……ちょっと待て。それって不味くないか？

「おい坂本、質問なんだが……」

「ん？ 何だ？」

俺の質問に坂本は俺を見る。

「……………本当にそれで勝てるのか？」

「疑り深い奴だな。大丈夫だ、俺を信じろ」

「いや、俺が言ってるのはそうじゃなくて……」

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は……」

『システムデスクだ!』

坂本は聞いておらず、もう勝てると高揚していたのであった。

「……………こりゃ負けるな」

俺はもう聞くのを止めて、後々の事を考えていた。

「一騎討ち?」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

坂本はAクラスに着いて早々、木下優子に試召戦争の申し込みをしている。本来は代表の霧島がするのだが、木下が代わりに交渉テーブルについている。

今回は代表である坂本を筆頭に、俺、明久、姫路、秀吉と土屋がAクラスに着ていた。

……と言つか坂本、宣戦布告をするなら初めからこうすれば良かったんじゃないか？

「うーん、何が狙いなの？」

代表同士の一騎討ちに何かあるんじゃないかと木下は考えているみたいだ。まあ誰だって疑問に思う。何で下位のFクラスが一騎討ちにするのかと。

「勿論、俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

あたかも当然のように言う坂本の台詞に更に考える顔をする木下。何か裏があるんじゃないかと考えているに違いない。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせる事が出来るのはありがたいけどね、だからと言って態々リスクを犯す必要もないかな」

「懸命だな」

信じる事が出来ない木下の返答に、坂本は予想通りと言った様子で返事をする。確かここからが本格的な交渉をするんだったな。

「所で、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

坂本は腕を組み、顎を手に当てながら木下に聞く。

「時間は取られたけど、それだけだったよ？ 何の問題もなし」

あらら、坂本の罠に嵌められたとは言えCクラスも気の毒に……根本と結託した代表の小山には同情しないけどな。今のCクラスはDクラスと同等の設備で授業を受けているのだとすぐに分かった。

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって……、昨日来ていたあの……」

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていらないようだが、さてさて。どうなる事やら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争は出来ない筈だよね？」

確かに木下の言うとおり、試召戦争に敗北したクラスは三ヶ月間の期間が無ければ再戦は出来ない。

だが……。

「知っているだろ？ 実績はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっている事を。規約には何の問題も無い。

…… Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

坂本が設備交換をしないで、こっち指示に従うのを了承したただからBクラスとDクラスは再戦出来るのだ。

「……それって脅迫？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

悪役みたいな顔をしながら坂本は言う。

「ねえシュウ、今の雄二って何だか根本君みたいだね」

「アイツも根本と同様に狡賢いからな」

明久が俺にしか聞こえないように小声で話しかけてきた。それと同時に木下の後ろにいるAクラス勢の中から何やら視線も感じる。

それは……。

「……………くっ……………い君が……………天城君に……………羨ましい……………！」

久保の視線だった。たかが明久に話し掛けられた位であんな顔をしないで欲しいのだが。

「うーん……………分かったわ。何を企んでいるのかは知らないけど、代表が負けるなんてあり得ないからね。その提案受けるわ」

「え？ 本当？」

木下と坂本はそれに気付かず交渉をしていると、参加していない明久が声をあげた。

「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん……………」

だろうな。女子の制服を着た根本と戦うなんて俺だって嫌だ。木下の気持ちは良く分かる。

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎討ちじゃなくて、そうね、お互い五人ずつ選んで、一騎討ち五回で三回勝った方の勝ち、って言うのなら受けてもいいわ」

やはりそう簡単には事を上手く運べず、木下は警戒している。それは当然だけど。

「成程。こつちから姫路が出てくる可能性を警戒しているんだな？」

「ええ。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないわ。けどアシとしては、天城君が得意科目で代表と一騎討ちをするって事になつたら……」

「何だ？ Aクラスが天城を警戒するとは意外だな」

木下の発言に坂本は目を少し見開く。

「当然よ。天城君は得意科目だとAクラス並だし、召喚獣の操作もアタシ達と違って上手く出来るのよ。いくら代表の点数が高いからと言って、操作次第では負けるかもしれないわ」

「おいおい木下さん、それは買い被り過ぎじゃないか？ 俺如きがAクラスの代表に勝てるとは思えないが」

俺が割って入って言うが……。

「Bクラスの佐伯君と互角な戦いをして勝った貴方が言う台詞じゃ無いわよ、天城君？ 聞いた情報だと、かなりの高得点でハイレベ

ルな戦いをしていたみたいね」

「う……………」

すぐに言い返すことが出来なかった。

「姫路だけじゃなく天城も警戒してたって事か。まあ安心してくれ、うちからは俺が出る」

「無理ね。その言葉を鵜呑みには出来ないわ」

これは競争じゃなくて戦争だから、と木下は付け足す。全くもってその通りだ。おまけに脅迫紛いな事をされたのだから坂本を簡単には信じないだろう。

「そうか。それなら、その条件を吞んでも良い」

「え？」

坂本の意外な返事に、明久は素っ頓狂な声を出す。

「ホント？ 嬉しいわ」

「けど、勝負する内容は此方で決めさせて貰う。その位のハンデはあっても良い筈だ」

「え？ うーん……………」

条件を吞んだ事に喜ぶ木下だったが、ハンデを付けると言われたので再び考える顔になってしまった。

と、木下が悩んでいる時……。

「……受けてもいい」

「うわっ！」

いつの間にかAクラス代表の霧島が現れた事により、明久は情けない声を出しながらびっくりしていた。

「……雄二の提案を受けてもいい」

霧島も霧島で坂本の事を名前で呼んでいるな……幼馴染だから当然か。

と言うか、そんな事より全く気配を感じさせないで来るとは凄いな。何か武術でもやっているのか？

「あれ？ 代表。良いの？」

「……その代わり、条件がある」

「条件？」

「……うん」

霧島が頷いて坂本を見た後に姫路を値踏みするかのようにな、じつくりと観察し……。

「……負けた方は何でも一つ言う事を聞く」

それを終えると、再び坂本の方に顔を向けて言い放つ。

おいおい、本当に噂通り霧島は同性愛趣味を持っているのか？ 久保だけじゃなく霧島まで……何でこんな身近にいるんだよ。勘弁してくれ。

「……………（カチャカチャ）」

「ムツツリーニ、まだ撮影の準備は早いよ！ と言うか、負ける気満々じゃないか！」

……………土屋の行動と明久のバカ発言は放っておこう。

「じゃ、こうしない？ 勝負内容は五つの内三つそっちに決めさせてあげる。二つはうちで決めさせて」

木下の妥協案に坂本は……。

「交渉成立だ」

「ゆ、雄二！ 何を勝手に！ まだ姫路さんが了承してないじゃないか！」

了承すると、明久が抗議して来た。

「心配すんな。絶対に姫路に迷惑はかけない」

自信満々に言う坂本。大化の改新の年号を間違えるだけで、そこまでする確信があるのか？

「……勝負はいつ？」

「そうだな。十時からでいいか？」

「……分かった」

どうでもいいんだが、霧島の話し方って土屋に似ているな。おまけに気配を消して現れる所も。

「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」

「そうだね。皆にも報告しなくちゃいけないからね」

交渉を成立し、俺達はAクラスを後にしようとした。

第十三問（後書き）

次回は明後日までに出しますのでお楽しみに！！

第十四問（前書き）

また無駄に長くなって記録更新しました。
それではどうぞ！！

第十四問

時刻は十時過ぎ。再び俺達はAクラスに赴いて試召戦争を開始する。

「では、両名共準備は良いですか？」

今回のAクラス戦での立会人は、Aクラス担任かつ学年主任の高橋先生であった。知的な眼鏡を掛けて、ビシツとしたスーツを纏っている。教師や生徒達からは憧れの先生として有名だ。

「ああ」

「……問題無い」

高橋先生の質問に坂本と霧島は気にする事無く答える。二人の返答に高橋先生は試召戦争を開始した。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くわ」

最初は木下優子か。相手をするなら俺の方がいいかな？

と、俺が思っていると……。

「ワシがやるっ」

木下の弟である秀吉が前に出た。

「待て、秀吉」

「何じゃ？」

「聞いておきたいんだが、姉に勝てる心算があるのか？」

「それは……………」

秀吉が俺の質問に答えようとした時……………。

「大丈夫だよ、シユウ。秀吉にはお姉さんの苦手科目や集中力の乱し方を知ってる筈だよ。この勝負は秀吉が木下さんの心をどう乱すかで決まるんだから」

明久が代わりに答えた。

「阿呆。Aクラスの木下相手にそんな稚拙な心理戦が通じる訳無いだろうが。秀吉、まさか明久みたいな回答はしないだろうな？」

「……………」

無言で逸らすな。ってか本気で心理戦をやるつもりだったのか？

「……………ならもう一つ聞こう、秀吉。一昨日の件は姉に謝ったのか？」

「一昨日？」

「忘れたのか？ お前は……………」

「昨日のCクラス代表の小山を挑発した事を言おうとしたが……。

「秀吉、ちょっといいかしら？」

「何じゃ？ 姉上」

姉の木下優子が対戦する秀吉に近寄ってきた……それも少しばかり怖い笑みで。

木下があんな顔になってるって事は、一昨日の事を知ったみたいだな。

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

コラ秀吉、何で都合良く忘れているんだよ。お前は坂本の指示で姉に変装して小山を挑発したじゃないか。

「じゃーいいわ。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」

「うん？ ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ、姉上？」

木下は秀吉の腕を引っ張って教室を出た。

「……………これは不味いな」

何か嫌な予感がしそうだったので、俺も教室から出ると……。

「姉上、勝負は……………どうしてワシの腕を掴む？」

「アンタ、Cクラスで何をしてくれたのかしら？　どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしている事になっているのかなあ？　それとアタシが天城君に無理矢理キスしようとしたって噂が立っているのよ！？」

「はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して……あ、姉上っ！　ちがっ……！　その関節はそっちには曲がらなっ………！」

「はいはい、木下さん。そこでストップ」

「あ……天城君！？」

木下が秀吉に関節技を仕掛けようとする所を俺が止めると、困った顔をして見る木下。

「しゅ……修哉……」

「秀吉、この状況から見て木下にまだ謝っていなかったみたいだな」

「うっつ……色々あり過ぎて忘れてたのじゃ」

「はあっ……お前なあ。それと木下さん、自分の弟だからと言って関節技をやるのはどうかと思うぞ？」

「うっ……」

姉弟揃って罰が悪そうな顔をしている。

「全く……とは言え木下さん、一昨日の件はすまなかった。あれはうちの代表の指示で、CクラスがAクラスと戦わせる為に秀吉を差し向けたんだ」

「……………じゃあ何？ 坂本君はアタシ達Aクラスを利用した後、何食わぬ顔で脅迫紛いな宣戦布告をしたってわけ？」

「結果的に言えばそうなるな」

「修哉よ、ソレを言ったら……………」

「今更もう隠す必要は無い。それに話さなきゃ秀吉はキツイ折檻をされていたんだ。これは秀吉の為でもあるんだぞ？」

「……………」

俺の台詞に秀吉は何も言い返すことが出来ない。

「そう言う訳だ木下。全面的に秀吉だけが悪いんじゃなく、指示をした坂本や、ソレを止めなかった俺にも責任がある。だから秀吉には……………」

「……………良いわ。そう言う事なら、秀吉だけを責めるのはお門違いね」

「あ……姉上よ……………」

許してくれるのかと言おうとした秀吉だったが……………。

「けど、秀吉がやった事には変わりないわ。アンタにはそれなりの

罰を下すから覚悟しておきなさい」

「や……やはりそう簡単には許してもらえんみたいじゃのう……」

世の中そんなに甘くはないみたいだ。

「安心しなさい、さっきみたいな事はしないから」

「なら良いのじゃが……」

「因みに木下さんの言った罰って何をするのか聞いてもいいか？」

「え……えつと……これはアタシと秀吉の問題だから、天城君は何も聞かないで。さっきも言ったけど、秀吉に暴力を振るったりしないから」

「ならいいが」

まあ木下がここまで言うなら聞かないが……俺には他にも聞かなければいけない事がある。

「木下さん、もう一つ聞きたい事があるんだが」

「何？」

「秀吉を折檻する前に、木下さんが俺に無理矢理キスをしたってどう言う事だ？」

「……………」

俺の問いに木下は無言になりながら顔を赤らめ……。

「それは俺も初耳なんだが……」

「やっぱり秀吉は今すぐ折檻されなさい……！！！！！！！！！！」

「ギヤアアアアア……！！！！！！！！！！」

「っておい！ 何をやってる木下さん！？」

すぐさま秀吉に関節技を仕掛けるのであった。

そして五分後

ガラガラガラ

Aクラスの扉を開けて戻ってくる俺と木下。

「坂本君、秀吉は急用が出来たから帰るって言ってたわ。代わりに天城君と戦ってもいいかしら？」

「あ、ああ……。それは構わないが……」

「……………」

怖い笑みを浮かべながらハンカチで返り血を拭う木下。流石の坂本もすぐに木下の要求を呑んだ。

「……………おい天城、秀吉は一体どうした？」

「さあ？ 誰かさんの所為で秀吉が帰ってしまったたと言えないな」

「…そ…そうか」

「取り敢えず、坂本には試召戦争が終わったら後で木下に謝っておけよ」

「何でだ？」

「俺が一昨日の事を木下に教えたから」

「……………何でバラした？」

俺の台詞に坂本は顔を青褪めながらも俺を問い詰める。

「教えなかったら秀吉が惨い事になってたからな。それに……俺や秀吉だけが理不尽な目に遭っておいて、指示したお前が何もされないってのは割に合わないさ過ぎだから。と言う訳でちゃんと木下に謝れよ」

「待て！ それはお前の個人的な八つ当たりじゃねえか！！」

坂本の言葉を無視して木下と立ち合う。

「高橋先生、俺が秀吉の代わりに木下さんと戦いますので」

「分かりました。では教科はどうしますか？」

高橋先生の質問に……。

「数学でお願いします」

即座に答えたのであった。

「ちょ… ちょっとシュウ！ どうして自分から苦手科目を……」

「良いんだ、明久」

明久が不味いと思って言おうとしたが、俺が遮る。

「では始めようか、木下。試獣^{サモン}召喚！」

「試獣^{サモン}召喚！」

俺と木下は召喚獣を出すと……。

『Fクラス	天城修哉	数学	90点
	VS		
Aクラス	木下優子	数学	375点

点数差は圧倒的に桁外れだった。

因みに木下の召喚獣は騎士の鎧を着てランスを持ったデフォルメ姿の木下だ。

「あああ……差がありすぎる。シュウが負けちゃうよ」

「天城の奴、何で自分から苦手科目を……ここは諦めるしかないな」

「そこ、静かに見てろ」

明久と坂本の呟きに俺は即座に突っ込む。

その直後、俺と木下の召喚獣での対決が始まった。

ダッ！ スカッ！ シャキンッ！ ザシュッ！ ダッ！ スカッ！
シャキンッ！ ザシュッ！

『Fクラス	天城修哉	数学	90点
	VS		
Aクラス	木下優子	数学	341点』

木下の召喚獣が持っているランスを使つての突進攻撃を難なく避ける俺の召喚獣は居合いをやつてダメージを与えている……ほんの少しだが。

「やっぱり点数差があり過ぎると、ダメージもかなり低いな」

「くっ！ 点数が高くて簡単には倒せないわね……！」

「その代わり一発でも喰らったら終わりだが」

簡単に避けられている俺の召喚獣を見て木下は苦い顔をする……………
他のAクラス生徒達や高橋先生は驚いた顔をして見ているが。

『凄い。避けるだけじゃなく、ちゃんと反撃もするなんて』

『木下さんの言ったとおり凄い奴だな、天城って』

『何であんな強い奴がFクラスにいるんだ？』

Aクラス生徒達は感心しながら見ており……。

「流石は天城君ですね。点数差があっても、ここまでの戦いを繰り広げるとは」

高橋先生も同様に感心していた。

『Fクラス	天城修哉	数学	90点
	VS		
Aクラス	木下優子	数学	299点

「やっと300点を切ったか。倒すには結構時間が掛かりそうだな」

「っ!!すう~~~~はあ~~~~すう~~~~はあ~~~~。
落ち着け、落ち着くのよアタシ。焦ったら天城君の思う壺.....すう
~~~~はあ~~~~」

「流石は木下さんだ。他の連中とは違って冷静だな」

DクラスやBクラスだったら焦って隙を見せてくれたが、木下はそう簡単には行かないみたいだ。深呼吸をして焦った心を落ち着かせるのは懸命な判断である。

『天城~~~~! そのまま一気に行け~~~~!』

『お前なら倒せるぞ~~~~!』

『突っ走れ~~~~!~!』

未だにダメージを負ってない俺の召喚獣を見て、Fクラス達は後押しするかのように応援してくる。

バカが、下手に気を抜けばコッチがやられる。押してるとは言え、未だに向こうが優勢なんだぞ。

「.....どうしたの、天城君。貴方からは攻撃しないのかしら?」

「さあ? どうしようかな?」

「.....なら!」

木下の召喚獣が再びランスを使って突進すると.....。

ダッ！ スカツ！ シャキンッ！ ザシュッ！

またさっきの繰り返しで俺の召喚獣は避けて居合いをしたのであった。

『Fクラス 天城修哉 数学 90点

VS

Aクラス 木下優子 数学 271点』

そして木下の召喚獣がフラフラした状態になっている。

『シュウ！ 今がチャンスだよ！！』

『そのまま止めを刺せ〜！』

「.....」

明久や他のFクラス達と言っても俺の召喚獣は動かなかった。

「ふむ、点数が低くなると少しばかりダメージも高くなるみたいだな」

「.....やっぱりね」

「ん？」

「天城君、アタシの召喚獣が怯んでいるにも拘らず、攻撃する気配が全く無いわね」

「……………何の事だ？」

木下の指摘に俺はわざと惚けていたが…………。

「貴方はこう思っているんでしょう？ 下手に自分から攻撃を仕掛けたら、即座にアタシから反撃を喰らって負けてしまうって。違つかしら？」

「……………」

次の指摘では言い返すことが出来なかった。

「やっぱりそう言う事だったの。隙を見せても動かないなんて相当用心深いのね」

「……………だが分かった所でどうするつもりだ？ 俺は木下さんが仕掛けない限り、動く気は無いぞ」

「そうね。アタシが何を言っても絶対に動かないと思うから……………  
…こっちから仕掛けるわ！」

木下の召喚獣は再び突進攻撃を繰り返してくる。

ダッ！ スカツ！

「残念だが、それはもう完全に見切った」

シャキンッ！ ザシュッ！

『Fクラス 天城修哉 数学 90点

VS

Aクラス 木下優子 数学 231点』

そして俺の召喚獣も再び居合いをやってダメージを与えたが……。

ガシッ！

「なっ！？」

予想外な事に、木下の召喚獣は俺の召喚獣の片腕をランスを持っていない片手で掴んだ。

「やっと捕まえたわ」

「ま…まさか、始めからダメージを受ける気で……」

「ええ。そうでもしないと、貴方の召喚獣の捕らえる事が出来ないから。さあ、これで終わりよー!!」

ドスンッ!!

木下の召喚獣は動けない俺の召喚獣にランスを当てて……。

『Fクラス 天城修哉 数学 0点』

俺は敗北してしまった。

「勝者、Aクラス 木下優子」

「はあっ…………捨て身覚悟でやられたらそりゃ負けるよなあ」

高橋先生の宣言により、俺はガツクリとする。

「そこまでガツカリしなくてもいいわよ、天城君。苦手科目であるにも拘らず、あれ程の点数差でも追い詰めていたんだから。もし天城君の得意な国語が英語で挑んでいたら、間違いなく負けていたわ」

「木下さんの言うとおりですよ。正直、私もあそこまで善戦するとは思っていませんでしたから。寧ろ誇って下さい」

「……………それはどうも」

木下と高橋先生の台詞を聞いて俺はすぐに引き下がる。

「悪い、負けてしまった」

「そんなに気を落とさないで良いよ、シュウ。Aクラス相手にあんなすごい戦いをする事に驚いているんだから」

「そうだな。まあ負けてしまったのは残念だが、苦手科目で挑んだなら……ってかどうして数学を選んだんだ？ 国語か英語を選べば、充分に勝てただろうが」

明久はあそこまで奮戦した事に驚いているみたいであつたが、坂本は労いながらも俺の行動に疑問を抱いていた。

「一昨日の謝罪と言えば分かるか？」

「だからと言って……」

「お前が何を言おうが、俺達は木下にかんりの迷惑を掛けてしまったんだ。戦争とは言え、元クラスメイトを利用した俺としても、こればかりは譲れなかったからな」

「……………」

俺の台詞に坂本は何も言い返すことが出来ないみたいで無言だった。

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

高橋先生が二回戦のコールをすると、Aクラスからは眼鏡を掛けた黒髪のセミロングの女子……確か佐藤美穂さとう みほだったな。

対してFクラスからは……。

「よし。頼んだぞ、明久」

「え！？ 僕！？」

明久が行く事になった。

「おい坂本、何故明久に行かせようとする？」

「信じているからな」

「何をだ？」

「……………」

俺の質問に坂本は答えず無言だ。コイツ……二回戦は勝てないと判断して明久を捨て駒にしようとしているな。

「ふう……。やれやれ、僕に本気を出せって事？」

「ああ。もう隠さなくても良いだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

完全に騙されている明久を更に調子付けさせる坂本。

『おい、吉井って実は凄い奴なのか？』

『いや、そんな話は聞いた事は無いが』

『いつものジョークだろ？』

Fクラスの連中からは信じていないような感じで言ってくる。

「吉井君、でしたか？ あなた、まさか……」

何か勘違いをしている対戦相手の佐藤。

「あれ、気付いた？ ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃいない」

じゃあ何で袖をまくって手首を振ってるんだ？ 召喚獣バトルには全く関係ないぞ。

「それじゃ、あなたは……」

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕……」

明久が大きく息を吸って、この場にいる全員に告げようとしたが……。

「明久、まさか左利きなんてバカな事を言っんじゃないだろうな？」

「……………」

俺の突っ込みに明久は無言になり……。

「……………」

ここにいる全員も無言になった。

そして……。

『Fクラス 吉井明久 物理 62点』

VS

『Aクラス 佐藤美穂 物理 389点』

明久の召喚獣は瞬殺されて敗北したのであった。下らん事を言う暇があるなら、負けるのを覚悟で一矢報いろよ。

「このバカ！ テストの点数に利き腕は関係無いでしょうが！」

「み、美波！ フィードバックで痛んでいるのに、更に殴るのは勘弁して！」

ま、いくら明久の召喚獣操作が俺より上だからと言って六倍以上の点数差があったら即座に負けるな。こんな事になるなら、一回戦と二回戦を同時にやる為に明久と組んでタッグ戦でもやれば良かった。

そうすれば点数が低いからと言って、それなりの戦果があつたし……まあ今更言つても遅いが。

「よし。勝負はここからだ」

「ちょっと待った雄二！ アンタ僕を全然信頼して無かつたでしよう！」

「今更何を言つてる、明久。坂本がお前を信頼してるわけ無いだろう。と言つか、いい加減に坂本の言葉を信じるなよ」

「信頼？ 何それ？ 食えんの？」

安心しろ坂本、俺はお前が霧島に勝つ事に微塵も信頼していないから。

「……………本気を出した左腕でお前を殴りたい！！」

「その前に先ずは島田をどうにかする事だな」

「え！？ シュウは助けてくれないの！？」

「今回も坂本に騙されたとは言え、変に調子に乗った罰だと思って諦める」

「酷い！！」

人の事を云々言う前に、坂本に良い様に利用されているって事を学習して欲しいんだが。

「では、三人目の方どうぞ」

「……………（スック）」

三回戦のコールに土屋が立ち上がる。

次は此方の科目選択権だから、ここで土屋の得意科目が出ると確信する。その科目は保健体育だ。

何故なら土屋はBクラス戦で根本を討ち取った時の点数がAクラス並、いやそれ以上の点数を持っていたから。

「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからは俺の元クラスメイトである工藤愛子が出てきた。

あ、確か工藤の得意科目って……………これはちよつと不味いか？

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

「教科は何にしますか？」

工藤が自己紹介を終えると、高橋先生が土屋に尋ねる。

「……………保健体育」

それは当然の選択科目であり、土屋の唯一最強の武器だった。

「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね？」

工藤が余裕な顔をして土屋に話しかける。Fクラスの男子達は工藤の行動に疑問を抱いているが俺は知っている。

何故なら……。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？ ……君と違って、実技で、ね。」

工藤も土屋と同様に保健体育が得意なのであった。

「そっちの君、吉井君だっけ？ 勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？ 勿論実技で。」

今度は明久に誘いをかけて来た……それって勉強の誘いだよな？

「フツ。望むところ……。」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！ 永遠に必要ありません！」

「……………」

「島田に姫路、明久が死ぬほど哀しそうな顔をしているんだが」

「二人とも、何故そこまで断言するのが俺には全く理解出来ないぞ。それに工藤は勉強の誘いをしただけに過ぎないんだがな。と言うか工藤さんも少々からかい過ぎだ」

「あ、バレた？」

『え？』

俺の台詞に明久達は俺の方に顔を向ける。

「いやゝ何だか吉井君が気の毒そうに見えて……」

「だからと言って変に誤解を招く事を言っな」

「じゃあ天城君がボクと本格的な実技をやってくれる？」

「それは和人に言ったらどうだ？ アイツなら喜んで引き受けるぞ」

「……………いや、佐伯君は遠慮しとく」

工藤は冷や汗を掻きながら首を横に振った。和人曰く、「工藤さんは性行為の実技に関しては全くの未経験で、見栄を張っているだけに過ぎない」と言ってたのだ。

あの様子からして未だに経験は無さそうだな……………どうでもいい事だが。

と、そんな時……………。

「そろそろ召喚を開始して下さい」

高橋先生が痺れを切らしたのか、召喚獣を出すよう催促してきた。

「はい、試獣<sup>サモン</sup>召喚っと」

「……………試獣<sup>サモン</sup>召喚」

土屋と工藤は召喚獣を出すと、それぞれ武器を持って出現する。土屋は前回のBクラス戦で見せた小太刀二刀流。

対する工藤の武器は……………。

「何だあの巨大な斧は!？」

明久が驚愕しながら言った。工藤の召喚獣はセーラー服を纏い巨大な斧を持った召喚獣。見るからにかなり強そうな感じだ。おまけにあの腕輪もある。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

だから工藤、見栄を張るのは止めとけ。そこまで言うなら和人を呼ぶぞ？

「それじゃ、バイバイ。ムツツリー二君」

そして雷光を纏った大斧を振るう工藤の召喚獣は、土屋の召喚獣に襲い掛かる。あの雷光は腕輪の特殊能力を発動させているみたいだな。その証拠に腕輪が光っているし。

「ムツツリー二っ!」

土屋がピンチだと思った明久は声を上げ、斧が召喚獣を両断しようとしたが……………。

「……………加速」

その直後、土屋の召喚獣の腕輪が輝いて姿がブレた。

「……………え？」

思いも寄らない事に戸惑う工藤。

けど俺は少しばかり見えた。土屋の召喚獣が物凄いスピードで工藤の召喚獣の全身を切りつけている所を。

「……………加速、終了」

土屋がポツリと呟く。その後には工藤の召喚獣は全身から血が吹き出して倒れた。

|       |      |      |       |
|-------|------|------|-------|
| 『Fクラス | 土屋康太 | 保健体育 | 572点  |
| VS    |      |      |       |
| Aクラス  | 工藤愛子 | 保健体育 | 446点』 |

凄い点数だな。もしかして教師以上じゃないか？

「つ、強い！ 下手をすると僕の総合科目並の点数だよ！」

「……………はあっ」

明久の余りの点数の低さに溜息を吐きながら呆れる俺であった。

「Bクラス戦の時は出来がイマイチだったらしいからな」

驚く明久と呆れる俺に説明する坂本。

前回の戦いでは本気じゃなかったのかよ。凄い点数に感心するべきか、バカげた点数に呆れるべきか……どうすればいいか分からなかった。

「そ…そんな……！ この、ボクが……！」

自分の得意科目である保健体育で負けた事に、工藤はショックを受けて床に膝を付く。ま、上には上がいるって事だな。

「これで二対一ですね。次の方は？」

高橋先生は淡々と作業を進めている。自分のクラスが負けたと言うのに余り気にしてない様子だ。

「それなら僕が相手をしよう」

次に出たのは久保利光であった。

あれ？ 宣戦布告の時はやたらと悔しそうな顔をしてたのに、随分と冷静な顔をしているな。

「やはり来たか、久保利光」

坂本は久保の登場に真剣な顔をして見ている。まあコイツがああなるのは無理もない。

何しろ久保は姫路に次ぐ学年三位の実力者で、振り分け試験を姫路がリタイアした事により、現在は学年次席の座にいる。

「ここが一番の心配どころだ」

「そうだな」

坂本の言葉に俺は頷く。

久保の実力は姫路とほぼ互角。連戦で疲れている姫路に果たして久保に勝てるかどうかは不安なのだ。

「科目はどうしますか？」

高橋先生が久保と姫路に問いかける。

そう言えば、選択科目権はコッチが三回で向こうは二回。順番は決めてなかったような。これって早く言った者勝ちか？

「総合科目でお願いします」

と、久保はすぐに答えた。

「ちょっと待った！ 何を勝手に……」

「明久、向こうにも選択科目権はあるんだ」

「でもだからって……！」

俺の言葉に明久がまだ何か言おうとしたが……。

「構いません」

「姫路さん？」

姫路がすぐに止めた。

「それでは……」

高橋先生が操作を行うと、姫路と久保の召喚獣が呼び出され……  
…一瞬で決着が付いた。

|       |      |      |       |
|-------|------|------|-------|
| 『Fクラス | 姫路瑞希 | 総合科目 | 4409点 |
|       | VS   |      |       |
| Aクラス  | 久保利光 | 総合科目 | 3997点 |

『ま、マジか！？』

『いつの間にこんな実力を！？』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ………！』

敵味方問わず驚きの声が上がっている。

これは凄いな。まさか姫路が4000点オーバーしてたと同時に、久保との点数差も400点オーバーだ。とんでもない実力だ。

「ぐっ……！ 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……？」

まさか久保もここまでの実力差があったとは思ひもしなかっただろう。

久保の質問に姫路は……。

「……私、Fクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

何ともまあ、Fクラス全員に対しての嬉しい事を言っていたのであった。俺はてつきり、大好きな明久の為に頑張っていたと予想してたんだがな。

「これで二対二です」

おや？ どうやら高橋先生の方も若干の変化があったみたいだな。姫路の急成長に驚いているのか、もしくはFクラスがAクラスと此処まで渡り合っている事に戸惑っているのか……果たしてどっちだろうな。

「最後の一人、どうぞ」

「……はい」

大将戦は言うまでもなく、Aクラス代表の霧島翔子が出てきた。

そして、Fクラスからは……。

「俺の出番だな」

坂本雄二であつた。

「教科はどうしますか？」

Aクラスの連中は霧島が負ける事はないと思って静かに見ている。  
それは俺も同じだ。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

坂本が選択した教科と内容により……。

ざわ……！

流石のAクラス達もざわめきが立ち始めた。

『上限ありだつて？』

『しかも小学生レベル。満点確実じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ』

Aクラスの皆さん、そこまで警戒する必要は無いよって言いたいな。

明久達は勝利の可能性があると思っているみたいだが、ハッキリ言  
つて無い。もう気付いていると思われるが、読者の皆様は何故俺が  
此処まで坂本は絶対に負けると断言出来るのかお分かりでしょうか  
？まあ、もう少し後になれば分かるので今すぐに答えませんけど。

「分かりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。  
少しこのまま待つて下さい」

高橋先生はノートパソコンを閉じて教室を出て行く。小学生レベル  
のテストを作る為に職員室へと向かったのだらう。

そんな高橋先生の背中を見送った明久は、坂本に近づく。

「雄二、後は任せたよ」

グッと坂本の手を握っている。

「ああ。任された」

明久の言葉に坂本は力強く握り返す。

「……………（ビッ）」

土屋も坂本に歩み寄り、ピースサインを向ける。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……………（フツ）」

土屋は口の端を軽く持ち上げて、元の位置に戻った。

「坂本君、あの事、教えてくれてありがとうございます」

「ああ。明久の事か。気にするな。後は頑張れよ」

坂本は姫路と何か話していたが俺には関係無いみたいだ。

「はいっ」

姫路は元気な返事をして、坂本は楽しそうにやんわりとした笑みを浮かべた。

そして俺も坂本に近づく。

「坂本、俺は信じているぞ」

お前が最高の道化を演じてくれる事を、な。

と、俺が内心そう思っていると……。

「ああ、任せてくれ」

坂本はやつと俺を信頼してくれたと思っているのか、最高の笑みを浮かべた。

「（ニコツ）楽しみに待っているぞ」

無様に負けてくれる事を思いながら俺は笑みを浮かべる。

そして10分近く経つ

『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は百点です』

テストの準備が終えたので坂本と霧島は視聴覚室におり、Aクラスにいる俺達はスクリーンを通して見ていた。

画面の向こうには坂本と霧島の他に、日本史担当の飯田先生が問題用紙を裏返しのまま二人の机に置く。

『不正行為等は即失格になります。いいですね？』

『……はい』

『分かってるわ』

『では、始めて下さい』

飯田先生の合図に、二人は裏返しになつてゐる問題用紙を表にした。

「吉井君、いよいよですね……」

「そうだね。いよいよだね」

「これで、あの問題が無かつたら坂本君は……」

「集中力や注意力に劣る以上、延長線で負けるだらうね。でも」

「はい。もし出ていたら」

「うん」

明久と姫路、そしてFクラス全員とAクラス全員が固唾を呑んで見守っていた。

その中で……。

「……………ふわぁ……。この椅子って結構座り心地が良いなぁ。思わず寝てしまいそうだ」

『……………』

俺だけが唯一スクリーンを見ないでリクライニングシートに座って

寛ぎながら欠伸していた。その事に俺以外の面子は呆れて見ている。  
今の俺は確実に空気を読んでいない状況だ。けどそんな事は気にしないで、俺は未だに寛いでいる。

「ちょ…ちよつとシユウ！ 何してるの！？」

「見ての通り寛いでいるんだが」

「そう言う事言ってるんじゃない！ 何でスクリーンを見ていないのさ！？」

「天城君、吉井君の言う通りよ。どうして貴方は見向きもせず、そんなに寛いでいるのかしら？」

明久と木下が俺の行動を注意するかのように言ってきた。

「見る必要が無いからな」

「え？ ……それって？」

「もう結果は分かってるって事だ」

俺の言葉に明久や木下、そしてこの場にいる全員が驚いた顔をする。

「な…何だ、そう言う事か。だからシユウはそんなに余裕な態度なんだね。雄二が勝つのを分かってて」

「……………天城君がそこまで余裕って事は……………まさか代表が……………」

安堵する明久に、不安になる木下。実に対照的な二人だ。俺の言葉を聞いた他の面子も同様に明久と木下みたいな顔になっている。

「ま、結果を見れば分かるさ。お？ 問題が出ているみたいだな」

『！！！』

スクリーンを見た俺が問題が出ている事を言うと、全員は一斉にスクリーンの方に集中した。俺も一応は見ておこう……椅子に座りながら。

《次の（ ）に正しい年号を記入しなさい》

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

ふむ、流石は小学生レベルだ。俺でも簡単に解ける。この様子なら出ていそうだな。

（ ）年 鎌倉幕府設立

（ ）年 大化の改新

お？

「あ……！！」

明久が見つけたかのように声を漏らす。

「よ、吉井君っ」

「うん」

「これで、私たちっ……っ！」

「うん！ これで僕等の卓袱台が」

『システムデスクに！』

俺以外を除く、揃ったFクラスの言葉。

「最下層に位置した僕等の、歴史的な勝利だ」

『うおおおおっ！ー！』

教室を揺るがすような歓喜の声。

「お前等、喜んでいる所を悪いが、とても無残な結果が表示されているぞ」

『え？』

俺の台詞にFクラスが再びスクリーンを見ると……。

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》

VS

《Fクラス 坂本雄二 53点》

本当に無残な結果だ。

かくしてAクラスとの戦いが終わり、俺達Fクラスは負けて卓袱台から蜜柑箱へと変わった。

「ア~~~~ッハッハッハッハ！ 俺の思ったとおり、坂本は最高の道化を演じてくれたなあ〜！」

「雄二iiiiiiii~~~~!!!!!!!!」

『坂本おおおお~~~~!!!!!!!!』

俺の笑い声を合図に、姫路と島田を除くFクラスの面々は怒りの雄叫びをあげて、視聴覚室へと向かったのであった。

「ハハハハハ……分かったとは言え、笑いが止まらないなあ〜」

「あ……天城君、まさか貴方……」

「坂本君が負けるのを分かってて寛いでいたの？」

「どうしてそれを言わなかったんだい？」

俺が笑っている最中に、木下と工藤と久保が椅子に座っている俺に問いかけてきた。

「あの時のアイツ等は俺が言った所で絶対に信用しないからな。それに……」

「「「それに？」」」

「霧島が大化の改新の年号が絶対に間違える程度で、勝てると思いがっていた坂本には丁度良いお仕置きだったから」

「「「……………」」」

Aクラス3名は脱力したかのように呆れていた。

「さ…坂本君はそれだけで……代表に勝てると思ってたの？」

「それ以外は間違えないって考えてなかったのかな？」

「いや、それ以前に坂本君は何故あんなに酷い点数なのかが分からない……僕にはとても理解出来ないよ」

「それは簡単だ、久保。単に坂本が思い上がったバカなだけだ」

「「「……………」」」

あっさり答える俺に、再び無言となる木下と工藤と久保であった。

#### 第十四問（後書き）

次回はエピソードですので、短くなると思います。

第十五問 (第一巻終了)

バカテスト 歴史

問題 次の( )に正しい年号を記入しなさい。

『( )年 キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震えるキミの手を握った1993』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても、間違いは間違いです。

Fクラス対Aクラス戦が終わり……。

「三対二でAクラスの勝利です」

視聴覚室になだれ込んだ明久達に対して、高橋先生が締めめの台詞を言う。

うわ、明久達は坂本を今すぐにも殺しそうな雰囲気だな。

「……雄二、私の勝ち」

床に膝を付く坂本に霧島が歩み寄っている。

「……殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！ 齒をくい縛れ！！」

「吉井君、落ち着いて下さい！」

「姫路の言うとおりだぞ、明久」

坂本の発言により明久は即座に仕掛けようとしたが、姫路が明久を後ろから抱き付く。ちよつと羨ましい光景だ。当の本人は坂本に対する殺意で全く気付いていないけど。

「だいたい、53点ってなんだよ！ 0点なら名前の書き忘れとか

も考えられるのに、この点数だと……」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆があーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！ アンタだって30点も取れないでしようが！」

「それについては否定しない！」

コラ、そこは否定しろよ。ってか明久、お前まだ自分が良い思いをしてるって事に気付いていないみたいだな。

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

「くっ！ 何故止めるんだ姫路さんに美波！ この馬鹿には喉笛を引き裂くと言う体罰が必要なのに！」

「それって体罰じゃなくて処刑です！」

姫路が必死に体を張って明久を止めている。

全くこのバカは……仕方ないな。

「あのなあ明久、その台詞は一騎討ちで勝った奴が言う台詞だ。負けたお前がそんな偉そうな事を言う資格は無いんだぞ。それに体罰が必要なら、負けた俺やお前も同様に必要だと思っが？」

「うっ！！」

俺の発言に明久は急に大人しくなった。

まあ明久が此処まで憤る気持ちも分かる。坂本はFクラス全員に期待させておいて無様に負けたんだからな……俺は最初から期待していなかったけど。

俺も少しは嫌味を言わせてもらうか。

「坂本、今回の敗因は過信と勉強不足だったな」

「……………」

「今だから言うけど、俺は始めからお前が霧島に勝てるって微塵も思ってたから」

「……………俺を信頼してなかったのか？」

「信頼？ 何それ？ 食えんの？」

「……………」

坂本が明久に言った台詞をそのまま言うと、完璧に打ちのめされていた。

どうだ坂本、今まで明久にやってた事を逆にやられた気分は？ お前はいつもそうやって明久を騙していたんだからな。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断してなければ負けてた」

「言い訳はしねえ」

霧島がああ言うって事は、当時の坂本はさぞかし秀才だったんだな。一体何が原因で坂本はああなっているのかは知らんが。

「……ところで、約束」

あ、そう言えば宣戦布告の時に霧島が負けた時の条件を出していたんだっとな。

「……………！（カチャカチャカチャ！）」

土屋が撮影の準備の為にカメラを弄っている。おいコラ明久、ドサクサに紛れて手伝おうとするな。

「分かっている。何でも言え」

やけに潔い坂本の返事。ってか坂本にしては随分と素直だ。

「……………それじゃ——」

霧島が姫路に一度視線を送って、再び坂本に視線を戻す。まさか本当に姫路を狙っているのか？

と、俺がそう思っていると…………。

「……………雄二、私と付き合って」

霧島は坂本に告白をした。

………は？

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「……私は諦めない。ずっと、雄二の事が好き」

「……これは予想外の事態だ。まさか霧島が坂本の事を好きだったとは。」

「その話は何度も断つただろ？ 他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかない。他の人なんて、興味ない」

「………どうやら霧島の同性愛趣味は根も葉もない噂みたいだな。霧島が男子に見向きもしないのは坂本以外の男子に全く眼中に無くて、姫路を見ていたのは坂本に近づく女子をマークしていたって事かな？」

あゝ良かった。霧島が同性愛趣味を持っていなくて。明久達は予想外な出来事に未だ戸惑っているみたいだな。

「拒否権は？」

「……無い。約束だから、今からデートに行く」

「ぐあつ！ 放せ！ やっぱこの約束は無かった事に……………」

霧島が坂本を連れて教室を出ようとする時……。

「ちょっと待ってこないか？」

俺が止めた。

「…………何？」

「坂本には試召戦争が終わった後、説教をする約束があつてね」

「……悪いけど、今はこっちが優先」

「そうは言ってもねえ……………」

「いや、天城！ いくらでも説教を受けるから取り敢えず助けてくれ！」

俺を救世主みたいに見てくる坂本。

どうやら坂本は霧島とデートをする事が相当嫌みたいだな。

だつたら…………。

「……………まあ別に坂本をすぐに説教をする必要は無いから、後でいいか」

説教より霧島のデートを優先させる事にした。

「デメエ！」

「……ありがとう」

怒鳴る坂本に、礼を言う霧島。

「その代わり、君の携帯番号とメールアドレスを覚えてくれないか？」

「……何故？」

「もし坂本が妙な事したら即座に連絡する為って言う理由で納得してくれる？」

「……天城、貴方はとても良い人」

霧島は礼を言いながら携帯を出したので、俺は自分の携帯を出して赤外線受信をする。

「良い人じゃねえ！！　ってか何考えてやがる天城！！」

「いやあ、そうすれば坂本がバカな事をした際には俺が手を下す手間が省けて……ゴホン！　もとい、坂本と霧島の仲を応援する為に……」

「今、サラリと本音を言っただろ！？」

坂本の言葉を見無視していると、俺の携帯は赤外線通信を終えて霧島の携帯番号とメールアドレスを取得した。

「これで良しつと。手間を取らせてすまなかつたな。では坂本とのデートをどうぞ」

「……………それじゃあ」

「待て翔子！　俺はあの野郎をぶっ飛ばさなきゃ……………！」

霧島は喚いている坂本の襟首を引っ張りながら教室を出て行ったのであった。

「……………」

「……………」

「……………」

「ハッハッハッハ、もし坂本は霧島と結婚したら絶対尻に敷かれるな」

教室に沈黙が訪れている最中、俺だけが言葉を発していた。

と、その時……………。

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間はここまでだ」

「ん？」

突如、西村先生の声が聞こえたので、俺は聞こえた方向に顔を向ける。

「あれ？ 西村先生。僕等に何か用ですか？」

「ああ。今から我がＦクラスに補習についての説明をしようと思つてな」

西村先生の回答に、明久は嫌な予感をしていそうな顔をしている。

「おめでとう。お前等は戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強出来るぞ」

『なにいつ！？』

「ほう、それはそれは」

Ｆクラスの男子生徒達全員が悲鳴を上げている……が、俺だけは違つた。

「補習はともかくとして、西村先生が担任になってくれるのは嬉しいですよ。俺としては大変に心強い」

『なんだとっ！？』

俺の台詞に驚愕するＦクラス生徒達全員。ってかお前等うるさいぞ。

「天城、入学早々に大変だったな。だが安心すると良い。俺が担任になった以上、吉井と坂本はキツチリと監視するからな」

「それは多いに助かります。俺一人だけじゃとても無理ですので」

「ちよつとシユウ！ それどう言う意味！？」

「そのままの意味だ」

明久の問いに俺はシレッと答える。

そして西村先生は俺以外のFクラス生徒達の方に顔を向けて……。

「いいか。確かにお前等はよくやった。Fクラスがここまで来るとは正直思わなかった。でもな、幾ら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てじゃないからと言って、蔑にしていいい物じゃない」

と、大変にありがたいお言葉をさしあげた。

「くっ！ 雄二が勝つてればこんな事には……！」

「あのなあ明久。説教くさい話だと思うが、西村先生の言ってる事は事実だぞ。お前は根性があれば乗り切る事が出来ると思っているだろうが、それなりの学力が無ければ進学や就職を勝ち取るのは無理だ。根性だけで生き延びるほど現実には甘くない。無論、明久だけじゃなくて他の連中にも言える事だ」

「うむ、全く持って天城の言うとおりだ」

俺の言葉に西村先生が頷く。

「吉井。さっきも言ったがお前と坂本は特に念入りに監視してやる。なにせ、開校以来初の《観察処分者》とA級戦犯だからな」

「そうは行きませんよ！ 何としても監視の目を掻い潜って、今まで通りの楽しい学園生活を過ごしてみせます！」

「……お前には悔い改めるといふ発想は無いのか。だがな吉井、万が一にも俺から逃れたとしても……」

「その時は俺が捕まえるから覚悟しとけ、明久」

「な……何て事だ！ 僕には退路が無いと言つのか！？」

バカな事を言っている明久であるが、それでも多少は勉強をする気になっているみたいだ。

「取り敢えず明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやる  
う」

「そうしてくれると助かります。遅れた授業の分を取り戻したかったので」

「……………鉄人から逃れる為には……………三カ月後の試召戦争で……  
…（ブツブツ）」

明久、お前の考えている事はお見通しだからな。それと聞こえているから、もう少し小声で言った方が良いと思うぞ。

と、俺が明久に内心で突っ込んでいると……。

「さあゝて、アキ。補習は明日からみたいだし、今日は約束通りクレープでも食べに行きましょうか？」

「え？ 美波、それは週末って話じゃ……」

島田が明久の手を掴んで教室から出ようとしていた。と言うか島田はいつの間にかそんな約束をしていたんだな。

更には……。

「だ、ダメです！ 吉井君は私と映画を観に行くんです！」

「ええっ！？ 姫路さん、それは話題にすら上がってないよ！？」

今度は姫路も参戦して来た。

恐らく明久と約束をした島田に嫉妬して話題にもなっていない事を言い出したんだろう。そうでなきゃあんな事は言わないからな。

明久は意外とモテているんだが、鈍感ゆえに気付いていない。

「に、西村先生！ 明日からと言わず、補習は今日からやりましょう！ 思い立ったが仏滅です！ シュウもそう思わないかい！？」

「『吉曰』だ、バカ」

「二人揃って同じ事を言わないで下さい！ そんな事どうでもいいですから！」

「うーん、お前にやる気が出たのは嬉しいが……どう思う、天城？」

「そうですね、俺としてもそれは大変に嬉しいんですが……」

俺と西村先生は言葉を区切って、明久と島田と姫路を見ると……。

「俺達は試召戦争をやって疲れがかなり溜まっていますし、補習をやった所で頭に入らないからすぐに忘れてしまいますよ」

「うむ、俺もそう思ってた。と言う訳で吉井、無理する事は無い。今日だけは存分に遊ぶといい」

ニヤニヤと笑みを浮かべて明久に言い放った。

「おのれ鉄人とシュウ！ 僕が苦境にいると知った上での狼藉だな！ こうなったら卒業式には伝説の木の下で釘バットを持って貴様等を待つ！」

「斬新な告白だな、オイ」

「だったら俺は木刀を持って、お前と戦うよ。本気で相手してやるから」

「うっ！！」

俺の台詞に明久は藪蛇だったと言う感じに顔を顰めた。それは俺が剣道の心得があるから故だ。だから明久は俺が木刀を持つと聞いた瞬間にあんな顔になっている。

「アキ！ こんな時だけやる気を見せて逃げようって、そうは行かないからね！」

「ち、違っよ！ 本当にやる気が出ているんだってば！」

「吉井君！ その前に私と映画です！」

「姫路さん、それは雄二じゃなくて僕となの！？」

「？？ 坂本君？ 何の事ですか？ 私はずっと前から吉井君の事を……」

「アキ！ いいから来なさい！」

「あがあっ！ 美波、首は致命傷になるから優しく……」

こうして明久は島田と姫路に無理矢理連れて行かれ教室を出て行くのであった……島田の行動を咎めたかったが。

『いやああ！ 生活費が！ 僕の栄養があっ！』

「だったら自分の生活を改める事だな、明久。趣味にばかり金を費やすからそんな目に遭うんだ」

廊下から聞こえた明久の台詞に突っ込む俺。

「吉井は相変わらず自堕落な生活を送っているみたいだな」

「ええ。俺が何度も言ってるのにも拘らず……」

「…………どうやら補習だけでなく、生活指導の方もしておいた方がいいかもしれんな」

「それは俺がやっておきますので、西村先生は補習に専念して下さい」

「そうか？ では任せよう。それと天城、お前も帰って休むといい」

「あ、はい」

と、俺が西村先生の言葉に従って帰ろうとするが……。

「ちよつと天城君、何処へ行くのかしら？」

「ん？」

FクラスやAクラスの生徒達、そして西村先生が教室から出ている間、木下優子が突然俺に話しかけてきた。

「まさかアタシとの約束を忘れてはいないでしょうね？」

「…………ああ、そう言えば」

俺が木下と一回戦をやる前の事……。

『木下さん！！ それ以上やると秀吉が死んじゃうから！！』

『放して天城君！！ このバカにはお仕置きをしないとアタシの気が治まらないわ！！』

木下が秀吉に関節技を使ってノックアウトにしたのにも拘らず、まだ痛めつけようとしていたので俺は羽交い締めをして阻止していた。

『何でそこまで怒ってるのかは知らないけど、取り敢えずそこまでにするんだ！』

『嫌よ！ いくら天城君でもこればかりは……！！』

『じゃあ俺が秀吉の代わりにお仕置きを受けるから！！ それでも無理なら聞ける範囲で木下の言う事を聞くから！』

『……………え？』

『な…何だ？ 急に大人しくなったな』

「……………あの、天城君……………それって、アタシの願いを聞くって事？」

『だからそう言ってるでしょうが』

『……………それじゃあ試召戦争が終わった後にアタシの言う事を聞いてくれる？』

「分かった。だからもう秀吉には手を出さないでくれ」

と言う事があったのだ。

「で、木下さんのお願いって何だ？」

「そ……その……これからはアタシの事を優子って呼びなさい」

「……………は？」

木下のお願いを聞いた俺は素っ頓狂な声を出した。

「あ……あの、木下さん？ まさかお願いって……………」

「呼び方が違うわよ」

「は……はあ……………じゃあ優子さん、どうして呼び方を変えろって言うんだい？」

「貴方は弟の秀吉には名前で呼んでるのに、アタシには苗字で呼ぶのはちよつと疑問に思ってるね……………それとさん付けで呼ばなくていいわ。アタシも貴方の事を修哉って呼ばせてもらってるから」

「……………わ……分かった……………優子」

「よろしい。それじゃあ次のお願いは……………」

木下……………もとい優子が言っている最中に……………。

「ちょっと優子、何か面白そうな事をしているねえ」

「あ…愛子!？」

工藤が急に現れては優子に絡んできた。

「あ…貴方! 帰ってたんじゃなかったの!？」

「いやあ、教科書を忘れて教室に戻ったんだけど、何か甘い空気になつてたんだよねえ」

「なっ!？」

工藤の発言に優子は顔を赤らめる。何で優子は顔を赤らめているんだ？

「ってか何が甘い空気なんだ、工藤さん？」

「気にしない気にしない。それと天城君、優子と同じく今度からボクの事を愛子と呼んで、ボクも修哉君と呼ぶから」

「はあ…それは別に構わないが」

「あ…愛子!？ 貴方何言ってるの!？」

「だって優子だけ天城君に名前と呼ばれるって仲間ハズレな感じがして…それともボクが名前で呼ばせる事に何か不味い事でも？」

「……………」

「……あ…あの…。俺もう帰って良いかな？」

俺がさりげなく帰ろうとするが、優子は即座に俺の顔を見る。

「……！！　だ…ダメよ修哉！　アタシの願いはまだ残って……」

「あれえゝ？　優子ってば、もう修哉君の事を名前で呼んでいるんだねえゝ」

「なっ！？　って言うか愛子も呼んでるじゃない！！」

「ボクは親しみを込めて呼んでるだけだよ」

「……………付き合いきれないから帰ろう」

優子と愛子が未だに言いあっている中、俺は教室から去って行った。

第十五問（第一巻終了）（後書き）

一巻を書き終えるまでに結構時間が掛かりました。

次回はちよつとしたオリジナルと閑話です。

それでは！！

どうでもいいけど、感想もお願いしま〜す！！！！！！

## 第十六問（前書き）

今回はオリジナル話で、凄く短いです。

## 第十六問

「やれやれ、あの二人はどうしてあんなったんだか……」

優子と愛子が言い合っている最中に俺は教室から出てFクラスに戻り、帰宅準備を終えて玄関に向かっていた。

「にしても木下……優子が名前と呼べとは意外だったな。どう言う心境であんな事を言ったかは知らんが、親近感が増したと言う事にしておこう」

愛子の方も同様にな。

そして玄関に着き、自分の名前が書かれている靴箱を開けて靴を取り出すと……。

「お、修哉。今帰るところか？」

手提げ鞆を持った和人が俺に声を掛けてきた。

「ああ、試召戦争が終わったからな」

「そうか。なら俺と一緒に帰らないか？」

「構わないが……ってか珍しいな。いつもは周りに女子がいるのに一人もいないとは……」

和人が俺と帰る時は必ずしも最低二人は女子がいる筈なんだが、和人だけしかない事に目を疑う。

「偶にはそう言う時もあるさ。それに修哉と話したい事もあるからな」

「話し？」

「今日のAクラス戦について聞こうと思ってね」

「それはもう聞いただろ？ 俺達Fクラスは負けたって事を」

「だからどうして負けたのかを聞きたいんだよ。俺達Bクラスを倒したんだから、聞く権利はあるだろ？ それに修哉は俺を倒したんだから」

「……………はいはい。じゃあ歩きながら話すよ」

俺と学校を出て和人と一緒に帰りながら、Aクラス戦について話し始めた。

帰宅中にAクラス戦の詳細を話し終えると……………。

「実に修哉らしいね。木下さんに謝罪をする為に苦手科目で挑むなんて」

和人は納得した顔をしていた。

「作戦とは言え、木下を利用してしまったからな。それにそうでもしなきゃ秀吉が酷い目に遭っていたし」

「……………本当だったらちよつとした嫌味を言いたいけど、そう言う理由なら仕方ないね。もし俺も修哉の立場だったら同じ事をするだろうし」

「そう言ってくれると助かる」

女子に優しく接する和人にしては、俺の行動は正しい判断だと思っているみたいだ。

しかし…………。

「けど代表の坂本にはガツカリだね。散々勝てると豪語しておいて最後は無様に負けたんだから」

坂本に対する評価はかなり下落していた……………当然だけど。

「Aクラス代表の霧島さんに勝つ為の策があるから小学生レベルの日本史を選択しておいて……………」

「その策は大化の改新の年号を間違えるだけしか無かったからな」

「…………よくそれだけで挑もうとしたね。その年号以外は間違えな  
いって事は考慮してなかったのか？」

「でなきゃ霧島に挑んでないからな。俺からして見れば坂本は最高  
の道化だったよ」

でも案外負けて良かったかもしれない。もし勝ってたら坂本はこの  
先ずつと天狗になっていると思うし、他の連中も同様にずつとだら  
けているだろう。

「そう言う訳で、俺達Fクラスは卓袱台から蜜柑箱になってしまっ  
たって事だ。折角、和人が卓袱台を手配してくれたんだが無駄にな  
ってしまっ たな」

「別に構わないよ。あの程度の卓袱台は大して高くなかったから。  
それに修哉にとっては負けて良かったんじゃないの？」

「…………どうしてそう言える？」

間を置いて逆に聞き返したが……。

「もし勝ってたら坂本はこの先ずつと天狗になってるし、他の連中  
も坂本と同様にだらけるんじゃないか……って修哉は考えているん  
だろ？」

「…………よくお分かりで」

和人の返答に俺は正解だと言わんばかりに頷く。流石は和人だ。俺  
の考えはお見通しみたいだな。

「伊達に修哉の幼馴染＋親友じゃないからね」

「……………人の心を読んだかのような言い方をするな。それとこの話にはまだ続きがあつてな」

「続きつて？」

「和人は知ってると思うが、霧島の噂を知ってるだろう？」

噂好きの和人は絶対に知らない筈は無いからな。

「噂？ ……………ああ。確か霧島さんは男子に興味が無く、代わりに女子が好きだつて噂だね。現にそうみたいだけど」

「実は違うんだよ」

「え？ それってどういう事？」

「霧島はな……………以前から幼馴染である坂本の事が好きだから、他の男子には興味無かつたんだ」

「……………！！！！……………嘘だろ？」

俺の発言に和人は目を見開き、信じられない顔をしている。

けど和人がこんな顔をするのは無理もない。何せ俺も最初は信じられなかったからな。

「残念ながら真実だ。それに霧島は今、坂本を連れてデートしてるし」

「……………坂本が霧島さんと幼馴染だと言う事に凄く意外だったのに、まさか霧島さんが坂本を……………信じられないにも程がある」

「何だ？ 和人は霧島を狙っていたのか？」

「……………そう言う訳じゃ無いんだけど、何か坂本に負けた気がしてでもどうして高嶺の花と呼ばれる霧島さんが坂本を……………？」

「まあ良いじゃないか。霧島が誰を好きになろうが俺達には関係無い事だし」

俺はシヨンボリとしている和人の肩をパンパン叩きながら言う。

それに俺達が霧島の恋愛に口を出す権利は無いからな。静かに見守るのが一番良いと思う。

「けど坂本は幸せ者だな。霧島さんと付き合えるなんて……………羨ましい」

「いや、和人が思ってるような展開にはなっていないぞ」

「は？ それってどう言う意味だ？」

「いや、実はね……………」

俺が試召戦争が終わった後の事を説明すると……………。

「……………俺には坂本の考えている事が全然分かん。何であんな美人な霧島さんから逃げたがるのを」

予想通りと言うか、和人は坂本の行動を否定していた。

「何で逃げているのかは知らんが、取り敢えず俺は霧島を応援しているよ。それに……」

「それに？」

「坂本の弱点が霧島だって事が分かったからな。アイツが調子に乗って何か悪さをした時には霧島に連絡すれば簡単に済むだろうし……ふふふふ」

「……………」

何か和人が呆れている顔をしているが気にしないようにする。

「そう言えば、修哉。君に関する噂があるんだけど」

「……………それって木下が俺に無理矢理キスを迫ったってやつか？」

「ああ。もう学校中で噂になってるよ」

「……………だったら和人の方で何とかしておいてくれないか？ あれは全くの出鱈目だって」

「そうは言ってもなあ……………簡単には収まらないと思うぞ。それに木下さんは修哉の事を……………」

「ん？ 何か言ったか？」

「……何でもない」

最後の辺りが何故か小声だったので俺が聞いても、和人は答えてくれなかった。

「ところでさ、修哉は弟の木下を助ける為に言う事を聞く事になっていたみたいけど、何をお願いされたんだい？」

話題を変えるかのように問いかけて来る。

「ああ、それか。お願いって言っても、木下が名前で呼べって言われたんだよ。木下も俺の事を名前で呼ぶ事になってな」

「………え？ そ…それってもしや……」

「どうした？ やけに活き活きとした顔になっているな」

優子のお願いを言うと、和人は元気になったかのように目がキラキラしていた。まるで自分好みのネタを見つけたみたいに。

「それでそれで？ 他にも何かお願いされたの？」

「………和人、随分と嬉しそうだな」

「いや、修哉にも漸く春が訪れたと思うとねえ。嬉しくなるんだよ」

「何を訳の分からん事を……ってか今の季節は春だろうが」

「いや、俺が言ったのはそう言う意味じゃなくて……」

「もしかして恋愛に関しての事か？　だったらそれはお門違いだぞ」  
何やら和人が勘違いをしているみたいだから、此処はハッキリと言  
っておく必要があるみたいだな。

「俺は木下には恋愛感情なんて無いし、優子も同様だ。それに優子  
の好みのタイプは知的な人だって言ってたぞ」

「……………」

「だから和人が思ってるような事じゃ無いと言って…………何だよ、そ  
の顔は？」

「いや、気にしないで。……………はあっ、木下さんは気の毒に」  
俺がハッキリ言ったのにも拘らず、和人は不満そうな顔をしながら  
呆れていた…………最後の小声は聞こえなかったが。

と、その時…………。

「あ、修哉の家だ」

「え？　……………ってもう着いたか」

和人の呟きに俺は目の前にある自分の家を見ると、かなり話し込ん  
でいたなと思った。

「時間があるなら、家に上がってゲームでもするか？」

「…………折角の誘いだけど、遠慮しとくよ。明日のパーティーの下準備があるからね」

「パーティー？」

また和人の父親主催のパーティーの付き添いでもやるのだろうか？  
あの父親も和人と同様にイベント好きだからな。

「俺主催の合コンパーティーだ。何だったら修哉も参加するかい？」

「…………いや、いい」

普通のパーティーなら参加しているが、合コンは興味ないからな。  
もし明久がいたら、絶対に参加するって言いそうな気がする。

「相変わらずつれないねえ。俺としては出てくれたほうが嬉しいんだけど…………」

「合コンじゃなかったら喜んで参加するよ」

と言っても庶民の俺が出るのは場違いな気がするが。

「次の機会には唯のパーティーをやるから、その時は参加してくれよ」

「ああ、分かった」

「それじゃあ、またな」

「おっ」

和人が手を振りながら去って行くと、俺は自分の家に入って行つた。

ガチャッ！

「ただいま」

「お帰り、修哉」

玄関に入ると、俺の目の前には見た目が二十代後半の若々しい男性がいた。信じられないと思われるだろうが、俺の父の天城聖也だ。

普通は家に母親がいるのだが、家の母は既に他界して俺と父さんだけの父子家庭である。

「あれ？ 父さん、店は？」

因みに父さんの職業は個人経営の喫茶店の店長をやっている。店の名前が“AMAGI”で、ちょっとした評判の良い店だ。俺も時々

手伝っている事もある。

「今日はもう閉店したよ。思ってたよりお客さんが少なかったからね」

「……………で、本音は？」

「中年層の女性客が自分の娘と見合いをしてくれと、しつこく頼まれたから」

「……………相変わらず諦めていないんだね、その人達。当然断ったんでしょ？」

「当たり前だよ。父さんは今でも妻の香奈枝を愛しているからね」

本音を聞いて俺は呆れると同時に、女性客の執念に舌を巻いた。

けど女性客の気持ちも分かる。父さんは見た目が若く、爽やかな青年に見えて女性受けが良い。母さんが他界した事を知った女性客達は父さんを狙うかのように見合いやらアタックしている事がある。言うまでも無く父さんは断っているのだが、それでも女性客達は最後まで諦めず現在も日々奮闘して狙っているのだ。

「取り敢えず父さんが早く帰ってきたのは分かったよ。ところで、台所の方から音が聞こえるんだけど……………」

「え？……………って忘れてた！」

父さんは急に思い出したかのように台所へと向かった。

余談ではあるが、家は父子家庭だから父さんは主夫である。炊事、洗濯、掃除はそこら辺の専業主婦より家事スキルが高い。俺も手伝う事はあるが殆ど父さんがやってしまうので、少しばかり気が引く。仕事と家庭を両立する父親ってあまりいないと思うが。

「匂いから察するに、カレーでも作っていたか。部屋に戻ろう」

カレーは好きだから今日の夕飯は楽しみだと思いながら、自分の部屋に戻る俺であった。

## 第十六問（後書き）

次回は3・5巻であつた、僕と暴徒とラブレターです。  
お楽しみに！！

## オリキャラ紹介2

名前 佐伯 さへぎ 和人 かずと

身長 180cm      体重 63kg

趣味 デート

特技 ナンパ（本人は無自覚）

外見 赤味が帯びた少し長め茶髪で、端正な顔立ち。

性格 真面目だが軟派

得意科目 英語・数学

文月学園2 - Bの男子生徒。

佐伯グループの御曹司で、天城修哉の幼馴染。

女子に対する接し方も巧く柔らかな笑みを浮かべて、見事に落とすプレイボーイ。

告白された回数は2〜30回を軽く超えており、今でも学園では何人の女子に告白されている。女子だけでなく男子にも普通に接するので、2 - Bではかなりの人気者。

2 - Bでは根本が代表なのだが、クラス内では和人こそが代表に相応しいのではないかと呟かれている。切れ者であると同時に、かなりの実力を持っているが物凄い気分屋。

幼馴染の修哉と戦う事に関しては必ず真っ向勝負で挑む。

名前 天城<sup>あまぎ</sup> 聖也<sup>せいや</sup>

身長 178 cm      体重 65 kg

趣味 ガーデニング

特技 家事

外見 修哉が年上になった感じで、髪が若干伸びている。

性格 温厚

修哉の父親。見た目が二十代後半と思われるくらいの童顔で、仕事と家事を両立。

10年以上前に妻を亡くし、墓前では自分が修哉を最後まで育てると固く誓っている。

名前 天城あまぎ 香奈枝かなえ

修哉の母親。既に他界している。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3704x/>

---

バカとテストと召喚獣 ～常識人はつらいよ～

2011年11月20日16時57分発行